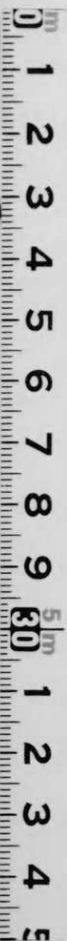


始



特 279

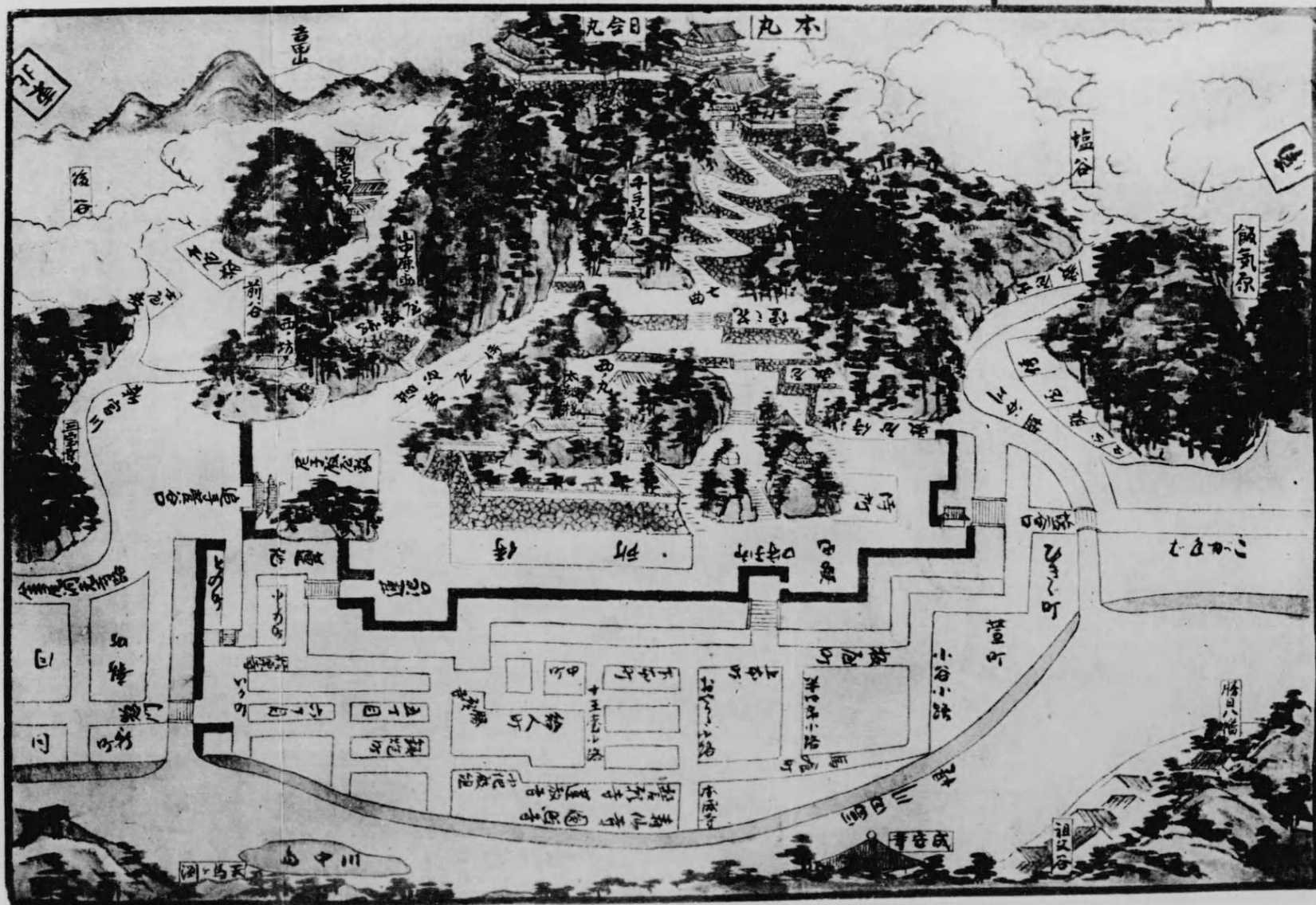
44

雲陽軍實記 全

特279-44



月山城圖



凡 例

一、雲陽軍實記は靜樂軒河本大八隆政が撰ぶ所なり其傳卷末にあり、世々河本家の秘録として子孫に傳ふ、然るに今其家系全く絶れ、靜樂軒が自筆の記録は尋ぬるに由無し、而して世間に傳ふ所の寫本數種を見るに字句に何れも多少の相違あり、蓋し傳寫の際誤寫を生じたるに依るべく、また後人が傳寫の際恣に文句を加へたるらしき跡あり、誤寫と思はるゝ節は數本を參酌して訂正し、竄入したるらしき文句は稍々抹殺したるも其疑はしきは、大抵廣瀬成安寺所藏本に則り其儘とせり、蓋し靜樂軒は素より武辨にして兵馬倥傯の間に人となれるものなれば、専門の文士にあらず、其記述文雅の上より論ずれば冗文句もあり、簡略に過ぎたるあり、慊らぬ点多しと雖も其素朴雄健なる筆に云ひ知らざる妙味あり、容易に竄入たるや否やを識別するに苦しむ事あるを以てなり

二、別に『補正雲陽軍實記』と云ふ一本あり、廣瀬天野氏の所藏なり、右はもと廣瀬森山氏の所藏にして其奥附に右雲陽軍實記全五卷社家宮脇好重所藏の原本に依て臨寫之者也とあり、其臨寫年月の記載無きを以て何時頃に寫したるものか知る

べからずと雖も、其文章原本の粗野朴素なるに比し頗る整備せり、蓋し森山氏は世々廣瀬の兵法家にして學者なれば臨寫の際原書の文章を補修し、全く別種の觀を爲すに至らしめたるものならん、此書には別に目錄系圖、山中鹿之助傳、眞木上野介弓勢之傳、鹽冶興久變化退治之事、陰德太平記より拔萃繪圖（尼子分國十一州之圖、出雲十郡之圖、富田月山城之圖）を添へて一本とせり、但し此書は原書に比すれば文章は整ひたれど、其原文の字氣凜々たるに比すれば自ら其趣を異にせり

三、卷頭の寫眞版月山城圖は右補正雲陽軍實記に掲げあるを模寫したる也、この圖に就て此本には左の如く記せり

月山城の圖繪なに人のつくれる所かは知らずとあるかたより之を得てうつしれきの圖のうち小池殿組やしきとあるをもてみれば尼子家没落後堀尾吉晴公居城し玉ひし時ゑかきつくれるものならんか小池それがしは堀尾公の老臣なりされども此時尼子没落後いまだ百年に及ばず殘廓全きを得れば圖中十に八九は證とするにたれり唯圖のくはしからざるこそ遺憾なれ、思ふにこは多少の想像を加へたる圖面なるべけれど其大体を知るに足るべし

廣瀬には尼子に關係深き鉢屋の子孫あり、其家には古記錄も所有したるべくこの圖面もまた鉢屋の所有せる原圖に依りたるものならんと思はるゝなり、

明治四十四年十一月

校訂者記す

雲陽軍實記序

觀往昔當時之軍記、漢朝記錄和解乎日本詞本朝之軍記者、元來手爾於葉加假名文、編以風雅語、起源之事儀疎而唯編者、爲顯才學、以種々之景物、增補任文花月詞之筆翰、故看其興廢、成一害、聞其存亡、成一失、

夫文字貫道之器也、無器而萬物不顯于茲某青年時、於藝州吉田戰場組討而當敵乍討留、蒙深疵、五躰爲不具、此故避職、止仕官、在隱林之寂寞、而望於窓前雲水山月、在其餘暇、誌雲陽一國之軍事、最所見眼前、亦予不至其戰場之旨趣者、自親族知音盟友書記其軍中之興廢存亡實跡、而送之、則省虛妄浮說、禁作爲文花、唯以正跡、染拙墨、曰雲陽軍實記、凡著五卷、

然^レ備藝石因伯作播州等戰少々雖^モ載^ス之雲州戰依^リ有^ル緒無^ク據^ル記^ス之

始^レ自^ミ經久切返^シ於富田月山城終^ル至^テ勝久生害^ス於播州上月城九年曆六十歲間治亂盛衰之事儀全可^キ爲^ス實錄也于^レ時天正八年庚辰三月隱子藤原靜樂軒編著行年八十七歲試^ム老筆^ニ矣

雲陽軍實記總目錄

第一卷

- 一 尼子家系譜之事 佐々木源氏
- 一 毛利家系譜之事 大江氏
- 一 大内家系譜之事 多々良氏
- 一 大友家系譜之事 清和源氏
- 一 吉川家系譜之事 藤原氏
- 一 小早川家系譜之事 平氏
- 一 熊谷家世代
- 一 三吉家世代
- 一 香川家世代
- 一 尼子伊豫守經久切返富田城并筈屋千萬歲之事
- 一 本朝鉢屋之由來并雲州筈之由緒事
- 一 阿用合戰并尼子民部少輔政久落命之事

- 一 尼子宮内少輔興久惡逆 附家臣龜井新次郎利綱強諫之事
- 一 雲州佐陀末次合戰興久敗亡 井備後山内へ被落事
- 一 毛利陸奥守元就由來 附尼子下野守義勝軍謀諫言事
- 一 藝州吉田度々合戰 附尼子義勝討死之事
- 一 大内大納言義隆石州發向 附國々味方馳加勢揃之事

第 一 卷

- 一 赤穴初度合戰 井熊谷直續被討事
- 一 再赤穴合戰 井城主三善右京亮主從戰死之事
- 一 大内義隆富田入所々陣替 井晴持入水軍勢敗走之事
- 一 尼子晴久作州發向 井自播州敗走之事
- 一 赤穴光清備後山内戰死 井石州度々合戰福屋反心之事
- 一 石州銀山城斷兵糧 附尼子晴久大勢出馬之事
- 一 高野山入道久意上阿井合戰同來島軍之事
- 一 毛利大勢攻銀山山吹城 附本庄父子反心屬元就事

- 一 赤穴滯陣城内評議 附森田島田等義心之事
- 一 藝州勢入赤穴城 附突根尾原一揆度々軍之事
- 一 元就赤穴陣中閑談 附雲州攻入向城之事
- 一 本庄本田乃木城合戰 附所々城主降禮退去之事

第 二 卷

- 一 本庄越中守經光父子被誅戮 井評論之事
- 一 雲州國士反毛利再尼子方一味之事
- 一 元就元春於嚴島并瀨淵山被修調伏法事
- 一 八ッ畦地王峯合戰 井依浮說富田勢逃走之事
- 一 白鹿城二ノ城戸大合戰 井矢文返歌之事
- 一 熊野合戰 井熊野和泉守討死之事
- 一 富田勢出張前鋒爭ひ 井白鹿の麓合戰尼子方敗北之事
- 一 伊藤の福良城合戰 井作間入道討死之事
- 一 伯州濱の目合戰 井因但之兵糧船大江奪取事

一野白一揆合戰毛利勢敗走之事

一杉原播磨守盛重と山中立原秋上等三保關軍之事

一富田惣攻三所合戰并毛利勢荒隈飯陣之事

一毛利所々人數置并再富田發向端城落る事

第四卷

一山中鹿之助品川大膳富田川中島合戰之事

一尼子家臣降毛利并宇山飛彈守中井駿河守被誅事

一宇山飛彈守父子讒死并大塚與三右衛門座頭等被誅事

一元就以謀新宮黨被誅并落書藝州似座頭之事

一新宮黨父子橫死并敬久討死落書之事

一平賀太良左衛門向城合戰之事

一元就瘡病尼子和平并以利害異見之事

一兄弟尼子和睦藝州下向并義士評定離散之事

一尼子義久公室爲尼事

一尼子勝久雲州攻入并舊好馳集攻落敵城事

一秋上伊織介富田敗軍并山中鹿之助異見之事

一所々尼子方蜂起并富田合戰之事

一小田助右衛門雲石爲加勢被上并討死之事

一隱岐守爲清反心三保關合戰并山中諫言之事

第五卷

一神西三良左衛門再尼子方一味之事

一日登合戰并市川經好三刀屋勢後卷之事

一毛利大勢攻上り多久和城明渡并布部大合戰之事

一三笠城軍并放火落城牛尾彈正戰死之事

一熊野城高佐城明渡并平田手崎軍高瀬城兵糧之事

一元就依所勞諸勢藝州下向并所々尼子方之落城事

一平野嘉兵衛伯州尼高合戰并討死之事

一山中鹿之助尼高合戰并馬田入道慶篤討死之事

- 一 羽倉孫兵衛米子合戰討死 井秋上反心毛利一味之事 一五
- 一 毛利元就病死山中鹿之助偽降參 井尼子勝久隱州落之事 一九
- 一 山中鹿之助漂泊社寺寶物押領 井因伯度々合戰之事 二〇
- 一 木下藤吉郎秀吉播州上月城加勢尼子勝久氏久生害之事 二〇
- 一 田中三郎左衛門 井熊野山物語評判之事 二〇
- 一 大内尼子毛利三家盛衰評論之事 二三

六

總目録終

尼子家系譜

一品式部卿敦實親王 宇多天皇第八王子
承平六年正月賜源姓
宇多源氏始祖也 從二位左大臣雅信 正三位參議扶義

正四位下參議經賴 從五位式部少輔章經 伊勢守高經

豐前守高信 近江守經方 此時初で江州佐々木に住す
依之佐々木と號す

佐々木三郎源秀義 定綱子息十一人 一は左衛門尉家綱二は小三郎定重三は源右衛門尉定高四は左衛門佐信五は馬淵五郎左衛門廣定六は長江常陸房定嚴七は帶刀左衛門時綱八は伊佐七郎左衛門行綱九は山口十郎賴定十は女子公義母十一は女子從二位公世母也 嫡 大原氏祖家經

嫡 太郎左衛門定綱 紋四ツ目結 二 高橋氏祖定重

二 中務少輔經高 一源太郎大夫高重二綱二郎右衛門尉高範
三女將軍賴朝に宮仕す 三 六角氏祖定高

三 三郎兵衛盛綱紋三ツ目子四人
一太郎信實法名四仁二小三郎盛季三四郎右馬
允盛則四女干將軍實朝に宮仕す

四 京極近江守信綱
京極氏祖

四 四郎左衛門高綱紋三ツ巴子三人
一太郎重綱二彌五郎光綱三左衛門尉高重

京極近江守信入道道善

五 隱岐守義清紋輪達子二人
一太郎左衛門尉政義二信濃守泰清

從五位下佐渡守滿氏

六 吉田法橋源秀紋三州濱
山門佐々木別當

七 熊慮法師

京極三郎左衛門宗信入道賢觀

佐渡判官入道道譽
此道譽武勇才智詳秀故尊氏義詮義満迄三代に仕へ
江洲中國出雲隱岐飛騨其外食地多給ふ

京極治部大輔高秀

京極出守滿秀

嫡 京極大膳大夫高詮

尼子上野介持久
號正雲寺初て出雲守護と成富田へ下る

二 尼子備前守高久
初て江洲尼子に住す依之尼子と号す
尼子氏元祖

嫡 尼子刑部少輔清定
号洞光寺殿

嫡 尼子伊豫守經久
童名亦四郎母は眞木上野介息女なり安藝備
後備中備前播磨美作出雲石見隱岐因幡伯耆
合十一ヶ國領八十四才卒

嫡 民部少輔政久
母は吉川駿河守經基息女
阿用入道戰討死

二 尼子下野守義勝
藝州にて討死

二 紀伊守國久
是より末新宮黨と云

三 宮内太輔興久
父經久と不和にして佐陀末次にて合戦し敗
亡して備後山之内甲山大和守が城に籠り生
害す大和寺は興久の甥なり

嫡 修理太夫晴久
右衛門尉と云頼死す
母は山名兵庫介息女

嫡 兵部太輔豊久
伯州にて討死

嫡 右衛門督義久
此時富田城毛利へ渡す藝州へ下向

二 式部太輔誠久
新宮谷にて讒死

一 九郎倫久

二 八良四郎秀久

三 孫四郎經貞

一 左衛門太夫敬久
右同討死

二 善四郎常久
親宮にて自殺す

三 神四郎吉久
同前

三 助四郎勝久
山中立原等再尼子を取立此勝久を大將とす播州上月の城にて生害す

毛利家系譜

二品阿保親王之御末本主王 平城天皇第二王子

音人王

大江千古
初て大江氏を賜ふ

大江維時

大江重光

大江匡衡

大江舉周

大江成衡

大江匡房

大江維順

大江維光

大江廣元

因幡守と云入道覺阿と云右大將頼朝之執權にて大江鎌倉にて爲謀師頼家實頼頼朝まで仕へ相州毛利を誅す是より毛利と號す

嫡 毛利親廣

二 左衛門尉時廣

三 左近將監季光

經 光

修理亮時親

越後國佐橋庄南條庄合て千貫領す尊氏より藝州吉田山田にて二百貫河内にて加賀田郷千貫加ふ都合二千二百貫領す是藝州毛利祖なり

毛利左近將監貞親

嫡 中務大輔廣房

毛利親茂
後改親衛と云備中守と號す

二 彈正少弼元房

嫡 毛利備中守師親

三 麻原兵部少輔實廣

- 二 坂宮内少輔匡時
- 三 左富越後守直衡

- 四 中島左馬助忠廣
- 五 福原左近將監廣世
- 六 小山刑部少輔元淵

毛利備中守光房

幸松丸
早世故家督元就（渡す）

同治部少輔熙元

嫡 毛利大膳太夫隆元

同治部少輔豐元

二 女子宍戸安藝守隆家室

同治部少輔弘元

三 吉川駿河守元春
吉川家養子となる

嫡 備中守興元

四 小早川左衛門隆景
小早川家へ養子となる
養父正平雲州神立川にて討死

二 陸奥守元就
童名松壽丸母は福原内藏大夫息女
男女十子有

五 女子備中上原右衛門大夫元祐室

三 北少輔三郎元綱

六 杉森少輔次郎元秋

四 相合四郎就勝

七 穗井田治部太輔元清

五 敷名兵部丞元範

八 毛利大藏大輔元康

九 天野六郎左衛門元政

十 藤四郎秀包

毛利右馬頭輝元
正三位中納言に至る

秀元
實は穂井田元清子也輝元の養子となる

嫡 秀就
實は輝元の子秀元の養子となる

二 就隆
毛利日向守となる

大内家系譜

東明皇帝 — 昆慶 — 牟都明 — 淹昌 — 璋明

琳聖太子ヨリ七代ノ孫大内長門守正恒 — 藤根宗範 — 茂村

保盛 — 貞長 — 貞成 — 盛房 — 弘盛 — 滿盛 — 弘成

弘貞 — 弘家 — 重弘 — 弘幸

嫡 大内新介弘直

二 大内介弘世

三 助三郎師弘

嫡 左京權大夫義弘
防長豐筑泉和州の内宇多郡領す泉州堺にて戦死す室は今川仲秋の息女

弘茂

嫡 新介教幸
豊前にて討死

大内修理大夫持世 — 教弘

二 左京太夫盛見
肥前萩原にて討死

嫡 政弘 — 嫡 左京大夫義興

三 周防權介持

二 瑞光寺 — 二 氷上別當尊光

四 孫太郎教祐

中納言義隆
從二位、陶尾張守討之

左衛門佐請持
從五位上、雲州掛屋にて入水死

五 伊豫守滿弘

周防新助義尊
備後房討之

義長
大友二男養子

大友家系譜

右大將源賴朝

能直

大炊助親秀
母は大友四郎太夫經家の女也

式部太輔賴泰

豐前守親時

出羽守貞親

近江守貞宗

式部丞氏泰
尊氏より源氏を賜る

刑部大輔氏時

氏繼

修理大夫親世
大軍者九州の内六州切取

式部太輔親著

中務太輔持直

左京太夫親綱

出羽守親隆

豊後守親繁

豊前守政親

修理太夫義古

備前守親治

修理太夫義長

左馬頭義鑑

義鍾入道宗麟

左兵衛督義統

吉川家系譜

大職冠鎌足大臣

不比等

武智磨

乙磨

是公

維友

越前介第河

陸奥守高扶

左少辨清友

讃岐介維幾

工藤遠江守爲憲

同三河守時理

嫡 駿河入道時信

右馬允入江維清

二 駿河介工藤維景
工藤左衛門祐經の祖也

嫡 工藤太夫維仲
是橋氏山庄氏久野氏祖也

二 船越四良太夫維綱
岡部氏の祖也

三 山城權守入江清定

入江右馬允景兼

右馬三良景義

吉川三良經義
駿河に住す吉川氏祖

小次郎友兼

左衛門尉朝經

左衛門尉經光

嫡 次郎經高

嫡 五良次郎經盛

駿河守經秋

二 小次郎經時

二 彌次郎經長

駿河守經見

治部少輔經信

嫡 左衛門太夫之經

駿河守經基
鬼吉川と云勇者也

二 宮庄下野守經友

嫡 伊豆守國經

三 志道原彦三郎信經

二 石ノ七良兵衛經守

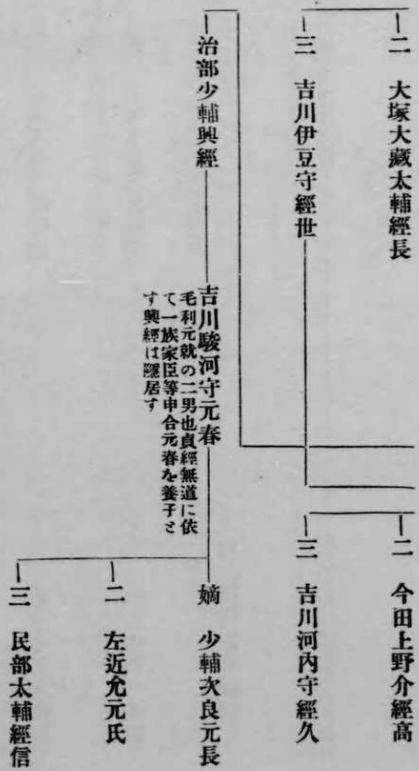
四 大塚次郎三良經方

三 國衛河内守光繼

四 茂掃部介經法

治部少輔元經

嫡 市川式部少輔經芳



小早川家系譜

一品式部卿葛原親王 桓武天皇第五王子

二男高見王

高望王 初て平氏を賜ふ

常陸大掾良望

下總介頼尊

下總太郎常遠

土肥下總守常宗

土肥次良實平 源頼信子也萬壽丸と云常宗に賜て爲養子

土肥彌太良遠平

土肥先次良惟平

嫡 三良雅平

小早川次良兵衛景平

二 船木太良左衛門經平

嫡 小早川美作守茂平

三 竹原政景

二 新庄次良兵衛季平

是小田、橘梨和木、大草、上山等の祖也

四 秋光忠茂

小早川太良左衛門朝平

同安藝守宣平

嫡 備後守貞平

二 猪熊資平

三 小泉氏平

四 浦野氏實

五 生口惟平

六 末弘明平

七 小阪將平

嫡 小早川右近將監春平

二 土倉夏平

三 東方平

四 篠原尙平

五 眞良伯耆守眞康

六 近宗廣平

七 法光遠江守時則

一八 勘解由左衛門俊平

一八 江良承願寺

嫡 美作守則平

二 巨眞寺含薰

三 梨羽時春

四 又四良太仲

嫡 備後守熙平

二 次良太郎教平

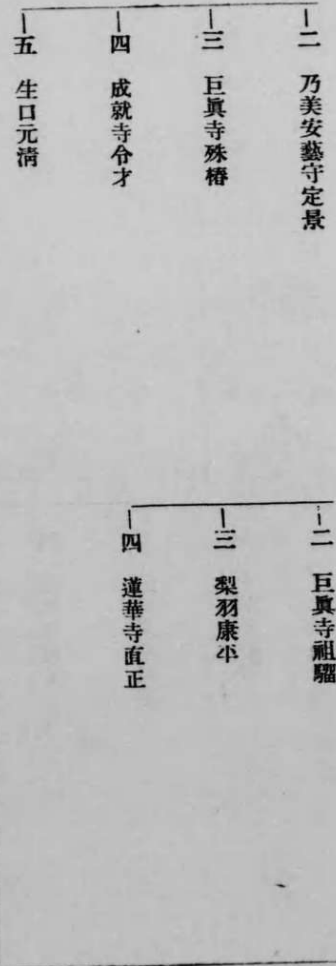
三 三島滿平

四 巨眞寺白英

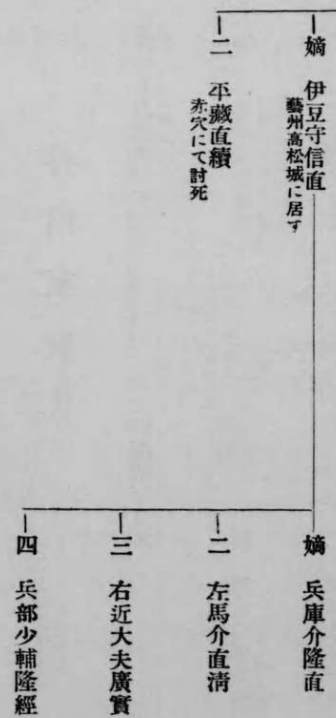
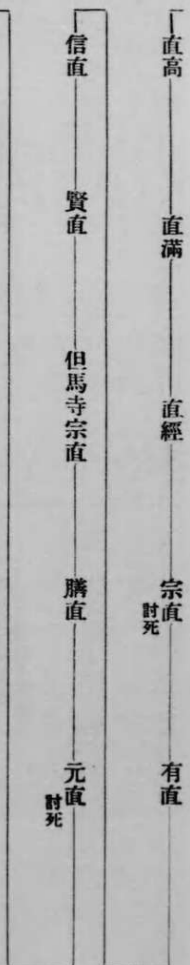
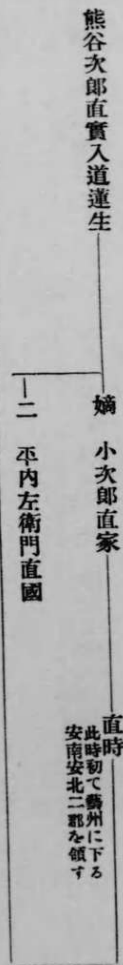
五 三島東堂据宗

嫡 美作守敬平

嫡 掃部介扶平



熊谷家世代



赤穴三善家世代

藤原秀郷二十二代之後裔三善常陸介藤原春清
 倭藤太
 應安年中佐々木旗下也也常陸國八谷城より靈州赤穴瀬戸山藤か釣城に住す
 赤穴周防守幸重

同伯耆守幸清

同駿河守久清

同信濃守光晴

同右京亮幸清

同備中守光清

幸清弟也山内職討死す

同美作守久清

同右京亮光清

實は幸清の子與左衛門云

同宮内尉元隅

此時長門萩下る

香川家世代

葛原親王之孫高望王 桓武天皇第五王子
初平氏を賜ふ

村岡因幡守良文

同五郎忠道

嫡 三浦平太夫爲通

三浦大介義明が祖也

二 鎌倉權太夫景通

嫡

鎌倉四郎大夫景村

長尾氏大庭氏種島氏豐田氏服野氏祖也

二 梶原太郎景久

平三景時の祖也

三 鎌倉權五郎景政

嫡 小太良景繼

長江四郎義景

二 權六景秀

助太夫高正

權太夫家正

香川五良經高

初は景高と云義經の經の字を玉ふ
相州香川に住す香川氏祖也

嫡 三郎經景

義景

二 清景

景光

安景

清景

行景

景春

景信

師景

方景

美作守吉景

兵庫介行景

式部少輔元景

左衛門尉光景

嫡 少輔五郎廣景

二 兵部太輔春繼

雲陽軍實記 第一卷

尼子經久切返富田城 并管屋千萬歳之事

辭職逃世閑林之月に心を澄し、情往事之書籍に記する所當今眼下に看る所の治亂勝敗盛衰の品、皆其本を尋ぬるに一物有り、一朝一夕の災に非ず、抑宇多源氏之正統、佐々木佐渡判官高氏入道道譽、建武曆應の軍功に依て將軍尊氏、義詮、義満公三代の勸賞として、江州半國飛驒、出雲、隱岐等を賜り、依之國々へ一族の中を遣ひ、代官として差下し、納收の事を司し、ひ道譽の三男治部太輔高秀が二男、備中守高久は江州尼子を分領す、爰を以て始て尼子と稱す、其二男尼子上野介持久、雲州に代官たり、則富田月山に居城し、雲隱之政道を掌握し、相續て嫡子刑部少輔尼子清定、家督を相續して其職を踏む、然と云へども生得大機にして、本所之官物租税を上收せず、我儘に押ければ、江州佐々木大に怒り、折檻再三に及と云へども、父より譲り得たる我領國官物之歩分上納すべき様なし、迎我意彌増し強かりしかば、此上は力に及ばず、迎江州より檢使を差下し、清定を追放し、又一族の中を代官として差置れる、故に清定は牢人の身と成り、漂泊流浪の内に病死す、則ち富田に於て洞光寺殿と號す、其嫡男

尼子伊與守經久、二男下野守義勝兄弟は、佐々木京極六角等の一族にさへ疎せられければ、誰か信を通し、勢り育む人もなし、母方は真木上野介か息女なれば、彼方に幽閉し玉ひけり。情被思けるは、代々の居城富田を追放せられ、素浪人の身と成り、一生を枵果ん事口惜き次第也。何卒舊好之者を語ひ、月山を乗取り、亡父が遺念をも散し再ひ家を起しなば、父が黄泉之闇路も晴ぬべしと、骨髓に徹し、心肝に染しかば、武者修行と號し、所々に徘徊し、舊交の者を集められけれども、月往年去て譜代の家子共も他國に出て、二君に仕へし者もあり、或は死去又は土民と成て、太刀長刀は鋤鋤に引替て有るに、甲斐なき者もあり、爰に龜井氏、山中氏は民間に有ながら昔を捨てず、義心有て經久を世に護立んと、色々心身を碎きしかども、催しに應ずる者稀也。經久も詮方なく、急度工面を凝し、富田の鉢屋は國中之茶筌の頭にて、部類大勢也。而も強剛の健者なれば、彼筈を頼み、不意に城を乗落さんと、龜井に能々示し合せ、頃は十二月方未富田の筈鉢屋の彌三郎嫡子治郎三郎、二男兵衛三郎、此二人は筈の總頭なれば、竊に山中か館に呼寄せ、汝等代々富田に住し、我先祖より父清定迄恩澤に預りし事定て忘る事有まじ、然るに汝等が知る通り、江州より我々を追出し、累年知行せし領分を召し放し、今如斯流浪の身と成、生涯之遺恨止む事なし、去に依て來正月元旦

に例の通り、汝等城内へ万歳鳥追に行へし、近郷の仲間を集め、大勢を催し、未だ夜の内に追手より万歳を呼り、太鼓笛鼓を亂調に打て、城内へ入込べし、最夜の事なれば、見答る事も有まじければ、銘々の得道具等用意し、着込腹巻にて、上には例の舞鶴紋の素袍を着し、一向合戦の出立にて登城せよ、我又宵より搦手に忍寄り、汝等が大手にて太鼓を打たば、定て城内騒ぎ立ち、上下男女入亂れ、萬歳を見物せん、逆走り違ひ混亂すべし、夫を相圖に搦手より入込み所々に火を掛け、焼立て煙の内に切散すべし、汝等も拔連て追手より切込むべし、一夜の内に城を落さん、事我掌にあり、是偏に汝等が功なれば、利を得て後武士同然に過分之知行を與ふべしと、念比に頼み玉へば、筈鉢屋共早速領掌して、夫より用意不怠、近隣の鉢屋仲間を何となく駆催し、年の暮るを待て、新玉の年立返る文明十八年の元旦に常よりも早く、未寅の刻始に勢揃して、剛機血氣の鉢屋共七十餘人、着込の上に素袍を着し、手槍長刀を携へ、明間に大手の門に寄添、先千萬歳を靜に祝ひけり、あら目出度や、五十六億七千万歳彌勒の出世三會の曉と言終りければ、聲々に鳥追の御祝と云や否、鼓を打ち、手拍子杯にて騒ぎ立れば、城内大に周章、一夜五十日の今宵早明たるか、例の万歳來りしを雜煮よ、酒よ、三寶よと、執々上下走り違ひ、騒ぎあへり、女童どもは先づ万歳を社見物せん、逆、二

の九三の丸より走り出で、臺所に集る折節、經久公を始め、龜井、山中、眞木、河副等七十餘人、搦手より忍び入り、長屋々に火を掛け、所々に廻り、鯨波を揚れば、すわや出火か、又は敵の入込けるやと、周章ふためく所に、煙り城中に覆ひけり、人々咽返りて物の用に立侍一人もなく、只茫然と見へければ、兩手より切込み、難立て當るを幸ひ男女の差別もなく、盲切に切散せば、大手之門を拔出で、落行者は多けれども、踏止りて夜討を防がんとする者一人もなし、城主鹽治掃部介も鎗提げて暫く戦ひ、難兵二人切伏せ突伏せ、大童と成て防戦せられ、餘煙城の内に霞みければ、相手も見留めず、力不及本丸に登り、妻子を煙の中に刺殺し、自ら首刎て、深く煙と共に消へ玉ふ、依之富田の城、經久の計略を以て一夜の内に思ふ儘攻落し、多年の鬱憤を散じ、四百五十餘人の首を城外に懸玉へば、其武威國中隣國迄も英々として招かざるに幕下に屬する者多く成にける、三ヶ日は富田の町屋に於て大宴を催し、山中、龜井、眞木、河副等を賞翫あり、執事と定め、咎鉢屋共も誓約之通り、莫大の恩賞を宛行ひ、再び尼子の元の家名を揚玉ふ、其後龜嵩城主三澤并に三刀屋、赤名古志城主や、もすれば經久之命令に不隨、敵對の色を立ければ、先づ月山に程近き三澤を第一に攻落さずんば、國中に異變之者多く出来ぬべし、連、山中の一族十八人之内、鰐淵寺の麓に塾居しけ

る山中、勘兵衛勝重を呼寄せ、汝は智謀文才世に勝たる者也、三澤を方便り、味方せよかし、若合戦に及なば、汝將として機を計り見よとて、計略を具に教へ玉へば、領掌して龜嵩に行き、たばかり果せて二年之間、彼所に止り、其後三澤が郎等、野澤大學之助、三澤右衛門、梅津主水、野尻助右衛門、武田權次良、中原金右衛門、下川瀬左衛門、杯七手の組大將を喚引連れ、七百餘騎の軍兵を富田近く引込み、伏兵を以て一夜に追討、野澤、梅津、野尻、武田等大に破れ、各落命す、依之三澤も心は猛く思へども、大勢の武士を失ひ重て籠城すべき便りもなく、無念ながら經久へ降禮を盡し、其幕下に屬せん事を乞ければ、經久は元來謀し事なれば否にも不及、君臣不變の盟を成し、仁愛深く響應し玉へば、三澤も心解け、忠義一途に思を成す、依之三刀屋、赤穴掛合、古志杯も經久之武略に恐れ、幕下に屬す、抑此經久公は若年より所々に流浪偏歴して、世の憂さ難面を身に染み、艱難辛苦を重玉ふ故に、仁心篤く、柴刈賤の男、藻刈海士迄も不便を加へ、兒女童をも親み、馴染む人傑也、去に依て常に飢たるには食を與へ、凍たるには服を玉はりける程なれば、増て君の爲に命を的にする軍士は申すに及ばず、難兵に至迄手負は疵を吸ひ、醫藥を與へ、討死すれば其子孫を寵愛し、職銀を増し、追善供養まで心を付玉ふ故、万人是に悅服し、德を慕ひ、武士たらん者は經久公の命に代ん事を

本意とす、勇は項羽樊膺をも欺き、智は張良陳平も耻べき程の人なれば、蘇州の吉川駿河守經基の請賀と成玉ふ、此經基は鬼吉川と異名を日本國に觸られし勇者にて類を集め、經久の武勇賞翫せらるゝ故也、又弟下野守義勝も兄經久に少も劣す、智仁勇兼備の大將也、専ら和漢の學才聖賢の道に志深く、軍學は大江匡房の餘流を汲み奇謀妙算殘る所なく、勇は万夫不當にして、忠義又深く、兄經久へ諫言群議無用、捨自謀師と成玉へば、比干伍子胥が胸中を得玉ふ人傑也、兄弟斯の如き良將なれば、隣國の諸候も聞連々々其慕賓とならん事を望みける故、月に増し日に副ひ、武威英々赫々たり、去れば攻れば落ち招けば降り暫くの間に安藝備後備中并美作因幡伯耆出雲隱岐播磨都て十一國を掌握し玉ふ、古今の勇將なり、唯惜らくは嫡子民部大輔政久壯年にして阿用に在いて討死し玉ふ事を、

本朝鉢屋之來由 并雲州管之由緒之事

尼子經久の語ひにて、元朝に千万歳して月山の城を落し、大功を立たる筈、鉢屋之來由を委く尋るに、當世は下賤の者として賤めども、其先祖を問へば、士農工商の内より出て、鉢屋素性外になし、爰に本朝六十代の皇統醍醐帝第八の王子、性得和漢之才に

秀させ玉ひ、専ら佛道に御歸依あつて御弱冠之御時より落飾し玉ひ、八万四千之佛經を繰返し見玉ふと云へども、唯念佛往生之一途に歸したり、連二六時中、稱名念佛に怠り玉はず、御名を空也上人と號し、古今獨歩の聖と成玉ふ、罪障深き衆生を濟度し玉ふ事、宛も釋尊の靈山の會の如し、然るに村上帝御宇天曆之末、帝關の近邊矢背大原鞍馬市原高雄愛宕之深山茂林に強盜隠れ住みて夜は洛中洛外或は畿内之中迄忍び出て、押込辻切追剝夜討をなし、万民を苦め、富裕の者其の財寶を掠め、奪取事夥し、官裁を以て警固し玉ふと云へども、元來忍に馴れたるもの故、爰に有かすれば彼所に飛び飛鳥の如くに立廻り、晝は己が住家に入て岩窟洞の内に身を潜みける故、是を防ぐに術なく、上一人より下四民に至る迄、晝夜彼が爲になやまされ、片時も易き心なし、斯る所に空也上人或夜態と白川の北の邊を通り玉へば、例の強盜共二三十人上人を追奉り、既に三衣も御着物も剝取んとすれども、上人少も動し玉はず、良ありて汝等は近來辻切追剝を業として諸人を苦め、或は切殺し、罪の上に罪を重ね、阿僧祇劫を経るとも浮む期なく不便の至り也、纔に五十年の境界を暮ん、連万劫地獄之種を蒔こそ愚かなれ、今生一旦の渡世は此の如く惡業を作さずとも渡らるべし、返すゝも愚智程不便の事は非じ、南無阿彌陀佛と唱玉へば、彼盜賊共是を

聞き、心肝に徹し、有り難く尊く思ひければ、借此御僧は御名は何と申し奉るや、仰の如く我々が家業全く善事と存じ仕る義にても無之候へども、久々流浪漂泊の身と成、糧に盡き、妻子小人等も育むべき便りもなく、據なく追剝押入等仕り、人の衣裳財寶を我物にして一命を繼ぎ候也と言ひければ、上人聞玉ひ今生の渡世日用を營ん爲計るならば、いたづら事を致さずとも、一命を繼程は諸人の助に預るべき方便を教へ遣すべし、と宣玉ば、強盜も大に歎んで肯ひける儀之さらば、歌念佛と言事を覺へて、毎日鉢瓢をたゞき、太鼓を打て、民家町家を経廻りなば、人々殊勝に思ひ、托鉢の助をなすべし、然る時は其貯へ何の不足かあらん、又一切の竹細工を拵へ、家々に賣代なして、價となし、専ら茶筌は上下家々に入用の具也、萬民悦びて調べし、我今汝等が手にて死する其夫は、少も不苦佛も魔王に眼を支へ玉ひて、戒をば破り玉はざる例あり、汝又我を殺さば五逆罪の内、第一の罪を求ん、左なきだに後世の道をも知ず、善事は少も作さざる者共なれば、永劫無變の苦痛を受ん事こそ悲しけれ、我が教に任せば後世の爲にも、念佛の利益を得て逆縁ながら廣大の善根とならん、そも汝等は前生如何成者の末やらん、包まず來由を語るべし、と宣へば、鬼も欺くべき盜賊共、紅淚肝に銘し、何れも頓首して曰、我々迎も生れ乍らの盜賊にも候はず、先年平親王

將門純友謀反之刻、彼手下に在て雲母坂の合戦より我々は洛中畿内に分散して、朝關之盧實往返の物聞、物見として都廻りに殘されし忍の者どもにて候、然るに將門純友反逆露顯して、兩將合戦に討負け、耻を鼻首の上に晒し、我々は關東四國合戦には逃れ、殉死せんにも時節後れたり、耻を凌ぎ、二君に仕ん事も、元來朝敵の餘黨なれば、再び耻辱を受ん事必定せり、一所懸命の地なれば、詮方なく、人目を忍び、久々住馴し、洛外の深山茂林に身を隠すと云へども、一命を扶助すべき貯なく、人目を忍び、夜持の盜賊と成り、名を隠し、身を縮め、限りなき悪行を盡し、眷屬の飢命を繼ぎ申也、仮令今上人の御示しに預り、惡徒を止め、念佛を唱へ候ども、朝敵の餘族なれば、早速生捕れ、再び苦みを受可と申せば、上人聞玉ひ、汝等は何れも勇猛之者なれば、心底を改め、他國より入込む所の徒ら者を制し、洛中洛外を靜かならしめば、其功を申立て、先非を申宥得さすべし、然時は平生歌念佛修行の爲め、常々都を奔走し、少にても惡き者をば追放し、又汝等が手下に附治むべし、世に恐き事なければ、夜行して人目を忍ぶにも不及、天下の民と成り、子孫も安樂に住すべし、とて直に參内ありて、一々奏聞を經玉へば、歡喜甚だ麗しく、惡に強きは善に近し、此上は都の警衛に備へ、朝敵の名を免すべし、との綸言に依て、上人も又極樂和讃を作り、章節をつけ與ひ給へば、常々

彼和讃を誦ひ、念佛を唱ひ鉢を叩き、瓢太鼓を打て、衰氣に修行し、且又無道の者を戒め、四條坊門堀川の東に居す、都人奇異の思を成し、托鉢を與ひ、茶筌を買取ければ、彼同類所々集來て大勢と成ければ、都の警固穩也、四條坊門に居餘り、后には四條五條の川原に小屋を掛け、非人を制しければ、洛中洛外大に治り、靜謐となる、依之彼等が類を川原者と言ひ、茶筌を作る故、茶筌とも云、鉢を叩く故、鉢屋とも號す、又町家之非常を糺す故、番太坏とも云也、是偏に空也、上人の御示に仍て彼の惡黨さへ善心に立歸り、万民は恐懼の苦を止め、歡ぶ事限りなし、追々五畿内迄彼の警固に恐れ、惡黨なければ、戸さゞぬ御代と成り、延喜天曆の頃を樂むは、此上人の恩徳也、其後國々の守護國司も、彼鉢屋の仲間を呼び、領内にさし置き、亂放盜賊之防ぎとなせしに、元來健者共なれば、其下風に隨ひ、山賊海賊迄皆彼の組に入ける故、郡郷を分配して、鉢屋の支配を極めけるに、其功悉く顯れ、日本國中に廣がれり、然るに此者常に勇猛を嗜み、荒き事をのみ家業となす故、末の世に至り、最も拙きものとなす、亦た止むを得ぬ事なり、斯くして雲州にも何の頃か鉢叩を分配し置れたるに、東の方に山賊起れば、早速東に早小屋を掛け、暫く住すれば、治る、西に惡黨起れば、其小屋を取崩し、菅竹木を背負て西に行き、南北亦た斯の如くにして、終に居を一所に極めず、手下の者を方々へ遣し、早小屋を掛け、其所を守らしめける故、彼小屋頭を菅屋と呼び習す、是鉢屋仲間の稱號也、今富田の菅屋は雲州一國の茶筌仲間、小屋頭也、依之經久公の頼を違背せず、大功を立てけり、又仁多郡鉢屋の中、十阿彌と近比言も、菅屋の分れにて、仁多一郡の小屋頭也、天文の初、尼子家藝州陣之時、三澤三良左衛門爲幸も、軍役に立れるが、惣して三澤が旗本に阿彌組とて、勇力拔群の鎗遣を十人宛一組として、馬廻に備へけるに、其頃一人の阿彌病死しければ、九阿彌となる、恒例の十阿彌關たり、其代りを立てん、迎家の子上下を嫌はず、選びけれども、九阿彌に肩を並へる、武勇のものなく、猶尋求めけるに、鉢叩の仲間、勇万人に秀でたる一人ありと聞き、頓て龜嵩へ招きよせ、其武藝を試みけるに、如何にも九阿彌に不劣る鎗の妙手也、則是を十阿彌と號し、十人之員を合せ出陣せられけり、所謂松阿彌、林阿彌、花阿彌、杯と云、勇士也、今十阿彌と云も、富田菅屋のわかれなり

阿用合戦 井尼子民部少輔政久落命之事

尼子經久公、月山の城を夜討して、大利を得、所々の地頭旗本の面面へ使者を以て申入らるゝは、此度富田を切返し、祖父の積憤を散し、直に入城せしむる者也、最各々奮

好に候へば富田攻之砌り、出陣玉はり候様に先達て申入べきの所、此思ひ立ち不意に起り、事急に候故、其義なく候然ば祖父子相變ず馴染を思ひ、以來も經久が幕下と成り、二心なく參勤可有之哉、又は異變に及ぶべき哉、有無を具に可承と被觸ければ、自國隣國の大小名采地食地の地頭御家人に至る迄、月山に降禮を述べ、君臣之誓約を堅め、珍寶稀財を捧げ、父祖の本領を切返し玉ふ賀儀をぞ被演けるに、伯州襲石名城主南條豊前守宗勝入道並尾高泉山之城主行松入道等、經久の命に不應、仍て山の家を退治せずんば、因伯の地頭等我に隨ふまじ、迎弟下野守義勝を大將として差向らる、然るに阿用の櫻井入道宗的は一族郎等を集めて申けるは、我數代當城を領し子孫安樂に住する事は、佐々木京極の不世の大恩なり、適京極家の代官として、尼子上野介持介當國守護と成り、下向以後は何ぞ我家を譜代之家の子同然に思ひ、万端に付て不禮而己多し、仮令旗下成りとも他家之禮儀は思べき筈なり、今經久不慮に富田を方便一戰に乘取て、父祖遺職を穢んと欲す、一戰の利に付て多年の恩顧を忘れ、逆臣經久に膝行せんや、運を天に任せ、當城に楯籠り、義を鹽冶殿の廟陵に盡さん、汝等早く木戸逆茂木を引懸け、經久が勢之寄來るを防ぐ用意せよ、幸ひ此節伯州の敵を退治せん、とて多勢東に向出陣せしと聞及ぶ、左もあらば此所へ責來る勢は

定て纔ならん、敵ねびき出すとも、卒に城外へ出る事なかれ、怯む折りを見澄し、風雨の夜討など變に應じ、機に臨み戰はゞ、仮令經久猛虎が勢あるとも、何ぞ恐るに足ん、逆終に月山へ降參せず、籠城の用意有ければ、此旨經久公具に聞て、退治延引せば、國內の者異變多かるべし、速に可討果とて、嫡子民部少輔政久を大將として、永正五年七月下旬より阿用の城を攻玉へども、嶮城に猛將鐵兵籠り居て、兵糧多く貯入れれば、中々力攻には成難く、寛兵の謀を以て敵を窮らし、逸を以て勢を討べし、迎在家數十間打破り、二重に高樓を作り、城を一片に見渡し、又歩卒を城外八方に遣し、稻を刈取り、兵糧を妨げ、折々は高樓に近習の若者を集め、管絃を稽古させらる、大將政久は天王寺淺間某が弟子に、笛の上手ありければ、夜の更る迄、毎夜吹遊び玉へば、中々城を攻玉はん事思ひも寄らず、軍務に怠り玉ふやうに見せ掛け給へども、宗的入道も軍慮に利き老功なれば、此謀にも迷はず、晝夜軍令を嚴敷し居ける處に、一夜急度思付き、唯一人城を忍び出で、三人張に十四束三ツ伏の大箭十六筋指て、彼高樓之向城篠簞の中に隠れ入り、時分を伺ひ居ける處に、高灯笼の下に當て常ならざる笛の音あり、思ふに政久は當代の笛の妙手、極て今の笛は政久成べしと聞澄し、夫を目當に大雁股を能挽て放せば、連の極みにや、政久の喉射通され、二言も云給はず、事絶玉へ

一四
ば有合ふ近習騒ぎ立ち諸軍勢之愁傷語るに詞なかりけり、舍弟國久同興久大に怒り、飯令我々を始め七千余騎の者一人も不殘此城にて討死すれば、迎最早延々には指置き難し、去來や四方より一時に攻上り、運を天に任すべしと、血眼に成て怒り玉へば、龜井川副等諫て申けるは、先づ政久公の死去を隠し、陣中靜り太守經久公之御賢慮次第に合戦をば可仕とて、頓て經久公へ注進頻りなれば、鬼神の如き經久公も大に憤り、直に阿用陣中に至り、未だ二十七や八成嫡子を先に立て、軍延引する事未練也と云へども、強敵なれば、遺恨の積る儘に卒爾之戰をなし、再び敗亡を招ん事も武略に疎き故と、後代に嘲弄せられんも亦耻辱也、此上は力不及謀を以て一戰に城を可乗落連、夫より龜井安綱、宇山飛彈守、牛尾遠江守、横道、森脇、川副等に一千余騎を指添へ、夜討に出立せ、城之大手より密に寄せ給へば、すわや夜討掛りたり、迎阿用孫六兵衛、小山八郎、鍋田久太、杯追手の城戸へ出向ひ防ぎ戦ひ、射矢は雷の如く、逆矢に飛ぶ、然ども元來夜討なれば、敵に懸合せ、死生を爭ふ迄もなく、櫓を女鳥羽に突寄せ、夜中拒み合ふ計也、斯様に討する事三夜迄打詰めて寄けれども、木戸より内へは終に一人も入る事無し、宗的思ふ様、大將政久落命の上は、夥敷く一合戰可有と思ふ處に、諸軍勢勇氣を屈しけるや、今四五日も此城を持堪へる程ならば、富田勢は引去る

べしと云ひける故、城兵皆心怠り、其後は守りも堅からず、少し油斷之体に見へければ、經久諸勢を手配りして、先づ三男興久に二三千余騎を相副へ、高さ三丈計りの竿に大燈籠を結付け、數百挺追手の麓に輝かせ、又手々に松明を燃し、數度鯨波の聲を揚げて城に向ひ、嚴しく攻入る勢をなし、攻鼓を打ち、亂調に貝鉦を鳴しければ、大山も崩れ、江海も岳と成かど夥し、城兵大に驚き、是は此間三夜の夜討に利を得ざる故、今宵は理不盡に、此城を焼落んと齒嚙して寄たりと覺たり、四方の護りを大手一所に集め、木戸逆茂木を敵に破るゝ事勿れ、戰を不好會釋て敵を勞らしめよと下知しければ、城の四方を護り居たる諸軍勢、我受口を打捨て、皆々大手に集り、矢を放ち防ぎけれども、大勢次第に城近く寄ければ、箭は此間毎夜の夜討に射捨て、今は箭種も盡き、打物にて戦んも敵はさのみ不近付、これより討て可出事も難成ければ、城内敷石などを取て投出す計也、此時を見澄し、二男國久に三千余騎を附て思ひよらざる後なる山の尾より忍入り、虛成所へ無用捨に切入りければ、城兵どもは大手斗りに心を掛け、後に敵ありとも不知事なれば、不意を討れ、十方に呉れる所に、又横道森脇等一千餘騎を二手に分け、城の左右より切り上り、小屋々々へ火を掛ければ、猛火一片に立上れる故、宗的も兼て得者の十文字鎗を突廻り、勇を振ひ、雜兵四五人突

伏せ終に其身も討死せり依之城兵一千余人炎の中に掛込み指違々々討死しければ左ながら屠所の如くなり經久も政久の怨を一戦に計略の鋒先に敢し玉ひ喜悅不斜歸陣し玉ひ頼て富田家中譜代之郎等を集め嫡子政久不慮の討死無是非次第なり我老年に及で未幼稚の晴久に家督相續させん事今戰國の時なれば無覺束思ふ也又二男國久猛勇は和漢に耻ずと云へども文才疎き故亦た當らず所詮義勝嫡家を繼ぎ怨敵を静め國家を太平せらるべしと宣へば下野守承り晴久若歳成と云へども惣領政久の嫡子也是を太守として文なる時は某心身を碎き武なる時は國久是を退け内外之後見可仕周公旦遠からず先從なり尊兄天性堅剛なれば御存命の内晴久も成人に隨ひ父祖之遺跡を繼べき器量も顯れ申べしと義を細に正して宣へば經久も最と感心淺からず家中も皆々領掌せられけり國久は新宮谷に屋形を構ひ父子四人靜に住して月山之後見と成玉ふ處に天永四年の夏の頃大内義隆公執權陶入道道麒を侍大將として三萬余騎藝州へ發向あり所々の小城を攻落し鐵山の城を取圍み玉ふ故備州藝州兩國の尼子の幕下より富田に早打を立て後詰の勢を乞ふ事頻り也是に附て龜井能登守牛尾遠江守馬田駿河守廣田川副等を先手として三千餘騎藝州へ被差下毛利吉川穴戸熊谷三吉等と會して合戰日夜止時

なし勝敗旦暮に替り大内勢も退屈して見へける所に石見國勢蜂起して近々長州へ攻入る由注進頻り成所に又九州大友宗麟龍造寺菊池等一味して近日筑豊へ切入る由朝夕之早打到來する故義隆公父子陶入道も軍旅之窮れ少からざる上東西より凶を告來事櫛之齒を挽に不異其上尼子より伊豫守經久も因伯雲美之勢を揃へ五萬餘騎富田を立て既に赤穴掛屋に充滿すと聞へければ此猛敵未だ鐵山に不着先に引拂ひ長州九州之敵を追退け重て尼子と雄雄を決せんと軍議一定して防州岩國迄を引れける此故は尼子勢も此度數度の合戰に十六島彌六左衛門岸野新兵衛淺山七郎杯を先として二百餘人討死しければ無詮方雲州へ歸り玉ふ依之安藝備後の者も毛利元就を守護職之跡に尊敬し附隨ふ事過半也元就之武威日夜に増長し尼子家の災と成基と社は知られけり又た大永六年大内義興石州へ打越し尼子方の城郭を四ヶ所攻取り三角入道兼隆が城へ攻寄せ數月合戰に及びしに兼隆弓折れ矢盡て終に大内に降りければ三隅之城を受取り猛勢を濱田に屯して尼子之出張を待處に十二月經久公石州に下向し合戰日夜にて彼れ范增が術を行へは是は子房が智を施し勝敗何れも見分難く思ふ處に若林伯耆守が武勇に挫れさしもの陶青景仁保相良江良冷泉等の大内勢突立られ陣中に引合ひ其勢を点檢す

るに、八百六十三人討れ、銳氣挫けて見へける。尼子方にも馬田、宇山の一族を始め、難兵ともに四百二十余人討死す。然る所に山名政豊此處に乘て伯州へ打て出ける。故南條、行松、小鴨等心を合せ、因幡之尼子方の城を攻落し、出雲境へ攻入る由。富田より注進急也ければ、互に久々の對陣に、退屈の折柄なれば、軍使を以て先づ此處は大將と大將との戰なり。經久公も雲州へ引返さんと宣へば、大内も領掌して、扱社軍は止にけり。然ども是より石見の國の尼子方大内に親み交り、縁につれ降禮を述べければ、石州過半敵と成り、尼子方を背きける社うたてけれ。乍去經久公、月山に有歸陣。國久に山中、松田を指添へ、伯州襲石、尾高邊に屯を張せ玉へば、山名を始め南條、行松等國久の猛威に辟易して一戰に及ばず引退き、或は山林に籠りける故、因伯兩國共に良靜謐の粧とぞ成にける。國亂を押へん爲に三男宮内少輔興久をば三千貫を玉はり、鹽冶之古城に遣し、龜井能登守が弟新二郎利綱、米原小平内、今岡彌四郎を執權にぞ添置れける。

尼子興久惡逆 并家臣龜井新次良強諫之事

尼子伊與守經久公の三男に宮内少輔興久とて、短慮我慢にして強勇不仁之人あり

分知三千貫を宛行れ、鹽冶城にぞ置玉ふ。然るに興久兼々思ひけるは、我經久が公達として外様地頭にも劣り、纔三千貫を給はりし事、親ながらも有恨、仍て一應歎き願ふて加増を可申受と思ひ立ち、松田、真木、湯原之人々は内縁の親類なれば、此人々を以て父經久に訴んとて、條々申込れける。依之松田、湯原之面々富田に至り、先づ老中の上席龜井能登守安綱、牛尾遠江守幸清に屬て興久之願を執持申されける。能登守經久公曉々と願ひ申ける故に、經久公宜ふ様は、子を見る事父に如ずとて、我興久が天性を幼弱より克々考るに文學をきらひ、假初にも無益之殺生を好み、専ら仁義に闕け、孝道を不知、我慢邪智之奢りをなす、勇を嗜む事は、項羽焚胎をも不恥、早業は、狼熊を狩て飛鳥の如し、是皆大將之器に非ず、平卒の好む業也。此故に彼を大身になさば、驕奢増長し、不義彌増て國土之煩と成り、且は當家の妨をなすべしと思ふ。故に三千貫にて鹽冶に置く事兼て汝等知る處也。父として何ぞ子を思はざらんや、小身逼迫に致さするは父が不便、彼れが爲也。然るに松田、真木等が歎き訴る段、是又據なき一途なれば、幸ひ備後國に關所之地あり、此一千貫を増し宛行べき條、此旨を興久へも、取持之面々へも能々演說すべしと宣ふ故、頓て一千貫備後國惠蘇郡にて加増せらる旨判物認め、能登守より鹽冶へ遣す所、興久猶も飽足らず、大に怒り十一ヶ國を

掌握せらるる經久の三男が、分地少分に依て歎き訴へ、他國にて漸く三千貫を玉は
りしと萬人の舌頭に懸る事社遺恨なれ、然らば此方より存分の望み直に訴ふべし
迪原手郡を都て一郡玉るべし、左なくは尼子の公達と云甲斐も無之候、某武威輝く
時は、本家月山の堅めども成申し、御旗下の押にも然るべき間、是非原手郡を御分地
あるべしと書附を認め、家の子を使者として牛尾遠江守へ先づ申入られける、幸清
書面を見て、此願は至て大切の事に候間、同役安綱などにも能々内談致し、宜く執計
可申迪使者は、旅宿に留置き、頓て能登守へ具に申入れれば、龜井聞て、是は大義の願
飯令上聞に達すとも中々太守公承許はし給ふまじ、先達て一千貫加増之時、某に向
ひ御胸中之趣き巨細に被仰聞段、逐一に其謂れ深し、勿論當國にても第一の原手郡
を望み給ふ申事、結句御怒りは生ずとも、御許容は努々有まじく候間、某に於ては此
取次は得仕間敷、此度は貴方に屬ての願なれば、御思慮次第に御執計候へかしと申
ける故牛尾も同役の勿ける訴を其身に引受け、強て言上も成難く、所詮此書付は返
すべし迪頓て旅宿より興久之使者を呼寄せ、御願之筋同役龜井へも及相談候處、大
儀の御願言上仕候ても、太守御頓着は無之趣、先頃松田殿執持之時も御詞に顯れ候
に付き、龜井儀は得取次ぎ不仕と申候、依之同役の上席を踏越し、某計り取引申べき

謂れ無之候間、御書附は直に御返進申也、罷返り此段能々可被申達とて、使者は鹽冶
へ歸しける、斯て使者一々演説しければ、興久大に怒り、憎き龜井が挨拶かな、よしよ
し今度は父の經久に直奏して龜井を申受けん、若し彼を給はらずんは、其時軍兵を
以て龜井が宅へ亂入し、此鬱憤を散じ直に富田の本城へ入り、大將貞する甥の晴久
に泡吹せん、父は老衰の事なれば、尼子之本城家を押領し、憎しと思ふ奴原に、大身之
槍の味を見せんと白眼詰て、立つ居つ忿怒し玉ふ有様は、愛染明王烏瑟沙摩の荒た
る勢なり、扱て有べきに非れは、訴訟之義に付き、龜井安綱に對し、積る遺恨有之候間
興久に玉はるべし下手人として下し給はらずんは、是非なく軍兵を以て、彼が宅へ
押寄せ、一戦の下に討取申べし、左候は品により一家中之騷動とも可相成候間、先
達放火等之御用心可然存ずる也と、書翰を認め、雜兵一人に持せ出されける、爰に興
久の乳母人子、龜井新次良迪義臣忠節の者あり、興久の強氣なる故、彼龜井を目利し
て附置れし者也、諸事に付け、幾度強諫をなすと云へども、終に一事も聞入れなく、さ
れども比干伍子胥が節義を思ひ、興久に向ひ兼々御短慮を奉諫と云へども、都て御
承引無之、然と云へども、此度の旨趣別て卒爾の御願と社存候其故は親たる御心に
て、君に御愛惑の有まじき様は無之候處、纔三千貫の此處に奉置玉ふ事深き御思惟

三
の有る故也。君天性御短慮計に非ず、孔孟之道は用るに不足。逆片端も見玉はず、鹿狩等之殺生放埒逸遊の御好あり。仁義の道は少も行ひ玉はざる故。大祿と御成候は、如何体の驕奢か思召立ち、御家の爲に惡事出來せんも計り難し。逆末の末まで思召煩はせ玉ひての御計ひ先達て加増御願の時、松田湯原の人々へ同名安綱より申入れ、備後惠蘇郡にて一千貫加恩せられ候、それを猶飽き玉はず、何ぞ能登守が申立て薄き故、成行べき願不成様に思召し、月山へ軍兵を指向らるべしとは、御父に對し合戦を企て、天地之間に御身を置くべき所なく、不孝の君に味方に參るべき者も候ふまじ、末代迄、瑣瑣の御名を残し玉はん事、殘念至極の御有様也。某千度御諫申候ても、是迄少も御信用無之上は今又斯様に恐れを不厭、御怒を不顧、存分を諫言し奉る事、安綱が一族之御疑を晴らす爲め、范増が諫死を繼ぎ、覺悟極ての諫言に候間、其恐を不知に似て候、和漢不孝之子不忠之臣、不義之妻は天道も是を亡す例、証勝て計ふべからず、御乳房を進め、襦袢の上より母が肌が副育上奉り、武勇の御生立を見奉らずやと申置し、母の所存、私に引受け不忠仕らざる様に、明暮仕へ奉る某一言も少は御聞入れ可被下し、御心を改め、御本家への忠義をも思召入れ、御一族一和に、萬端穩にし玉はゞ、太守晴久公も亦伯父の禮敬なごか成し玉ふまじきや、自然には追々

又御加恩も有べし、本家に對し謀反有ては、三寶諸天の御罰有て、入道の冥加に盡き玉はん事、目眼に覺へ候、三度諫めて身退くは古人之忠、某に於て肉眼を東門にかけ、又は胸を割れし跡を慕ひ、君の御手に懸る迄は諫め奉る存念に候と、紅涙面に洒ぎ、浮留那之辨を借り、蘇秦張儀が舌を返し、古を引き、今を談じ、漢の大和の例を立て、心を痛め辛勞すれども、興久一言之返答もなく、主従白眼詰て有ければ、不興なりける座席也。然と云へども、生得惡心に凝し、魂なれば、止事を得ずして、件の使を富田へ遣し、一向合戦之用意有ければ、龜井新次郎今は力なく、毒くへば皿ねふれと諦めて、俱に惡人と呼らるゝとも、主従の義は違へずと切なかりける忠臣なり。鳩に三枝之禮あり、鳥に反哺の孝あり、興久は鳥にだもしかざる不孝の人とかや、

佐陀末次合戦、興久敗亡備後山の中へ被落事

人として禮を不知は、彌猴之冠なりと項藉をさみせし楚人之詞、尼子興久は深く欲に超過し、父經久公を恨み、反逆の使富田城へ來りければ、太守大に怒り、父子の禮義を知らざる畜生め、諸土之誹謗する所も耻かしければ、逆討手向け、退治有べしと宣ひければ、此事興久聞て、鹽冶へ討手引受ん事も謀なきが如し、然れば先佐陀の江

二
に副て向城を構へ富田の討手を防くべき其隙に他國よりの勢を促し雄を爭ふべし連自ら城地見分之爲め佐陀へ行れける此時猶も龜井米原諫んと思ひ重罪之牢舎人一人與久の通り玉ふ道に引出し首を刎ねて獄門に梟し此者父母を打擲致せし故實否を糺し成敗せしむる者也と書て高札を立てぞ置にける與久之見ても知らず顔して打通り玉ひけるに頓て又一兩日去て右の首に立し高札の傍に又小札を立添て曰く國禮父を討んと欲す何ぞ國民父子之禮孝を知るべけんや令法は國之明鏡也曇る時は國人曇ると云文字を書添たり與久佐陀より歸りがけに此添札を能々見玉ひ從者に向て高札之添札は必定龜井が仕業と覺たり女童を方便る様之事こそ笑しけれ彼等命を捨て諫る如く我も命を父に戻し他人と成て修羅道にて思儘に合戦すべし甥を主人と敬ひ膝下に頓首して阿諛は大丈夫の好ざる所也又親を討て因果あらず左馬頭義朝は父爲義を手に掛ても義朝が子頼朝は善因報ふて神武以來なかりし日本武士之徳追捕使を玉はり武門之棟梁と成しぞや是も龜井が謂へくは父を殺したる報ひに義朝其身を没したりと是れ取に足らず平家の脊を押んと思ふ折から信頼が頼みに逢ひ江頭に船を得たる如く思て一味し謀反を企たれば軍に負て命を落す唐土にも非道之親を退け不義の君を殺す者數輩

あり生得正直律義一片にて我を諫る故其胸中の狭き事を我常に知る故に彼が事は慮外とも不禮とも不思不便之至也と宣へば近習之武士も色代してぞ歸りける斯て軍勢七百騎佐陀之城に籠置き富田討手を待居ける所に富田方より七千餘騎の兵を二手に分け湖上より兵船數百艘にて攻寄する今度佐陀に籠る勢之大將今岡彌五郎と云者は森脇長門守が新參の若黨成しが万夫不當の強勇忠義一途の若者なるに仍て經久公森脇に所望あり直臣となし與久に添て置れし勇士也其外朝山九郎太郎松枝内藏助宇山作之丞龜井五太夫杉本勘解由柴橋郡左衛門岸掃部助池田新左衛門等何れも究竟の勇者なれば月山勢七千餘と日々夜々合戦すと云へども城兵は死を期したる勇士なれば大勢の味方攻窮れて見へける所新宮黨後隊より攻付玉へば三方大敵を受け防に術なくて城兵過半討れける中にも二十餘人名ある者とも斗り湖水の波打際まで攻立て互に面を知り知られたる親子兄弟朋友又は文武技藝に付ての御弟子など俄に敵味方と成たる事なれば名を重し面を耻ぢ射れども撃てども怯まず去らず戦けるに新宮勢攻立られ方便を替へ舟に取乗り遠干潟に退き矢襖を作て射會釋ける處に陸の勢生馬比津原より鯨波を揚げ下り松の小山を後楯に取て既に城近く攻寄ければ二十餘人之者ども是を見唯今

迄討取たる敵の首共三十級を水際に投捨て、又此勢に立向ひ、槍之穂先を揃へて突掛る。月山勢暫く戦ひけれども是も追立てられ、中原國谷邊まで遠引にこそ引にける。城に殘居たる兵は、南の陸手より攻来る敵を防ぎ、破られじと指詰め、引詰め、箭種限りと射盡しけれども、二十餘人の者ども所々にて討れ、残り八人に成けるを見て、湖上之寄手、渚に舟を乗捨て、三百騎計り追取巻き射伏せけり、何れも深く戦ひ、弓折れ矢盡き、勢機も窮れければ、濱の手に集り、互に名乗りて、自害をぞ仕たりける故。最早城も堪難く成にける、此者ども元來經久寵愛の侍どもなれば、其首を富田へ送り、念頃に供養あり、淨安寺岩倉寺杯にて追福作善深切に執行しければ、家中の親類大に歡び、猶更經久公に奉公忠信をぞ勵みける。興久は佐陀敗北にも不屈、末次に若林伯耆守籠り居けるを討落し、其後富田へ不意に向ふべしと宣ふを、米原小平内聞て、若林は雲伯に名高き猛侍也と殊に味方多からん、然るを佐陀にて宗徒の者を始め過半損し、窮兵を以て末次の荒手に向候ども、容易に彼を打破ん事計難し、君此反逆思召立給ふは若林を討んとには非ず、能登守安綱に積る御遺恨有之に依て、是を散せんが爲め、慈父伊豫守公に向て弓箭を張り、五逆罪を招き玉ふに非ずや、我々も譜代之主君に矢を放ち、八逆之名を後代格上に止ん事、無念ながら此年月君に隨ひ、蒙り

たる御恩を報せんため、一命を君に捧げ、様々苦戦は仕る也、酉夢が父を打ち、天雷に其身を割たる例は御覺悟の上なれば、是非に及ばず、忿りながら諫れば、新次良利綱聞て、米原の金言其利に當て覺候、湖上を涉り、殘黨を驅集め、山路より別所へ出て、駒歸りより忍で富田へ入り、兄能登守が屋敷へ打て懸りなば、御遺恨も可散候と云けれ共、興久承引し、玉はず、是非若林を討ずんば、月山へは向ふまじと宣ふ故、笠原九良平野又六、宇山三太夫、櫻田、柳原、彼是れ究竟之者、廿四人、雜兵共に六七百人の者ども、末次之汀に散を洒さんと、死物狂に出立て、天文元年八月二十一日之闇紛れに、四方より鯨波を吐と揚るや、否や逆茂木を引拂ひ、城の裏迄攻寄りたり、されど若林少も不動、三間柄の大槍提げ、叩立て突立て、防ければ、城近く寄たる四五十人突伏せ、追立々々戦ければ、鹽冶勢戰窮して、見へける所に、湖上より、尼子下野守義勝、同紀伊守國久、父子四人、大將として、龜井、川副、宇山、牛尾、櫻井、廣田、河本、森脇以下七千餘騎、螺鐘の音は大地を響し、攻寄せ玉へば、鹽冶勢大半討れ、興久も危く見へける處に、沖の方に小船一艘、順風に帆を上げ、一散に走り来る、頓て近く成ければ、帆をさげ、渚に漕寄せ、一人の侍船端に出で申けるは、佐陀末次之御合戦危く存候、御遺恨も是迄に候間、興久公を此舟に乗奉り、一先高瀬之城へ御入候べし、經久公憤り一旦之事にて、斯様に

御勢を重られ候へども、前非を悔ひ、御説言だに申す程ならば、御慈愛之御父子、終には御和合も可有之御扱の使は平内兵衛可仕候間、早く此御船に召され候へと申越候と相演けれど、興久も此期に至り、親なれば、連説言申さん様も無本意、米原が志しは冥土迄祝着せりと返答ありければ、頓て小平内聞て、仮令其船に召され候ども、斯程に海陸より十重二十重に取包たる敵なれば、何國迄か落玉ふべき、又此儘高瀬之城へ入たりとも、大勢直に湖上より追掛け、宍道沖迄も延ん事難かるべし、併し御志の御芳情は來世にて可謝候と、小平内も申たりと、伯父に能々傳へ玉へ、と云ければ、迎之船は力なく又沖の方へと漕出す、新二郎、小平内に向ひ、御邊一人は助り、君の御供して、備後山の内大和守方迄落玉へ、某爰に止りて大勢を防ぎ、打死を遂げ申すべし、早く々と云ひければ、米原聞て、御邊は易きに付て追來敵を相手に打死し、拙者は難きを取て君の御供して落よ、とは受合難き道なれども、生るも死するも君の爲め何卒、備後甲山迄落るならば、聲舅の親みにて直通もよもや、兇略は有間敷けれども、此大勢追掛なば我連も何ぞ討死せざらんや、と、同朋の暇乞ひ盡せねば、主人を先に立て、從者七八人にて末次の山手より落行ける、然る處に軍智鋭き伯耆守、先達て其身は比津原通り抜出で、佐陀の折處に待懸る由、先手之若黨告知らせければ、米

原も十方に暮れ居ける處に、最前迎に來りし舟、佐陀の江尻に添て戻りけるを見付て、是究竟と汀に出で招きければ、彼使も兼て見知たる小平内なれば、時の間に漕寄せける、小平内少しの間、其船に乗せ申すべし、とて上下十人許り打乗りて、山陰を棹して一町計り行過て、又舟より上りければ、若林是を聞付け、二百人計り、どつと追ひ來りければ、小平内興久に向て申す、横山の内迄御見届申べくと存候處、邪智深き若林、佐陀の江に伏勢を置き、今斯の如く大勢追掛け参りたり、某は此處にて討死仕るべし、君は一步も御急ぎ、備後の國へ落行玉へと押やり奉り、主從は三世之契り、追付け未來にて仕へ奉るべしと涙と共に隔りける、伯耆守終に追付き、大槍取延べ、米原を目當てに突て掛れば、小平内飛除き、戦ふ有様、離合離散は互の道、虚々實々の死物狂ひ、どつと聲掛けて突來る大槍を、小平内長刀にてさつと刎て、かいくゝりかいくゝり、若林が身近く寄て、弓手の耳の根を深々と掬ひければ、痛手ながらも若林鎧を彼所に投捨て、飛掛て小平内を引寄せ、脇刀にて宙に首をそ切たりける、然れども若林も深手と云ひ、急所なれば、末次へ歸り、其儘落命せられけり、敵も味方も比類稀成勇者也と譽を残しけり、新次郎も末次にて討死しければ、經久公初め諸大將共に、新次良、小平内、今岡三人は古今之忠士、逆惜み玉ふぞ理也、興久は妻子を先達て、甲

山へ送遣し、其身も單身にて恙なく山内へ落玉ふ。又彼所にて後に生害せられけり。

毛利元就來由 井下野守義勝軍謀諫言事

茲に安藝國吉田の庄郡山之城主、毛利備中守興元と申せしは、先祖修理之亮時親より初て彼所に住領し玉ふ。然に興元逝去有て御子行松丸殿未だ御幼稚成故、興元之弟元就、同國の多治比に三百貫を分地して在しける間、是を本家へ呼戻し、相續せしめんと、一家中并に一族の人々詮議せし處、井上之一黨是を承引せず。若年にても嫡子なれば、幸松丸殿を大將と仰ぎ奉んと、頻りに争ひ止さる折節、幸松丸殿早世し玉ひければ、自ら元就本家を相續し玉ひ、三千貫主と成玉ふ。依之井上一黨は自然に武威劣りし故、逆心の働き萌しければ、大勢の一族なれども悉く討果されける。依て其後一家中悉く一和して、元就の御子男女十人有けるが、嫡子隆元は本家とし二女は穴戸隆家を簪とし、三男元春は吉川の養子とし、四男隆景は小早川家の養子と成り、五女は備中の國上原元祐を簪に取り、六男元秋は杉の森と號り、七男元清は穂井田と號し、其外元康、元政、秀包とて枝葉殊の外廣く、又元就多治比に在せし時より、防州山口の屋形、大内中納言義隆卿之御烏帽子子と成り玉ば、其威風、隣國に曜々とし

て、所々の地頭も旗頭の如く、肥馬の前に塵をこり、尊敬する事少からず。然るに安藝備後は經久公の幕下にて、代々雲州富田の指揮に隨ひけるに、元就本家へ移りける砌り、始末共に富田へ通達もなく、將軍家へ訴へ、其御教書を以て相續せられける故、尼子經久公、晴久公の憤怒大方ならざる處に、彼の井上が一族の内井上豊後守同何某二人、藝州を欠落して富田へ來り、さまゝ諷言誠しやかに申ける故、晴久公の怒り、雪の上に霜を加ふが如く、尼子、毛利の不和の元とぞ成にける。抑富田の太守、尼子伊豫守經久公、老病日に隨ひ重らせ玉ひ、寢食稍衰へ、針灸湯藥の療治も叶ひ難く、日夜に類少く見へ玉ふに、舍弟下野守義勝、二男紀伊守國久、嫡孫右衛門督晴久公を初め、御一族の人々并に古老の家臣、常に御側を不離、看病、介抱に身心を盡し玉ひけり。然るに晴久公、經久公の枕元に寄添へ、此頃藝州毛利大江元就兄興元が跡式を我儘に押領し、防州大内義隆に親みて、武威を備藝石に震ひ候に付、吉田三千貫の地を當家へも斷らず、自由に領する事、野心の第一也と、兩度使者を以て折檻仕候處、公方より御教書を被下、相續致す上は、尼子家へ何の訴にか及んどの返答、安藝備後共に、數年當家之幕下たるに、今又背て我意之働き、打捨て置くは、吉川、小早川、穴戸、熊谷、新宮、三吉等を初め、當家に隨ふ者は候まし、某幼年の砌り、父政久に離れ候と云へども、祖

父尊公の後見として成長しけるに、尊公御老病衰窮之時、反心の者を差置候はば、追々十一ヶ國の幕下離散申べく候間速に退治仕候て、國々之幕下見懲しに可仕とぞ宣ひける。大伯父下野守聞玉ひ、其怒り最至極に存候。元就當家の幕下として數年恩澤を蒙りし事は打忘れ、黨を結んで大内に親み、不義差置難き憤りに候。併し元就は弱年より文學を好み、軍術奇計を嗜み候へば、輕々敷卒爾に御合戦は無用たるべし。殊に今吉川、小早川、穴戸、熊谷等、智なり勇也、親み強く、既に藝州一國備後半國は敵方と成上は容易ならず覺候也。愚老退て思ふに、石見國津和野三本松の城主吉見大藏正頼は大内一味にして、當家に隨はず候間、某に一萬騎指副られ、石州へ向ひ本庄、福屋、佐渡、小笠原等を催し、正頼を退治して、則ち三本松の城に籠城し、長防二ヶ國の境を押へ山口へも攻入へき勢を見せて、石州一國を能く鎮め、武威を輝し申べし。又國久を大將として三澤、松田を右陣左陣とし、一萬騎を以て先陣として備後へ遣し、隨ふべき者は味方之着到にして背く者は不日に押寄せ、打潰し、降る者は人質を取て赤穴、富田之城中へ送り、三吉邊に要害を見立て、暫く軍威を示しなば、藝州の者の内味方に不背者は馳加はり、敵と成べき者は旗を立てし。又晴久には、因伯作州の勢、二萬計りを引率し、赤穴表に滯陣ありて、右京亮幸清と、米原平内兵衛とを左右の軍將

とし、万一備後合戦難儀に及か、又は元就等藝州より討て出る事あらば、幸に赤穴、米原を以て後卷させ、新宮之者共と挟み責めにし玉ふべし。元就軍智賢き者なれば、小勢にて他國へ討出る事能はず。籠城せば、味方の者石備を治め、跡に恐るゝ敵はなく、糧道は雲石の道開け、萬事自由なる時に臨みて、吉田郡山へ押寄せ、向城を構へ、味方の陣營を堅ふして、臨機應變に戦をなさば、必定一戰に元就を討果すべし。元來小勢なれば、定て其時大内へ加勢を乞へし。大將義隆、家臣陶などは、急ぎ猛勢を以て救んと云べけれども、冷泉、相良、江良等の智臣は、山口勢を透しなば、津和野より義勝、盧に乗じて山口を襲へしと知て、毛利を救ふ事能はず。唯山口の備計りに軍智を費し申べし。某も山口勢、吉田へ出る跡へ攻寄べき疑勢をなし、却て味方の兵糧を通ずべし。是れ根を深し、臍を堅ふするの妙計也。然る時は元就も施すべき謀もなく、防ぎ戦ふべき加勢もなく、自滅せん事必定なりと宣へば、經久公苦しき聲を上げ玉ひ、義勝が軍配我心に能合へり、小勢成連、元就を侮る事なかれ。我は既に今終焉に近ければ、亡き跡にて下野守を我と思ひ、軍事政道も彼が諫を用て、分國を治めよ。併し彼も老年なれば、又新宮の國久を後見とすべし。最國久父子は文なき故、政道は僻事も有べし。軍務は鬼神の如き剛勇の者也。行末迄も新宮等軍事に備へ、一家和合して親み深く

せば、國々の幕下背く事有まじ、元來此富田を切返さん、迎我と義勝と兄弟身心を勞し、堅凍素雪之冬の夜も山野に肌を凌ぎ、九夏三伏之炎天にも、甲冑に汗を拭ひ、千苦万辛を経て、兄弟同功に大敵を追降しけれども、我は兄故大將と成り、義勝は弟故副將と成る、嫡子政久阿用にて没して後も、世を義勝に譲んと云しかども、幼稚ながら嫡子なれば、是非汝に相續させよと、義を勵し諫めける故、汝如斯大將と成ければ、此恩義必ず忘却する事勿れ、既に鹽冶興久當家を取んと企て、我を恨み、父子の情絶て備後山の内にて戰死す、其兄ながらも國久は異心なく、汝を太守と仰ぎ、其身は新宮谷に在て後見す、家の亡ぶべきは一族の不和にあり、能々此旨を存じ、親類を勞り尊敬して我儘の驕奢を慎べしと、遺言と共に細々晴久公を教訓し玉ふ、或日井上豊後守罷出で、晴久公に向ひ、元就反逆日々に増長仕り、斯様に捨置れ候ては、備藝石之御幕下は、夜に増し、日に添へ、御敵對仕るべし、勢の増長致さる先に、片時も急ぎ候て、御追討候べし、然るに、義勝公の御軍慮は、餘り大義にして、廻り遠き御裁配と社存じ候、毛利吉川、小早川、兵戸熊谷に、國人等少々相加り候とも、三千騎には過ぎ候まじ、御勢之一萬も指向られ候はゞ、假令元就、太公伍子孫子が術を得、韓信、孔明が奇計を巡らし候とも、一戰に打破り、某等案内仕り、御魁を仕る程ならば、毛利家中にても反

心の者も少々可有御座候間、裏切させ、郡山を追落ん事、方寸に覺候と、高言たらゝ進めければ、元來血氣之勇將なれば、井上が詞を誠に思ひ、不日に藝州陣とぞ觸られける、此時經久公は最早、心地も寝々在し、まさゞれば、有無の御指揮もなく、義勝公聞玉ひ、井上は元就に一類を亡され、其遺恨を當家の武威を借て散せんと思ふ故、毛利退治を指し急ぐなり、何ぞ彼等が如き小人の謀を誠として大義を誤り玉ふな、能く軍機を調へ、藝州へは赴き玉へと、涙を流し、色々制し玉へども、兎角承引無し、先ずる時は、人を制するに利あり、後る時は人に制せらるゝと、宣ひて用意怠らず、其上伯父にも、御老体の御苦勞には存候へども、國人等を御催し候て、跡より御下り玉るべし、とて祖父經久公之重病をも見捨、天文九年九月上旬、自身大將として、一万余騎を引率し、富田月山の本城を御出馬ある惜ひ哉、下野守義勝公の金言空くなる事を、伍子胥死して吳亡び、范增死して項羽亡ぶ、義勝公吉田に戰死有て、尼子家の柱石碎たり、と後に社思ひ知られたり、

藝州吉田度々合戰 并尼子義勝討死事

尼子右衛門督晴久公は、大伯父下野守の諫言を不用、浪人井上が軍配を誠とし、一萬

騎を引率して、九月上旬、富田を打ち立ち、日を経て、藤州吉田に着玉ふや否、町家民屋を不殘焼拂ひ、攻寄せ玉へば、毛利家にも、多治比にて小身たりし譜代之者ども、此比吉田に於て大身と成り、何事か有れかし、高録を玉はり、妻子安樂に住するに至れる御恩をも報ずべしと、兼々思ひ儲し折なれば、渡部太良左衛門、赤川十良左衛門、坂新五左衛門、栗屋縫殿、允同掃部、允井原四郎兵衛、志道五郎左衛門、岡清四郎、桂左衛門、尉國司右京進、口羽十良兵衛、福田式部丞、市川經吉、兒玉三良左衛門等を先として、其勢二千餘騎、取物も取あへず、蒐合せ、火花を散して戦ける、富田勢は旅行に人馬窮れければ、一日も足を休めずして向ひける故、先手の者、戦屈して見へける所に、渡部太良左衛門と名乗て、先手之大將、本庄岩見守と渡り合ひ、秘術を盡して、打合ひけるが、本庄馬を乗倒しける隙に、太郎左衛門掛寄て、鎧を入れ、終に首をぞ討取ける、又赤川は高橋と戦ひ、是も鎧下に高橋源之丞を突伏ける、然處、渡部源十郎と云者、無二無三に赤穴が陣に突て入れれば、右京允是を見て、誰かある、あれ討取れと下知しければ、家の子、片路、守山、松田等、蒐合せ戦ひける故、源十郎鎧疵二ヶ所手負けければ、井原が郎黨、樋爪と云者、蒐付け立塞り、暫く支へけれども、兩人共に討れけり、日既に暮なんとしければ、毛利方も戦窮れ、城内へ堀と引入ける、尼子方も三塚山に引陣を取り、互に數

ヶ所の大籌を焚き、用心稠く守りける、然るに郡山近在五里七里の者、其夜中に馳集り、夜の中に三千騎計りに成ける、尼子方には一日は人馬を休めん、逆一向合戦の支度も無き所へ、巳の刻に、毛利方より夜討して、處々にて鯨波を上げ、一文字に切て巡りけれども、昨日の合戦餘り手痛く働きける故、殊に不意なれば、十方を失ひ、周章ふためく計りにて一戦にも及ばず、風越山阪、豊島邊迄敗軍す、爰にて敵味方共に十餘日を徒らに暮しけり、其間に吉川、小早川、穴戸、熊谷、杉、新庄、河立の者ども、毛利方へ加りて、一萬餘騎と成ければ、尼子方にも後陣之大勢來て三萬餘騎と成にける故、數ヶ所に向城を築き、方便を替へ、攻寄せれば、毛利方にも爰彼處に出張砦を構へ、禦ぎ戦ける所、越山の向城も終に打破られける、小早川中務少輔と、杉次郎左衛門と兩勢合て晴久公の向城、豊島へ面も振らず、眞丸に成て切て入を見玉ひて、元就より加勢として二千騎計り、坂新五兵衛と栗屋縫殿允とを兩大將にして、横鎧を入られければ、湯原二郎左衛門、幸宜、牛尾、神西の者ども六七百騎にて是を防ぎける、何れも深手を負ひ、二郎左衛門は終に討ければ、牛尾も、神西も、晴久公と共に豊島の本陣を打捨引て行き、毛利方にも宗徒の者廿七人迄討れ、手負は其數を不知故、双方相引にける、尼子方には、一方の軍將と頼れたる湯原を始め、數百人を失ひ、勢機衰廢して見へけるに

吉川、穴戸、熊谷一手に成り、新庄、阿立の者どもを引率し、所々の向城を踏破る故、尼子方には一ヶ所も利を得ず、故に方便を替へ、諸勢を一手にして吉田の郷中へ亂入し、前後も顧みず、眞當に郡山へ切て入ると、働き玉へば、元就公三千餘騎を随へ、自ら眞先に進み玉へば、三千騎曳々聲にて、晴久公之陣處を目掛け、退勢をば駈立々々、攻鼓を入れ、大將と大將との對陣なれば、死人手負を踏越々々、揉合ければ、晴久公の膝元近く切入ける處に、雲州三澤三郎左衛門爲幸と名乗り、敵を薙伏せ、突伏せし時の間に、元就の旗本十三人迄討取ける、是に支へられ、毛利勢少しく怯で、見へける所に、三澤猶も進んで、十阿彌を一様に、黒皮威しの鎧を着せ、前後左右に引連れ、元就公を目掛け、面も不振、突て、蒐る、爰に井上七郎迪、先年一類誅戮せられし時、此者計り、其咎を免れ奉公せし者なるが、三澤に立向ひ、暫し戦ける所、元就公の馬廻りより指詰射ける箭を、三良左衛門七筋迄受ける、故、身体弱り、終に井上七郎に首を搔れけり、斯の如く、九月上旬より所々の戦に、毎度尼子方敗走しける上、防州山口より加勢として、陶尾張守隆房、一萬餘騎にて山中と云所に陣勢を飾り、軍の機を考へけるに、尼子勢も本庄高橋三澤、其外究竟の先手五百人迄討れたれば、勇氣屈し居ける處に、富井首崎、長尾の邊に陣取り居たる尼子勢、既に崩れたりと聞へければ、此處に乘じて、山口勢計に

て、晴久の本陣へ切入べしと思案して、明れば天文十年正月十四日寅の刻に、晴久公の陣所へ押寄せ、三度凱歌をぞつと上げて、手痛く戦ひける、爰に尼子下野守義勝は去冬富田を出陣の時、此度吉田戰場は最期と思定め、鎧着ながら甲は高紐に懸て、兄經久公の閑所に入り、兄弟今生之對面は是迄と覺候、尊兄之御老病日を追て、頼少く見へさせ玉ひ候間、某も藝州にて、潔く討死仕るべし、少々後れ先き立ち赴くべく候、御互に年齢過たる身に候へば、命相果て候義、露計りも惜に非ず候へども、晴久短慮未練にして、大將の氣疎く、血氣計りの勇猛にして、仁義に欠候へば、幾度某諫め候ても承引なく、我意の政道往々、多く候間、我々死命に及はば、遠からざる内分、國亂て終には當家滅亡仕るべくや、當家を再興仕る爲め、千辛万苦を凌ぎ、十一ヶ國迄取立て中興仕り候、其の功業空く泥土に朽果ん事、是而已死期の遺念に候、と兩眼に泪を含み、經久公の御手を取て、首途の盃をぞせられける、經久公は左右の御返答もなく、打ち萎れさせ玉ふ御有様にて、兄弟分れ玉ひけるを見る人涙に沈みけり、去るにより、此陣中にて、義勝は討死と究め玉ふ故、よき相手を引受ばやと、兼て心掛玉ふ折節、陶尾張守、大勢にて一散に攻蒐れば、是ぞ望む處と思ひ、態と他勢は晴久公の後卷にし、救ひの爲に遣して、手勢七百騎計りを、前後左右に備へ、四ツ目の旗を中央に持たせ

連錢蘆毛の太く逞しき馬に乗玉ひ威風堂々として進み玉ふ所に陶が備へ近くなり馬を真先に進め大音聲を上げ尼子伊豫守經久が舍弟同下野守義勝爰に有り若かりし時化生をさへ討留たる者に候へども老年に及び腕劣り申べく候よつて我首取られよと呼はり玉へば陶聞て尼子一家之隨一義勝を討留たらん者は恩賞外々に百倍たるべしと云ければ深野平左衛門掛出で突て廻りければ義勝汝は何者ぞ尾張守を出せと大長刀にて刎玉へども深野も透さず突て來たる處を高股を救ひ玉へば平左衛門馬より眞逆様に落けるを見て宮川左近立隔て透間もなく突ける鎗を引たくり暫く引合ひ揉合ひける老の腕ながら力は昔に劣り玉はず馬人共に引寄せ上帶つかんで投玉へば若黨共折重り宮川も深野もついに同じ枕に討れけり義勝味方を見玉へば七百騎の手勢今は七八十騎に討なされ頼切たる郎黨共も所々に討れければ長刀を逆様に突立て快氣に打笑ひ今日の模様にては修羅にて戦たり其未だ某が力量は昔に劣らず去らば美事に腹切とて薙刀ひらりと投捨て玉ひ腹十文字に掻切て春の雪と共に消玉ふ諸手の合戦も尼子方難儀に及ける所に義勝討死し玉ふを見て大將を打捨て主親をも見捨て右往左往に逃散れば晴久公も力なく敗軍を狩り集め漸く千騎計りにて本國雲州へぞ歸り玉ふ有様見苦し

かりし敗走也義勝公の軍配の如く手配して藝州へ寄玉はゞ大内殿より加勢も來ず荒手入替々戦玉ふ程ならば毛利家三千騎に國人共四五千騎集りたりとも三万餘騎の味方を以てなごか勝玉はざる事は有まじと人々後悔に社思ひけれ經久公も翌年八十四歳を一期とし終に逝去したまへば此後は万事晴久公の胸中斗りに成敗を執行はれ給ふべしと万人眉をひそめけり陶尾張守は一戦に大利を得頼て同名五良左衛門を使として元就へ申さるるは雲州の大敵殘なく敗走仕り候味方此勢を冷まさず直に追掛候はゞ赤穴三刀屋邊にて追着き合戦に及べく覺候間尼子の根葉を斷ち申べき時節到來致し候急々御馬を出され候へかしとぞ申ける元就聞玉ひて今度尼子大勢を以て不意に押寄せ既に元就が運命旦夕に逼り候處屋形様より陶殿を以て御救ひ被下候故怨敵終に敗走仕り満悦之至りに存ずる也跡より追ひ雲州へ攻入ん事は某が存念に非ず唯分國を追拂ふ事を本意と存じ罷在候と返答あれば亦引返し申入らるゝは某一万騎の勢を以て赤穴より追入ば元就公には御國人合せ五千騎有べく候間石見國へ向け搦手へ御廻り候はゞ元來正頼は大内方に候間石州一國は乃に血塗らずして御方に參候べしと強て申入られけれども元就領掌無之故陶も山口へ歸られけり

大内義隆石州發向 并國々味方馳加り勢揃之事

天文十年正月十四日、尼子右衛門督晴久、藝州吉田郡山より敗走の後、毛利元就防州山口へ使者を以て、近々雲州御發向候は、安藝備後の者、一方を玉はり魁仕るべしと様々申進め有ける折、節備後國三吉修理亮廣隆、石見國福屋治部少輔隆兼、備後高野入道久意、吉川治部少輔興經、山内新左衛門尉隆道、宮野若狹守、石州本庄越中守經光、出羽主膳正助盛出雲には三澤三良左衛門爲清、三刀屋彈正左衛門久祐、宍道遠江守正隆、河津民部左衛門久家、多賀美作守道真等以上十三人、尼子を背き、大内へ信を通じ、近々富田へ御出馬候て、尼子を亡し玉ふべし、我々大小身共に、只今迄の所領に一倍づゝ加恩を給はり候は、御先を仕り、案内の儀に候へば、月山を押潰し、多年御本意達し奉るべし、我々十三人、御味方に參る程ならば、雲石備後に殘る者は候まじと條々軍約之連判を以て、山口へ申遣す、陶尾張守取次を以て、義隆へ進めければ、先達て元就より進め申さるゝ上、又候、尼子譜代の旗本斯様に、味方に志し篤き此節、雲州發向の思召立有て、可然存じ候と勸めければ、相良遠江守と、冷泉判官隆豐、詞を揃へ、申さるは、敵國へ遙々踏越し、雲州へ至る事、其意を得ず候、安藝備後を攻取り、降人

は人質を取りて、此山口へ引取り、夫より石州一國を能々切治め、然後追手搦手を赤穴、神西の兩城と定め、出雲國中へ攻入られ候て、社糧道は自由にて、跡に恐るゝ敵もなく、假令長陣に及ぶ共、其失なかるべく候、陶殿御勸め之通り、卒爾に雲州へ攻入なば、萬一跡を隔られ、兵糧の道絶るか、長陣に及候は、累年尼子旗下之武士新參に、味方へ附候ても、異變仕る者も多かるべし、其時如何捌き可申や、殊に赤穴は入口の堅城、數年右京亮在城して、兵糧軍器澤山に貯へ、一千餘騎を抱へ置き、最も勇將なる故、尼子方無二の忠臣也、其上月山より加勢として、人數を加置候へば、輕々敷も雲州へ赴玉は、味方敗亡の基たるべく候間、根を深くし、底を堅ふして、大敵には御向ひ候へかし、と兩人同心に諫ければ、陶尾張守頻に争ひ、去年晴久猛勢を盡し、郡山へ向ふと云へども、元就の小勢に打負け、當正月迄々逃去て、諸軍士氣を屈しけるに、社十二人之連書も來り、殊に古今の勇將と呼ばれたる經久も、八十四歳の老病重り、去年十一月十三日逝去せらる由、敵氣怯みし折からなれば、此機に乗じて、雲州へ發向せば、則天の與ふる幸也、取ずんば却て、後日に當家の災と成べし、と面色替て云ひ募れば、義隆も此義に得心有て、翌年天文十一年正月十二日、正四位下兵部權太輔太宰大貳多々良義隆公、并嫡男左衛門佐從五位上晴持同道にて、防州山口を出馬ある、一味同心

の人々には、叔父大内太郎照弘、家臣杉伯耆守重政、陶尾張守隆房、同安房守隆満、内藤下野守興盛、同彈正忠隆世、杉入道宗參、同民部太輔重光、同豊後守興運、同二郎左衛門尉元家、同勘解由判官隆相、同治部少輔隆康、同十郎重輔、冷泉判官隆豊、吉田左馬助隆量、弘中下野守興勝、同三河守隆包、同中務少輔隆佐、仁保右衛門大夫隆慰、青景越後守隆時、三浦將監毛利與三郎、黑河近江守隆像、同刑部少輔隆尙、岡部右衛門尉隆景、河田掃部頭興之、同紀伊守、同丹後守隆盛、飯田石見守興秀、貫下野安隆、仲野田隆方、天野藤内隆良、豊田美濃守狩野入道弘中左衛門大夫江良、彈正忠興綱、其他鷲頭、朝倉、杉森、町野、神代、桑原、已下三万餘騎、安藝には毛利右馬頭元就、同備中守隆元、穴戸雅樂頭隆家、平賀太良左衛門隆宗、吉川治部少輔興經、小早川又太郎正平、天野六良興次、熊谷兵庫助信直、弟平藏直繼、香川左衛門尉光景、山懸筑後守、今田上總助經高、飯田越中守義武、己斐豊後守新里掃部介等、備後二宮若狹守、同左衛門尉三吉修理介廣隆、杉原宮内少輔忠興、野間刑部太輔隆實、木梨治部太輔元隆、高野山入道久意代修理亮吉原藤左衛門佐之、久木新右衛門尉山内新左衛門隆通、池上佐渡守、多治部藏人志賀太郎兵衛等、我も々々馳參す、同三月初旬、石州の出羽二ツ山に陣を据られ、暫し滯陣して、國中勢を催し、兵糧等万事手合有て、石見國益田越中守藤兼、福屋式部少輔隆兼、佐波出雲

介隆連、小笠原彈正少弼長矩、同長雄、本庄越中守經光、羽根彈正忠都、野驥河守岡本大藏大輔、久利清太兵衛同佐馬介、吉川和泉守、都治三河守、周布河上等馳加りて雲霞の如く、中にも杉入道宗參、都賀の渡りに舟橋を涉しければ、さしもの江の川安々と諸軍勢を渡し、前陣後陣、中軍救應都て八隊に備へ、其隊伍盛々堂々として、四方四五里が間は、神社佛堂、民屋の賤が伏屋迄陣所ならざる尺地もなく、先陣都賀、鹽冶、深峠邊に堅陣を張り、中軍の指揮を今やくと待居たり、然れども諸大將色の異見有て、軍機一決せざれば、斯る大軍緩々として軍もせず、長陣に及なば、内變出來、或は不慮之同士喧嘩等も有んかと思ふ人も多かりける、

雲陽軍實記 第二卷

赤穴初度合戦 并熊谷直續被討事

斯かくて赤穴あか城なには富田ふより加勢かとして、田中三郎左衛門を軍將ぐんしやうに定め、其勢そのせい一千餘騎
去年こより指籠さしこられ、城主じやうしゆ右京亮幸晴さうけいりやうきんはる譜代ふだいの郎徒らうだを集め、評議へうぎ區々まろくなる中に、田中が曰
某それが此所このところ、加勢かとして罷越まかりこ候義ごうぎは、平生國賊こくさく、境目きやうもくを犯し、且つ諸地頭しよちやう反心はんしんの押おにて候處
此度このたび毛利大内四五萬騎まうりだいないしやうごばんきにて出張しゆつちやうの由、當城やうじやうの士卒しそと、某それがが勢せいと繼つぎに二千餘ふたごりを以て
支さへ申さん事、万に一も勝利しやうり得難えがたく覺候はやく、早く月山げつさんへ注進ちゆしんあつて、晴久はるひさ公直こうちくに御出馬ごしゅま
有あか、又は因伯いんはくの御勢ごせいにても大勢おほい加勢か有之ありかの趣おもむきを催促せいき申べく、若もし此處このところ一度破やぶれば
出雲一國しゆんごく即時そくじに敵てきの爲ために虜こと可成なりと申ければ、右京亮さうけいりやう聞きて仰あやせ、最もつとに候、早々富田ふへ
訴うへ、太守たうしゆの異見いけんも承うけたまはり申べし、先夫せんぷ迄までは、城門じやうもん堅かたく閉籠とちこり、大敵たいてきを軍旅ぐんりよに勞あつからし、退
屈くつ致いたさすも一方いほう便べんなり、と宣のたまへば、幕賓まくひん吾鄉あが大炊おほい介け承うけたまはり、御二方ごにほう之軍議しゆんぎ、否いな申すは恐多おそ
く候へども、老人らうじんの役やくに候へば、御免ごめんを蒙かかり、且大勢おほいの傍輩はうはい達たちも御用捨ごようしに預あづかり、某それがが存
じ寄より一通りとほ可申上まかりと、兩人ふたりの側近そばく罷出まかりいで、是より富田ふへは二十里にじふり餘あま、御加勢ごかを待
ども、日合ひあひ延候のびさうべし、假令か月山げつさんより加勢かあるも、道中みちちうに河津かづ、兵道へいどう、三刀屋さんたうや、三澤みさわ掛合かあ等

之如き、反心の大敵も有之候へば、富田勢を支んと、要害に取籠り、通路塞ぎ候はゞ、何日此所へ參着あるべき哉、難計し、又大内勢、三月より石州に在陣して、今は何も用意一々備り申べく間、今夕明朝當城へ押寄せんも知れず、何の道急に備を定め、合戦の用意仕り、然るべく存候、某年罷寄候へども、一手の先鋒をば給はるべく候、六代己前の御先祖常陸介春清公、尼子旗下と成り、當城へ御下向の時、我々が先祖も御供に罷下、二百餘年の間、尼子、佐々木の厚恩を、主従共に蒙り候事不輕、是迄度々の合戦とは違ひ、此度は當城へ引受たる事に候へば、一入の合戦不仕ては、尼子家へ本義たゞず、其後月山の加勢來着あらば、猶以て銳機を増し、日頃武勇の優劣を知り、知られたる傍輩の内過半、敵と成り、向ひ候はゞ、彼等が思ふ耻も候間、晴々敷手柄の程も御顯し有て可然存候、と義を盡し、憚る處なく申ければ、城主幸清聞玉ひ、汝が存念的然の理也、武門之尊べき所也、仮令此城を枕とすとも、數代恩顧之義は捨られず、左らば追手は某手勢を以て防べし、則汝先鋒たるべし、搦手は田中殿勢にて御固め有べし、近年は尼子經久の旗下と成り、他に異る厚情を受け、莫大の所領を安堵仕る事、斯様の時の爲也、と勇に勇んで用意有ければ、田中を始め、諸軍勢今や敵の寄するかと待掛たり、斯て六月七日、熊谷平藏直續三百騎斗りにて拔け掛し、先赤穴在家に放火し

城に近寄ける間、城兵も足輕を出し、箭軍少々して、頓て城主右京介幸清、眞先に進み打て出で、追手搦手一同に軍始り、追つ返しつ、戦ふ處に、田中三郎左衛門手勢を引分け、三百騎斗り引卒し、熊谷が跡へ取切り、引包んで攻立ければ、城兵も、大炊介も二百騎にて正面に打て下り、散々に戦ふ故、熊谷も堪へ兼ね、一方を打破り、這々五六町引ければ、城兵案内者、吾郷大炊介、今日の先陣也、と名乗掛け、敵を討事、數知ず、松原片寄の者共も、吾郷討すな續け、と云ふ儘に、追懸ければ、熊谷迎も逃れぬ處と、取て返し、右京亮の五百騎斗りにて、控へ玉ふ眞中へ、是社今日の大將也、差違て大内殿の勸賞に預り、祿を子孫に傳へよと、一文字に切て入り、討洩れたる若黨共、五十人斗りを左右に隨へ、大音上げ、赤穴殿の勇剛は、兄信直兼て物語に、承及候、殊に此嶮岨の城を預り玉ふ事に候へば、よもや敵に後を見せ玉ふ間敷、今日は、大内尼子初合戦に候へば、雌雄をも試み、兩陣の軍勢に目を覺せ可申、と呼りければ、幸清聞て、よくぞや宣ふもの哉、昨日迄俱に尼子の幕下、傍輩、今日敵味方と成り、互に晴軍仕んと、長刀打振り、進み給へば、熊谷も五十餘人を眞丸にして、幸清目掛け切散す、死物狂ひの直續なれば、流石の幸清會釋兼玉ふ處に、大炊介、田の畦、畑の道を傳へ、蒐付け長刀にて追立々々討取ければ、熊谷勢大半討れ、最早荒川與三兵衛と云者、主従二人に成ければ、猶

も追込み、追出し、遅越と云處にて、熊谷討れけり、頓て首取て若黨に持せ、荒川と大に戦ければ、大炊介が家の子、小田の某鎗下にて荒川を討つ、都て今日大炊介自身に首を打事九級皆甲附也、幸清主從勝軍をして一息繼て居ける處に、三吉修理允熊谷難儀に及と聞て、いざ後詰せよと呼はりて、福屋山の内官、庄原門田、高野山、吉川勢馳着け、二千余騎一手に含で切懸る、右京亮城の尾崎にて是を見付け、すわや後詰の大勢にて攻寄るぞ、横箭を射よと下知しければ、弓手の者、二百人斗り、小高き處より指詰め、散々に射掛れば、跡なる勢は射すくめられ、攻寄る事不叶、引足に見へける處に、三吉踏止り、右京亮と顔見合せ、貴殿とは室峠を隔て、隣國會盟の知音、淺からず骨肉兄弟同然なり、赤穴へ敵寄事あらば、三吉より後詰せん、三吉に事あらば、赤穴より救はんと、交り深く契りしに、思も不寄、今日は敵よ味方よと立分れ、日頃の誓約は此城外之露と消けるよ、此上は他人を交す、潔く、面的勝負、通れぬ處と聲を掛けり、赤穴聞て最なる一言哉、必ず後は見せ玉ふなと、三百騎斗り、切先を揃ひ、難立ければ、三吉勢すわや例の大長刀引や、と後より浮立て、引色に見へける處を、幸清長刀は若黨に渡し、三人張に十三束三伏の大箭を取て放し玉へば、不過修理介の馬先に立たる郎等の胸板を射貫き、仰に伏して死にける、猶も箭繼早に、追取々々放しけるに、矢庭

に三人射伏て、又元の四尺五寸の長刀打振り、三百余人颯と懸込み、難立てれば、夕立空の稻妻の光耀く有様は、敵の眼に、燒鐵指如く、弓も打物も振捨て、味方の陣へぞ引にける、跡勢其箭筒に射立られ、我先にご引ける、故城主右京亮諸勢を一つに集め見玉へば、今日討死の者二十三人、手負百人斗り也、頓て手負は城に入れ、八百余騎を引率し、搦手の勝敗覺束なく、速城麓迄行玉へば、物見走り來り、搦手も勝色には見へ候へども、軍は未眞、最中と訴へけるを聞て、一息をも休まず、搦手を救はんとして、馳向ひける有さまは、さながら韋駄天の如くなり、

再赤穴合戦 付城主右京亮主從戰死事

田中三郎左衛門、富田勢一千余騎を率ひ、搦手を堅め、諸卒に向ひ、我當城押への爲め此處に久々籠城す、待得て今日對戰に及ぶ、何れも粉骨を盡し、太守の御威に賞せられよと諫立てる、爰に本庄越中守、大内一味の面々に向て、此度大内義隆、當國御發向は、我々連書を以て進め申に付て、御出馬有ければ、石州、備後の者ども、社目立つ軍をば勵むべし、力攻に成るとも、此城を攻破り、富田への道開き申べき事、肝要也、各必ず心を一致にして、勇を顯し給へと諫ける故、出羽主膳、誰々も左社存候とて、石見勢に

防長の勢を入交へ、二千余騎中にも本庄出羽は案内の爲め先鋒に進み、城戸近く社押寄り、然るに右京亮幸清下知にて足輕二百人斗り、鐵砲二十挺に弓を交へ、城の向ふ谷奥に伏置き、追手にも搦手にも戦ふ味方難儀と見る時、不意に横箭に入り、敵の跡より打て出よ、連伏置たる處に、先手の本庄出羽八百騎斗りにて、城の逆茂木を打破り、田中が陣近くゑいゝ聲にて、面も不振、攻寄ければ待兼たる三良左衛門敵を目下に見受け、六月七日早朝より午刻下り迄、箭軍隙なかりけるに、出羽助盛、真先に進み、斯様に寛々戦ては、何日此城を落すべきぞ、皆打物にて切登れ、と下知しければ、八騎の者ども、聞の聲を上げて攻上る、城兵は敵を手元へ呼寄せ、時分はよきぞ、大石、大木を落し掛け、小石を礮て、投付々々支へけるに、寄手甲を碎れ、足を打たれ、詮方なく、手負死人を打捨て、麓へ颯と引ければ、引替て山口勢、千二百騎、先陣敗軍するぞ、代て續け、と里川近江守の下知に隨ひ、透間もなく、三の城戸を攻破り、二の丸近く攻上れば、田中勢、弓二百張、矢先を揃へて逆矢に散々に射させける、被き連て上る敵、二箭三箭鎧に受ざる者もなければ、色めき渡て見へける處を、飯田石見守采配打振て、死人手負を踏越へ上れ、と下知すれば、既に二の丸も乗越す勢ひに見へけるに、田中諸卒に向ひ、打物にて薙落せ、と云より早く、自身先立て、從者六七十人、鎧さき揃ひ、突

掛けば、寄手の大勢、合ひ向せ、爰を先途と操合へども、城兵戦ひ窮れ、死人手負二百人に及ければ、不叶して城内へ引入んとする處に、向の小谷口より伏勢、弓鐵砲を揃へ立て、横矢に搏立て、射立する程に面を向くべき様もなければ、下地は窮れ果たり、不意の横矢に射立られ、死人勝て計へられず、纔かと云へども、鐵砲を防ぎ兼ね、右往左往に逃散ければ、城兵是に力を得逆るを追て、討取々々戦ければ、右京亮、蒐附け今日互に手詰めの合戦仕候故、追手も搦手も勝軍仕候得ども、小勢の味方、手負死人に滅候上、日も西山に暮き候間、いざや引取り、城門堅く閉ぢ、今宵は休息申べし、敵は四万余騎、討とも生捕とも盡る期候まじ、味方は二千余りにて、廣野の戦は好み難く候とて、打連れ、城内へ入にけり、偕今日、兩手にて敵を討取る事、二百七十余級、手負數知ず、又味方に討死の者は十三人、手負二百五十余人也、殊に右京亮も鎧疵三ヶ所、田中も二ヶ所、手負たれば、敵の逆るを幸ひ、相引にぞせられたり、抑鐵砲と云物、唐土には上古より有之と見え、たれども、我朝には知る者なし、先年大内義興公、官領職の時、九州種ヶ島より初て將軍に献ず、最此道の細工人、少々添渡りければ、ども年來日本軍亂の折節なれば、國々に行届かず、此節諸大將の家にも、少は有之と云へども、用る人稀也、筒先に立つ敵よりも、打者却て恐れけると也、然るに尼子家にも、纔か有之内、赤穴は

大敵を防ぐ要地なる故此度秘して唯二十挺田中に附屬せられしと也、大内家にも此度旗下に纔五十挺斗と承る、依之國々地頭御家人方には、一挺も用ざる方多く有之由去れば此二十挺にて、二千余騎を一時に打散せし事も、此鐵砲之德也とかや、斯る程に赤名手合の合戦に、大内方敗軍し、諸軍勢、石州近邊に會合して、評議様々に日數を過し、七月十八日、陶内藤の人々、諸大將に向ひ、當正月山口を出馬有て、安藝備後石見は大方平定すと云へども、敵の本國雲州は、此赤穴の一城にさへ、如此日數を重ね候は、兼て味方に志を寄する者ども、飯令多賀、諏訪部三澤等なるども、又心替り如何様の野心か、挟み申べし、所詮力攻めに此處を押潰し可然や、又打捨置き、出雲國中へ入べきや、面々異見具に承り度し、と被申ければ、相良遠江守聞て、赤穴瀬山は嶮城にて、右京亮は音にも聞へし、剛強の精兵故、他國境、赤穴と神西は一騎當千の軍士共多く、楯籠り候、此上熊谷殿の二の舞を心掛け申さんより、謀を以て和順に取扱ひ、味方に付け、其後出雲の國中へ打入べしとぞ申さる、陶隆房申るゝには、三刀屋三澤、穴道、河津、多賀とも迄、一味に加りしかど、右京亮斗り一城をも顧みず、尼子無二の忠義を思ひ、金石の如き勇者なれば、飯令扱を入たりとも、中々平和有まじ、此上は力攻に一軍仕らでは、後日の災と成申べし、此藤ヶ釣の大城落たりと聞ば、出雲一國の臆病侍

皆戰ずして降るべく候と申さる、毛利元就聞玉ひて、大將は旗本勢四五千斗り殘して、諸勢四万斗は城の四方より一同に攻上り、討ども、突ども退かず、一死賊と成て攻上らば、飯令、焚喰、周勃、關羽、張飛が如き者ども、籠たりども、纔二千余の敵なれば、四万余の味方にて、攻落さぬ事は、候まじと勇々しく宣へば、諸勢異口同音に、此義可然と勇みけり、依之七月廿七日卯の上刻、四万余騎、城の四方より、関を作り、攻上る事夥し、平賀、陶吉川杯一手に成て、五千余騎、藤ヶ釣の大手の門を力攻めに、押破んと、ゑいゑい聲にて上りければ、右京亮一千余騎を以て、真先に下知して、防戦ければ、大内勢手負、死人、大勢出来ければ、麓を指て、颯と引しが、又取て返し、元の攻口へ詰寄ければ、赤穴、田中一手に成て、大山の崩るが如く、押下せば、大勢彌が上に重り、落る所に、吉川興經は西國一の大弓挽なれば、平賀と一手に成り、散々射ける故、城兵過半手負となり、城内へ引ける處、吾郷、大炊、允、松原、采女、若黨どもを八十八斗り、木戸口に支へ、陶勢と大に戦ける故、陶大勢成と雖も、死もの狂ひの吾郷、松原に切立られ、又麓へ引にける、大炊、允、武利、元の處へ立歸り、味方を見れば、兄弟と契りし松原、采女、唯今討れ、我身も數ヶ所手負たれば、若黨六七人を呼集め、何日迄か戦べし、今日實盛の如く、討死の吉日也、殊に相手は陶尾張守、能き腹切る時、速、頓て一首を詠じける、

梓弓は十字あまりに引詰て射ては歸らぬ道にこそゆけ

と、一首の辭世を認め、四人張の弓に平籠を添て、此弓は我祖父三善駿河守久清公御賞賚有、石州吾郷より當城守護の爲め、在番せよと、加恩地を被下し時御威狀に添玉はりし弓なり、我八十四歳にて唯今討死仕る、梓伊豆守利朝は、先日深手を負ひ、城に残し置きたる間、此籠を與へ、辭世の和歌と今日討取し敵の首とは、大將幸清公へ可指上とて、若黨二人を城へ返し、腹十文字に切て死にけり、若黨ども一所に殉死せんと云ける處に、小田新五郎申様、此場にて御供仕は安けれども、未だ伊豆守殿并孫達も兩人御座候間、此御先途も見届け参りて、社、兎も角も成べしと諫めける故、泣泣追腹を止め、城中へ入にける、此時、陶も百余人討れ、吉川平賀勢にても七十余人、都て寄手の内、六百余人討れける間、諸大將も、士卒も忙然とあきれ果て、如何様相良が云し通り、人數を損し申事斗りにて、熊谷が二の舞仕る事の本意なきよと後悔を社せられけり、斯て四方の寄手、皆元の陣所へ引て手負を養育し、一息繼てぞ居たりける、然るに右京亮は晝の戰に、毎度諸卒の先へ進み、手詰の働きをなしけるが、陶が軍中より射ける箭に、喉を射られ玉へば、急處故、城中へ引て、頼て其儘卒去ある、城中大きに患へ悲めども、詮方なく頼て、田中が謀を以て、大内家へ降参願はれ、使者を遣す、大内

家には右京亮逝去とは夢にも不知、攻あぐみ居ける其中へ、降参使者來り、不思議喜びなれば、兎角の返答にも不及、然ば明日、城を受取り幸清にも對面を違べしとて、攻口々々を退て、軍勢萬歳を誦けり、使者歸り、降参成就の事を演ければ、頼て田中を初め、諸軍勢老若男女を勞り、手負を養育して、一群々々密に城を出し、就中大炊介武利が一族一人も残らず、召連れ落行ければ、漸々明方に油來の奥に着、田中思ふ様、本街道を通りなば、多賀諏訪部落人、逆支へ留め、通り難き事も有ん道を違へて、間道へ通るべしとて、油來より門坂の麓を山越して、仁多郡福原に一宿し、又龜嵩通りせば、三澤が支、三澤恐しさに、大東筋と心掛け、廿九日の黄昏に、深淵の上の薄氷を違れて、富田の鹽谷迄落行き、皆々安堵の思ひを成せり、誠に女性幼稚の者、又は九死一生の手負等を介抱し、二十里斗りの行程を辛苦して、上下三千人斗り、月山の城に入るは、皆な田中が作略降参と伴りし故、恙なき事を得たり、晴久公田中に向ひ、兩眼に涙を催し、汝久々赤穴に在城し、城主右京亮と心を合せ、大敵の機を辟き、打死の者どもの妻子迄、恙なく引連れ歸りし段、神妙の働き祝着せり、幸清主従が戰死、我一臂を失ひ残念なり、世治るに於ては、幸清が梓に、拔群の恩賞を致すべしとて、都て赤穴籠城の者共の妻子皆以て、當城にて養育させん、大内さへ追討せば、早速本領歸すべし、先討死

のものの祭りを念比に行ふべし。連三郎左衛門を稱美有ければ、田中涙に暮れ暫く返答もなく、良有て面を上げ、武士の軍陣に向ひ、命を不惜、苦戦仕る事常の習にて厭ひ不申候。併此度四万五千の大敵を受け、纔に二千の味方を以て、然も敵に城を包れ、後詰救ひの頼もなく、難戦仕る事剩へ右京亮大勢の人数を損し、其身も戦死致され候處、某斗り生残り、本城に歸り、太守公に見參に及び、御稱美を受け、申事面目なく覺へ候。全く我臆病には候はず、大勢の人々を助度存し、是迄存命仕候幸、清追手に戦ひ討死せられ候へば、某搦手にて戦死仕候て社君も忠臣とは可被思召、傍輩も義士成と思ふべし。此時君より御加勢五千も一万も被指下候はゞ、斯様に敗走は仕間敷。此義無本意奉存と赤面して申ければ、晴久公詞を和げ、汝が恨み最至極せり、去ながら教願の使者も存の通り、其折節、山名赤松、虚に乗じて、因幡美作へ討て入り、新宮黨の者ども、當城に有程の軍士、悉く指上せ、唯我旗本馬廻り千騎斗りにて當城を守居たり。若我一千騎を引幸し、出馬せば、國中の反臣、河津、矢道、三刀屋、三澤等、空城の時を得跡より廻り此城を乗取ん事必定也。此故に赤穴加勢致さる段先達て申送りし通り、無據故なり、定て折々義隆國中へ攻入べし。我は唯當城にて待受け、防戦を遂べき外、軍慮更になし。と田中に厚く恩賞玉はり、休息せよと宿所へ歸されけり。

大内義隆、富田へ攻入、所々陣替 附敗走之事

斯て七月廿八日、赤穴城中より降幡を立てし連、大内軍には大將も士卒も、午の刻迄待けるに何の音信もなく、不審に思ひ、諸軍勢出て城を見れば、幡一本も不立、物靜にて煙さへ見へざれば、唯だ鷗島城の上を騒ぐ斗り也。偕田中赤穴等、方便て降參と披露し、早落失たりと見ゆるぞ。兵野に伏す時は、行雁列を亂すと、兵書に有は、劒戟、刀槍の有處、行雁も恐るゝが故也。城の上、諸鳥の飛行する事は、寔に無人城也。城に入て見よ。連、我逸足に乘込み見れば、人一人も不居家財取散したる斗り也。依之、寄手覺悟の外に、安堵の思をなし、頓て、陶下知して曰く、當城に人數少々在番させ、兵糧運送の便りとし、近々出馬有べし。と云ければ、毛利元就、陶内藤、熊谷は其日、油來の和泉村邊に要害を見立て陣宿す。廿九日早朝に、義隆公猛勢を引率し、同小和田口に陣取り玉へば、後陣は、頼原谷、藤崎八幡の社中、敷波、佐見、長廻邊に充滿す。然るに此處に少々滞陣有べし。連、諸陣所に堀を構へ、鹿垣を結び、向城の如く拵へて、暫く人馬を休め玉ふ故。油來の郷は、尺地も不余、陣所と成り、九月上旬迄、滞留有て、手負の疵、杯を養生せられければ、血氣の若侍等、物淋しき儘に、犬追物笠掛杯を射て、徒然を晴せとて、小和田口

より藤崎迄の間、數ヶ所を的場に構へ、日々射られけり、斯る處に三澤三良左衛門爲清三刀屋諏訪部彈正左衛門久祐、掛合多賀美作守、宍道遠江守正隆、河津民部左衛門久家、廣田櫻井其外、伯州浪人南條豐前守宗勝、行松入道等、油來の陣中に馳參し、義隆公に見參す、夫より多賀三刀屋を案内として、義隆公父子は三刀屋地王峯の要害に御陣を居られ、先手の面々は大河を渉り、日の井の郷に着陣す、後陣は大櫃山鍋山の山河に添ふて充滿す、爰にて富田城の虛實を窺ひ、物見の者共の一左右を待れけるが、十一月上旬には乃木濱、津田村邊に陣替あり、折節堅凍素雪の風烈く、依之義隆公馬潟に陣替有て、杉陶、内藤、其外、旗本勢は大庭出雲郷に充々たり、毛利は白濁、熊谷、香川、三須、飯田等は八重垣、古志原に陣取り、吉川は平原にて越年す、此時、大内の老臣相良、武任の曰く、尼子累年恩顧の者多き中に、赤穴、右京亮は古今の忠士也、老臣大炊介と俱に潔よく討死し、然ども大敵千人余討取り、主従共に敵ながら、適れ忠臣也、斯様殺せし事、夫に引替へ、三刀屋、掛合、三澤、宍道、河津等が反り忠して、油來迄、遙々御迎えて、恥をも不知、万人に顔を晒し、來られる事の面惡さよ、弓折れ、箭盡て降參するさへ、本意とはせざるに、未だ敵を引受け、一戦もなく、聞恐して譜代、恩顧の家に敵對す

斯様の者、味方に付ても、安堵ならず、看到の當にはせざるが、増なり、と密に語られけり、斯て天文十二年正月、富田城惣攻あるべしとて、四万五千餘騎押寄せ、日夜々合戦に及びけるが、動もすれば、寄手、利を失ふ故、相良が觀察に違はず、彼の返り忠せし十三人の内、十人は又富田へ歸參し、月山城へ入り、即時に大内を敵にせられけり、多賀美作守と宍道遠江守とは、義隆敗軍の供にて、直に神門通り、山口へ行ける故、尼子より松田右近將監等に討手を玉はりて、宍道を押潰し、多賀の跡は二男通則、并に郎等共を白髪へ欺き呼で詰腹切せ、其名跡を斷絶す、右十人の面々、再び尼子へ返りし内變に付ては、義隆の軍威衰へ、淺間しき敗走となり、嫡子晴持殿も、揖屋の沖にて入水有り、名を北海に沈め玉ふ、小早川正平は、嶋が巢山の麓迄敗北して、則神立川にて主従三人、浮名を流し玉へば、河津は己が居城に引籠り、尼子方の討手、立原、宇山を引受け、防戦して、潔く討死す、依之長防、藝石の諸軍勢、這々の体にて己が様々逃去り、出雲一國の返臣は、誅戮せられ、漸く國中泰平の粧を成しけり、此時相良が油來にての金言少も、差はず、返忠の人々を當にして、大崩れを執られけりと、笑はぬものはなかりけり、

尼子勢作州發向 附從播州敗走の事

天文二十二年の春の比赤穴の城主三吉備中守光清は、兄右京亮幸清戦死の後、遺跡無相違給りて、衣掛山に在城し、武威盛に有ける所に、幕賓吾郷伊豆守を招き、此度三備州のもの并に播磨の者共、富田の命令を背き、安藝毛利に心寄る事數多あり、依之太守晴久公近々御出馬ありて退治せんとの廻文頻り也、然るに我兄右京亮富田へ對し、忠義を盡し、先年當城にて、汝が父大炊介と俱に討死を遂げ、其後晴久公の厚情に依て、幸清が遺跡無相違給り、是迄安堵仕る事なれば、早速出陣せしめ、先手をも望み可申と思ふ也、汝も父の忠義を繼ぎ、我と共に出張可有哉、否と尋られければ、伊豆守承り、如仰、御當家幕賓と申ながら、度々内縁を結び、御一家の席を穢し、我家澤吾郷の庄を給り居候事に候へば、何の違背か可有之、又大炊介古の齋藤實盛に類し、老後の討死の刻、甲付の首九級まで討取候段、子孫の面を歎せ申ん爲め、然るに近來本庄經光、吉見正頼等、反逆致し、時々境目を騷動せしめ候へば、我陣屋并に此本城を無下に明置候事も、却て尼子家の御爲に不宜覺へ候間、少々御勢を残し、若殿美作守、猶子與左衛門殿兩人に、某が伴伊賀守、美濃守兄弟を指添へ當城を守らせ置き、御出馬候

は、某等御供可申候と相演れば、備中守、快げに打笑ひ、頓て富田へ歸り給ひけり、太守修理太夫晴久公、三万余騎を隨ひ、頃、天文二十二年三月末、方作州高田に着降ある、茲に備前國天神山の城主、浦上帶刀左衛門宗景、二万騎にて作州へ出向へ、合戦數度に及べり、尼子方先鋒は、真木隱岐守、嫡子上野介に、馬田淺山、牛尾櫻井、多胡等、二隊は、宇山河副、森脇、三澤、宇山、立原、湯野、本庄、杉原等、二万余騎なり、互に向合々々、死人手負を不顧入亂て、打合しは、彼九里山の埋伏一度に起りし戦ひ、赤壁の大軍も是には過じと目覺しく、終に浦上追立られ、跡も不見引ければ、八百余級の首、尼子方へぞ取にける、爰に赤名勢も命を惜ず、魁して百騎斗り、敵を討取れども、伊豆守に組打し時、高股を二ヶ所刺れ、若黨の肩に掛りて陣所へ引き養生に引籠けり、其後尼子勢勝に乗りて、播州へ討て出で、五宿、大豆崎、阿彌陀が宿等にて度々戦けるが、尼子敗軍して雲州へ歸陣ありける、

赤穴光清山内戦死 附石州度々合戦福屋反心事

備彼國山の内新左衛門隆通は、父大和守と、尼子興久と内縁有に依て、無二の尼子方成し處、毛利元就謀を以て味方に附られし故、晴久公大に怒り、大勢を山の内に向ら

れ赤穴は備後の境目と云ひ、殊に案内者なれば、逆備中守光清魁として馳向ふ、合戦度々揉み合ひありしが、光清不運にして鐵砲に腰を打貫れ、卒し玉ふ、依之尼子方大に色めきければ、敵得たりや賢しと、ごつて蒐合せ、暫く戦ければ、出雲勢隊伍を亂して辟易し、終に利を失ひ、歸陣あり、頓て此度山の内にて戦死の功を賞せられ、光清の嫡子美作守に家督を給はりければ、石見國小笠原彈正少弼長雄、本庄越中守經光と心を合せ、佐波常陸介、福屋式部大輔隆兼、出羽三隅、益田越中守藤包等、尼子を背くこと聞へける、故此押として、暫し在城し玉ひけり、然るに吉川元春、石見國小笠原長雄を退治せんとて、永祿元年二月、藝州新庄を出馬ありければ、出羽元實、福屋隆兼、杉原盛重等馳加り、猛勢を以て小笠原本庄を挫んとし、玉ふ故、難儀に及ぶの由、赤穴へ聞へければ、早打を以て、富田へ注進ありければ、時日を不移、援兵下せよ、逆牛尾遠江守湯野信濃守、宇山飛彈守等に五千余騎指添て下され、赤穴の城主美作守其比重病に疼み、引籠り居玉ふ、故前の右京亮幸清の子息、與左衛門を又右京亮と改號し、譜代の武士并藤資吾、郷伊豆守、同弟美濃守松原等を指添へ出陣あり、尼子方は元來無勢なる處に、吉川方藝州より追々加勢馳付ける故、所々の戦に、尼子方利を失ひ、方々に離散しける中に、伊豆守勝久兄弟并小笠原が家臣寺元玄蕃介、河邊讃岐守五百余人比和

城に蒐入り、要害を堅め、晝夜怠りなく、堅固に守りける處に、銀山城に刺束、山縣七郎兩人を指添られければ、同三月六日の夜、山縣四百余騎にて銀山の城を出て、在々所々の民屋を焼拂ひ、敵の機をぞ吞けるに、伊豆守勝久是を見て、五百騎を以て蒐合せ、終夜戦ひける處に、其武勇に挫かれ、山縣をば勝久が鎗下にて突伏たり、弟美濃守折合て首を掻き、右京亮へ出しければ、大に喜悅有て、我初陣に元春より籠置れし大將を討取事、嗚ぞ父幸清も、泉下に於て悦び玉ふべし、逆威狀を給はり、其后三月末方杉原播磨守盛重を大將として、比和城へ押寄せ、命を限りの戦有けれ共、城内も強勇の者、楯籠ければ、盛重が手の者大勢討れる處に、能々思案廻らし、斯様の剛敵は力攻には難成、方便て味方に引入れば、往末毛利家の爲と成へし、逆、頓て扱を入れ、先づ寺元玄蕃助に手寄り、様々申宥めければ、早速領掌し、夫より河邊と、吾郷兄弟に駈々申進めければ、各は小笠原家の武士に候へば、兎も角も、我々共兄弟小松原の者共は、赤穴譜代の幕賓に候へば、今更尼子を見捨て、毛利に隨ふべき謂なく候と、荒々敷申ければ、讃岐守玄蕃助も興醒め顔にて、然らば其趣き、盛重方へ返答可仕と云捨ければ、伊豆守は美濃守松友治部丞に向ひ、いざ旁々河邊寺本は毛利方へ降参と見へ候へば、我々比和の城に堪難、城中に内變無之内に忍び落ち、一應吾郷へ成共、赤穴へ成共

引退き、重て尼子出張の時を待ち、我々も打て出申べし、と云儘に、取物も取敢へず、城を落てぞ歸りける。此由小笠原長雄聞て大に怒り、八百騎斗りを討手に向ける處に早杉原勢、城に入て防戦したる故、一戦に討負け湯の津へ引にける。依之尼子修理大夫晴久、際國の旗下に觸付け出陣ある。先三澤爲清、三刀屋久祐、同藏人廣田入道、櫻井馬田慶信等、譜代の侍には、龜井定綱、佐世清宗、河本隆任、牛尾幸清、同久信、同三河守、同豊前守、同彈正忠屋、蒼右兵衛河副美作守、黒正久澄、字山久信、森脇清平、横道清高、同政光、高尾縫殿允、同右馬丞立原久光、同久盛、秋上綱平、同伊織助、熊野久家、同兵庫介、多胡辰敬、同隆重、湯野惟宗、同家繼、平野久利、眞木宇右衛門、中井久包、同平藏、同兵衛、大西重兵衛、本田豊前守、飽浦利綱、赤穴右京亮、刀石池田、目黒正田、伯州には、小嶋掃部助、小引彈正少弼、福瀬治部大輔、同彌四郎、作州には、齋藤、葦田、市玉串、石見には、本庄經光、同久光、同久吉等、其外記するに違非ず、其勢都合一万八千余騎、同年六月末方より七月初旬に江川の岸根に押寄せ玉へども、此川は天下無双の大河、故左右なく涉し難く、徒らに數日を送り玉へば、先松山の城に向ひ合戦、隙なく攻玉へども、城主福屋隆兼、手痛く倒さける故、中々落城せざる。故尼子方退屈して、先づ大田邊迄引退き、重て軍應を施すべし、とて諸軍勢に下知して引玉へば、小笠原長雄は、援兵の出雲勢、政なくて

引退きければ、此城に堪難しと、大に當惑して、或は怒り、所詮尼子は頼少き人成ぞ、毛利へ降り、運を斗んど、小早川隆景に付て降参を乞れけり、然るに是迄福屋領地の伊田村邊を此度小笠原へ宛行はれけるに付、福屋大に憤り、終に毛利家を背き、又尼子家へ返りけるが、後其家斷絶に及びたるこそ無念なれ、是恩顧を思はず、一端の怒りに不忠をなす報也とぞ。

銀山兵糧斷 付尼子大勢出馬之事

福屋隆兼、尼子方へ返ると云へども、石州の味方日夜、毛利家へ降りければ、本庄越中守經光、早打を以て富田へ申入けるは、石州過半、毛利方と成り、某斗り敵中に挟れ堪難く、覺へ候間、武勇の大將に、御勢四五千も被指添、急に可被差下と頻りに乞ければ、晴久公、諸士を集め、此義如何と評せらる。龜井能登守が曰、經光父子最も武勇の者なりと雖も、此間毛利勢三万余騎、石州に打入り、所々城郭を攻取る間、仮令又大勢を下され候ても、何の功も立ず、是迄の通りの軍配にては、當家に末頼も、敷勇者も、無之と、諸士機を屈し候間、經光、速も行末、心元なく存じ候、此上は國々皆當家へ背き、分國へ切入んと可仕は、眼前に候何の道、門田高野山等の押には、三澤、眞木の人々、山内三

吉等の押には赤穴右京亮に籠城させ、銀山、羽根口は神西三郎左衛門を城地堅固に守らせ、三瓶山口に饒なる押へ無之候間、本庄が勢を分け、半は彼が居城に置き、半は經光自身に引卒し、須佐の高櫓の城を暫し守らせ、又銀山の糧道を支へん爲め、當城より歩卒二三千も遣し、池田、志學、佐波の敵の押へともし給はゞ、經光兼て神西赤穴に通達し、若し敵兵、八神、四津見、山口邊より入らば、彼の歩卒等、高櫓に程近き、別所、西山、中吉野等の深山より討て出で、本庄と示し合せ、機變に隨ひ、敵を勞らしなば、仮令石州は騷動すとも、當國へは容易に攻入事有間敷候と申ければ、晴久公此義に同じ伏兵、歩卒の大將を河副美作守にぞ定らる、此河副は万夫不當の勇猛にて、殊に步戦に馴れたる人なれば、二千五百人を添て、別所、西山、中吉野に分り、野伏して折々は三瓶山の麓より、銀山近邊へ出て、夜働し、敵の糧道を妨げ奪取て、敵軍を苦めけり、本庄が高櫓へ入てより、銀山の城兵、糧馬草等を斷れ、飢に及由、頻りに訴へけるに付き、毛利方より兵糧運送の夫力に、防ぎの武士を指添へ遣すと云へども、處々の詰り々々に、待伏して小追合て、手間取り、抄々敷入る事不能、依之毛利方より又大勢の兵を出し、所々に關所を据へ、堅く守りける故、却て尼子方へ入る兵糧の道塞り、大に難澁に及び、富田へ日夜訴へけるは、毛利追々多勢と成て、既に石州一國大方切取申され候

間、早く御出馬候へかしと、使者急を告ければ、晴久公も最早延引難成し、連、七月十四日富田を立ち、追手は湖水に添て、神門郡より押寄玉へば、相隨ふ人々には、龜井能登守、宇山飛彈守、河本彌兵衛、牛尾遠江守、嫡子太郎左衛門、同三河守、森脇治部太輔、櫻井入道、秋上三郎左衛門、伊藤右衛門、馬田長門守、吉田三良左衛門、熊野兵庫介、同治良、古志因幡守、田中三良左衛門、足田右近、同甚九郎、小嶋の一族、並に日野孫右衛門、蜂塚入道、小引彈正、福瀬治部太輔、市野五良兵衛、葦田五良太夫、玉串監物、三浦の一族、兩齋藤其外、備後、備中、石見の人々、一万五千餘騎、大田邊に先陣着ければ、後陣は中山、田儀山口に支ゐたり、隱岐守爲清は兵船、糧船五十餘艘に取乗て、三保關へ着岸す、爰にて富田の手合を尋ければ、諸勢はや神門路へ打出で、太守も御出馬と聞き、さらば直に元舟にて可出とて、七月六日宇龍の泊へ入り、翌七日順風に帆を揚げ、湯の津の泊へ入り、頓て晴久公に對面し、河合、堂原邊に陣を取り、銀山の通路を指塞、兵戸隆家、山田新右衛門、佐波常陸介等と、日夜矢軍に隙なし、儲弼手は、尼子下野守、義勝の嫡子孫四郎經貞を大將として、隨ふ所の人々には、三澤三良左衛門、三刀屋彈正、左衛門、佐世伊豆守、立原備前守、赤穴右京亮、高尾縫殿介、同馬之丞等、其勢一万餘騎、須佐路より八神、四津見を打越て、津賀、池田之敵を押へ玉ふ、互に組手と受口とを定め、彼は韓信が奇謀

を施し、是は孔明が妙算を盡し、王陵趙雲が鎗術、關羽張飛が戟の争ひ、雌雄時々にかはり、勝敗日を期せば、入替りく、我社大敵を取り挫んと、強慥を見ず、戦しは凄じかりし有様也、毛利勢命を限りに揉み合と云へども、出雲勢の荒手に辟易して、終に銀山の城中を敵に附られ、詮方なく、雜兵ども、右往左往に逃散りければ、刺束、高畑の兩大將、最早戦ひ是迄と、甲の丸に引籠り、潔く自害せられければ、勝はこりたる富田勢、曳々聲にて八方へ切散し、怯む敵を爰にては難伏せ、彼にては切伏せ、或は矢彘造りて射寄ける間、藝州勢心は猛く、勇めども、援兵も盡たれば、是非なく、己が様々敗走す新原、銀山の城外二三里が間は、死人手負何百人と云ふ數を不知、前代未聞の大合戦也、此度の勝軍にて、尼子方の武威も、再び輝く粧ひに見ければ、二足へ踏し諸士も、反心を改め、尼子家へ信をぞ通しける、斯て銀山の城には、本庄越中守を入替て、猶も敵の殘黨を追拂ひ玉へば、毛利吉川、小早川も、此度新原崩れの敗軍を集め、無念ながら一先づ藝州へ歸られける、尼子も國中の掟を定め、津和野三本松の吉見大藏正頼が押へとして、軍士少々殘し置き、万歳を誦ひ、雲州へ歸陣せられける、

高野山入道上阿井合戦同來島合戦之事

斯て尼子晴久方には、鬼神と云ひし吉川、小早川、穴戸、熊谷等を、銀山、新原にて一戦に追散し、諸軍士の勸賞功の輕重を論じ、沙汰し玉ふ、毛利方は、此度新原に於て、敢なき敗軍せし事、無念心肝に徹しける處に、晴久早速に石州を退陣ある由、聞より俄に思ひ立ち、此度の耻辱を雪んと、永祿元年八月、吉田新庄に有合の諸士を催し、一万餘騎にて元就石州へ出陣し玉へば、備後勢跡より馳參べし、連觸れ廻し玉ふ、故門田は室三吉へ通り、追付申せば、高野山入道久意は近道とて、雲州上阿井通り、五百騎にて出陣の由、聞ければ、三澤が郎等、布施左京亮、其頃鴨倉城に有て、我城外をいかでか敵に踏み荒させん、いざや殿原上阿井谷の節所へ待伏して、一當て當て見ばやと云ひければ、三百人斗りの隨兵、最也と同じ篠原と云所の深山、幽谷に埋伏して待けるに、何心なく久意が勢、五百騎通り懸り、左右前後より矢を放つ事、蝗の飛ぶが如く射立ければ、道は狭し、布引に并立たる高野山勢的に成て、忽ち手負百餘人出來ける故、久意下知して、拔連て打ち散らせ、敵は小勢成べしと云ければ、皆拔連れて防ぎけれども、待伏の者は山上に在て、鎗長刀にて真逆様に薙落ける故、久意大に敗亡して討るゝ味方をも不顧、我逸足に上阿井指て、蒐出ける、依て布施勢追掛々々、案内の鴨倉勢、田の畦、畑道を行渡りて、或は横矢を入れ詰りく、に追詰りく、討程に數百人討取て又追

行けるに、高野山の馬廻りに白山某と云勇者、福原と云處に踏止り、追來る敵を防ぐ間に、久意は殘黨を引連て、吉田の方へと落行ける。鳴倉勢の内平田彌四郎と云大勇強氣の者、白山と渡り合ひ、時移る迄戰けるが、白山運の盡にや、兩坪と云ふ、大沼澤へ馬を乗り込み、泥障れども底深き澤なれば、乗上る事不叶、彌四郎是を見て、我々逆も近付く事成り難し、唯遠矢にて射窘めよとて四方より射掛けければ、則馬上より眞逆様に落て死にけり、去れども首を取事も叶はず、打捨て、猶久意が跡を追て行く、高野山は白山が防ぐ間に、福原をば打過ぎ、葦屋と云處に一息繼て、白山を待處に、武者三人蒐來る、白山かと思れば左もなく、歩立の武者也、是必定敵の抜掛けならん、小勢成れば待受け討取ん、逆殘黨三百騎斗り在けるが、取て返し、三人を追取り、巻き戰けるに、惡羅刹の如き彌四郎も、敵四五人は突伏けれど、大勢防くに術なく、我身五ヶ所手負たれば、最早是迄の運命成、逆小高き岩の上に馳上り、腹十文字に掻切て死にける、高野山も亦思惟して、定て白山も討死すべし、此小勢にて石州へ着たりとも、墓々數合戰は成まじ、一先高野山へ歸り、軍勢を催し、再び下るべし、逆頼て討洩されたる手勢百四五十人を引卒し、門坂山に掛り、手負の手を取り、或は背負ひ、漸々筧が峰迄上りけり、誠に馬も通はぬ、孤峰、柚人の一足掛りの道なれば、諸軍勢大に窮れ、其夜は

筧が嶺の邊り、七日迷と云處に、野宿して、明日高野山へ歸りけり、手負は家城に残し、養育させ、山賊強盜迄も招き集め、又五百騎斗りに成ければ、今度は道を替へ、來島の郷内より、津賀の味方の陣へ馳付べし、逆門坂山の南なる三つ又山と云ふ、大深山の細徑へぞ出られける、然るに柚人共是を見て、此道筋は常々人馬の通りなき間道也、逆大勢の武士、馬を引き、葛に取つき、辛苦して越し候と、赤名の城へ訴へければ、是高野山成らん、左迄大勢では有間敷、掛向ひ、追散せ、逆家の子三谷數馬、宇山、藤内、漆谷、伴兵衛、吾郷、美濃守等、剛強の者共、三百騎斗り、取物も取敢ず、蒐出で、物見の一左右をぞ待にける、其内久意は、今宵和田の八幡の社中に一宿と見へて候と、告ければ、片寄兵部、松田甚兵衛に向ひ、今晚我々は迄討て出べしとは、敵思ふまじ、いざや夜討して、切散らし候べしと云ければ、皆最と同意して、宇山、漆谷、吾郷、松田等二百騎にて、南の山手より寄るも不知、三谷、松原は百騎斗にて、西の方より押寄せ、面々白紙を以て、甲の鉢を包み、相印として、子の刻斗りに、関をどつと揚ければ、高野山勢は晝の山路の窮れに、能々寢入たる折節なれば、大に騒ぎ立ち、本社拜殿の縁より落て、闇路に迷ふ者多かりけり、戦に出合ひ、防ぐ者一人もなく、逃走るものは、薙立て、切立て、八方無盡に討ち立つれば、木葉の散る如く、亂走す、漸く夜も明けければ、敗軍を集め、三百斗りにて

川尻と云所迄落ければ、跡より追々敗軍の者馳付て、又四百騎に成ければ、直に才谷通り、石州勢へ加りける。赤穴の者は一戦に大利を得、討取る敵の首二三十提て、突根尾原通り歸て後ち、尼子の方へ軍使を以て合戦の様子を訴へければ、晴久公大に喜悅有けるとなり。

毛利元就大勢再攻銀山 附本庄父子反心屬毛利事

八月下旬に元就公、一万騎を以て再び石州へ取て返し、銀山の城を稠く攻玉ふ、吉川小早川も先日の耻を雪んと、突ごも切ごも怯まず去ず、曳々聲にて手負死人を乗越、攻られけり。城中にも名高き本庄越中守常光、二男大藏左衛門、三男兵部太輔、四男四郎治郎并兄の高橋次郎左衛門等を先として、攻防ぐ故、何日果べき軍とも見へざりけり。斯る處に毛利方の先鋒終に追崩され敗走すれば、首十五級提て、城兵は勇み誇りて城中へ社入にける。其後元就つく、工面を巡らし、本庄が如き万夫不當の大勇には力戦は無用也、毎度味方の人數を損し、長軍せば軍旅の費に苦み深からん、何ぞ方便を以て味方に招き玉へかし、と宣へば、元春承り、頓て山縣越中守を河本へ出し、本庄が郎等に手寄り、扱ひを成べし、と被申ければ、山縣即時に河本の陣へ

至り、色々和議をなし、毛利與力に於ては、本領の外、出雲郡を都て宛行るべし、と元就公父子の書翰を添て渡しければ、欲心深き經光終に得心して、即座に元就一味の約をなし、鄰近々雲州發向の軍議も評せらる、爰に本庄が嫡子太郎兵衛は、人質として富田に在ければ、經光より竊に使者を以て、毛利方へ一味の約諾を知らせけり、何卒謀を以て、富田より出奔せよかし、と申送れば、太郎兵衛も種種思案を巡すと云へども、施すべき方便もなかりしに、隱岐守爲清、此度石州陣に渡海せらるゝに付、隱州立の駿足二十三疋率れける所に、晴久より宣ふは、隱岐守は船にて歸陣致し候へば、此度率し馬をば、某に給はり候へかし、近年打續く合戦に、諸大將も某も、馬少く成候間、強て所望に存る也、と宣ふ故、爲清辭退に不及、二十三疋の駒を富田へ入られける。頓て馬亭、城中に入り、上命に任せ進上仕候、と演ければ、晴久公對面有て、汝馬亭の儀なれば、此馬の内充分駿足有べきを知りつらん、四五疋はご選立て知らせよ、當城にも置度く、残りば馬拂底の諸大將へ配分すべし、と宣へば、馬亭承り、彼社元氣十分の駿足にて、然も其性至て直成馬にて候と、五疋選び出けり、頓て明日は富田家中の乗手、一入鞍強なる者共、一鞍二鞍づゝ攻て見よ、と觸られければ、血氣盛なる若侍等、八幡の馬場へ二十三疋率出させ、一々攻められける所に、本庄太郎兵衛はふと思ひ付き、五

疋の内にも就中達者なる馬を目利して若黨どもに口取せ兼て馬上は達者也、二馬場二馬場乗ぞと見へしが、一當はつしと當ければ、此馬飛て刎廻り、一さんに蒐出し富田川堤を上りに飛ぶ程に、大勢の乗人共是を見て、日比自慢の本庄も心を知ぬ荒馬に鞍返されて、何れの岩壁か谷底かへ落ぬらんあれや、と笑ひける、若黨共色を變じ、追て行久野田原邊にて、後影を少し見掛けられども、中々追付く事は不叶、其日本庄は今市に野宿して馬を休め、町屋に入て食物を求め、馬草等丈夫に飼ひ、未寅の刻に乗出し、暮相には銀山へ歸りけり、行程三十里を一日半に歸りければ、若黨共三日の夜半に漸く城中へ歸ける、乗人と云ひ、駿足と云ひ、例し少き達人也、父越中守大に歎び、最早心に掛る事非ず、迎初て尼子に向ひ敵對の色を立ければ、晴久大に忿り頓て本庄退治の事を思はれけり、

赤穴城内評議 附森田烏田等義心の事

本庄經光、毛利に屬する上は雲石の諸士、風を望て藝州へ與力降参しける中にも、三澤、三刀屋等先達て毛利へ降るべき由内通せしに付き、然れば赤穴をも申進め、同心せよかしと元就公の仰を受け、諏訪部彈正左衛門、飛札を以て、條々赤穴の城中へ利

害を説る、赤穴には三刀屋が使者を旅宿に置、古老舊臣を城内に集め、降参の利害得失を尋る、爰に森田左衛門、烏田權兵衛兩人申けるは、御先祖常陸守三善春清公、關東より當城へ御下向有て、後數年尼子家の恩祿を受け、我々式迄二心なく仕奉り、今石州一國毛利に切取られて、境目を守る證薄く候上、戟を逆にして、毛利の武威に恐れ降参仕る事、武道の本意に非ず候、三刀屋、三澤等は、今迄尼子方に在て、明日は大内方に降り、又尼子へ戻りて、今又毛利に降り、度々心を變じ、掌を反す反臣也、當城は是迄終は二張の弓を張ず、尼子無二の忠臣也、と世上に佳人を呼れ候、又前の右京亮公御戰死に付、譜代の御家人、幕賓の面々も、親兄を討れ、子孫を討れ、石州度々の合戰、作州高田、備後山の内等の軍を命を落したるもの幾千人に候へば、大内、毛利は不世の讐にて、俱に天を不戴の恐れあり、此上は毛利の猛勢を引受け、當城に於て、潔く打死仕りて、尼子の厚恩を報じ、且御先途をも見届け申す外、存寄り無之候、と思ひ切て申ければ、伊賀守勝久聞て、兩殿の思召寄、其利的前に候へ共、退て思ふに、某が祖大炊允討死の後、石州の采地、行常、多久野は出羽、池田の者どもに奪はれ、吾郷の庄は佐波上野介に押領せられ、無念骨髓に徹し候へば、我々斗りにても打出て、憤りを一戰の上に散ずべき處、毛利の大敵我々が小勢にて、手向候とも、万が一つにも勝事なしと存

じ、遠慮を巡らし罷在るは、偏に某臆病のみに非ず、大行は細瑾を不顧と申せば、我意の憤りに迷ひ、主城の安否を顧ざる時は、指當り不忠の臣と成故、短慮を止め罷在り當城を大事と社守護仕る也、然るに尖き毛利の猛勢を引受け、城中縋か二千の窮兵を以て戦ふ事、其得失何れの所にかあらん所詮一先づ毛利の銳氣を避けん爲め、方便て降参と稱し、所々合戦の多き中に、變も度々多かるべく候間、臨機應變の時節を待て、尼子を見届け申ん社忠義とも成べし、一つ仮りに偽りて敵へ降り、大望を達せん事、和漢其例多く候間、何分三刀屋の扱に任せ、毛利和睦の御儀可然存候、只今毛利に敵對仕り、軍士討死遂られ候ては、尼子家の御爲にも成間敷、初中後の忠義社、万世紙上にも留り可申、又毛利の大勢を防ぎ難く候間、急に援兵を救ひ玉へ、と告たりとも、困伯の敵蜂起して、富田よりの救勢引も不切指上せられ候、央急に此處へ下る事も、寄らずと被申ければ、片寄、成路、松原、宇山、漆谷、三谷、其外在合者ども、是即ち陶朱公が越王勾踐を諫め、吳國に降り、二十余年の辛勞を忍び、終に吳を亡せし計略なりと申ければ、森田、島田大に怒り、方々は是迄の功名を捨て、入日の尼子を見離し、出る日の毛利に屬し、玉ふは武門の本意か、斯様の臆病仲間には某は組せず、連荒々布席を踏立て出ければ、大將右京亮聞きて、兩説之異見何れも收拾致難き忠義至極の爭

ひ也、森田、島田が諫は君を敬ひ忠を勵む、勇士の義心、吾郷が金言は謀を帷幄の中に廻らし、勝事を百戦の後に全ふする大謀也、事を破るは安うして持つ難し、先毛利に降り、暫く世の轉變をも見斗るべし、左有れば、命を全して、尼子の爲に肺肝を碎き再び目出度く花咲春を期すべきぞやと涙に暮れて別れ玉へば、誠に是ぞ寛仁大度の明聖かと諸軍士一統に感じ入ける、斯くて兩人は下城して我家に歸り、一族同心の者を集め、三百余人、其外老少男女を引連れ、翌日赤穴を打立ち、琴が峯と云ふ深山に登り、女夫石の蔭に陣屋を構へ、扱島田は石州、防州に至りて、大内義隆の浪人并び石州度々の合戦に漂泊せし人々を語らひ、集めける程に、近郷の野伏強盜共迄馳付て三十日斗りの内に、歩卒二千余人と成にける、依之才谷川尻塚原琴が峯に、百人と二百人づゝ山林の間に隠れ居て、來島の松本山を當分の要害に拵へ、毎日油來來島郷内へ出て民屋を追放し、亂暴押取り、狼藉前代未聞なり、是全く慾心より出る惡逆に非ず、浪々の身なれば、斯様にして兵糧の爲なり、毛利雲州赤穴より出陣の刻道々節所に支へて一合戦試みんと、の企なればせつなかりける義心なり、

藝州勢赤穴城入 附突根尾原合戦の事

永祿三年末方、毛利元就公數万騎を引卒し、赤穴に着陣し玉へば、出雲の國士等我も
と軍門に參し降禮をなす。元就公城中に入り玉へば、諸卒は宮寺町家在家に宿
せざる所もなし。城主右京亮より兼て宿々掃除等迄万事心を付兵糧野菜馬草迄、其
通路澤山に調へ吾郷松原漆谷の家臣等五百騎斗、涅甲にて赤穴北の入口に出て、警
固稠敷く非常を糺せば、宇山三澤等は三百騎にて室峠に陣を敷き、備後境を守り、往
來の出入を改め、又右京亮は常に日夜登城有りて雲州攻め入の軍議共せられけれ
ば、片路片寄の者は東西に分り、夜廻り日廻り、油斷無く馳走嚴重に見へければ、大將
も士卒も案心に滞陣し玉ひける所に、森田島田等突根尾原に逆茂木を引き往還を
切塞ぎ一揆を集め、二千人斗にて赤穴にて兵糧を奪ひ取事度々也。佐波上野介打向
て追散すべしと元春の下知に隨ひ、一千余騎にて馳向ふ。一揆は突根尾原の頂に陣
取りて大木を落しかけ、皆案内は能知たり、爰に渡り合ひ、彼に隠れ飛行自在に切て
廻り不意を打ける故、佐波も随分手繁く戦へども、雜兵共二三十人被討ければ、無詮
方手負餘多を引連て城の麓迄退きける。扱も悔り難き敵ぞ、迎熊谷天野を兩大將と
して三千余騎重て向はれける。先鋒は天野にて千騎斗りを真先に立登る。時分はよ
しと東西の森谷蔭より四五百人計天野を中に引包み、横鎗を入て突立ける。故天野

大に敗軍して手負死人を振捨て、一引廻と引ければ、森田跡を追て付入けるに、熊谷
が荒手勢掛塞り、迎合ひ暫く戦ひけるに、一揆の大將島田權兵衛被討ければ、野伏原
跡も不見して引退きける。森田も俱に引立てられ、松本山の石城に引入ける。熊谷天
野も敵を塚原迄追拂ひし事を一の功として、赤穴の城へぞ歸りける。一揆は猶も近
在に出て民屋を惱し、毛利赤穴を出馬あらば往還の切所に控へ、元就に一箭奉らん
と旦暮待掛居る處也と聞ゆれば、重て本庄越中守に三千余騎を被差添、惣して雲
州攻めの先鋒と定め玉ふ。攻戦利き經光一入武威を耀して打出る。森田、突根、尾原の
麓なる川向に千騎計を控へて大音に呼はりけるは、珍らしや、本庄殿昨日迄に同じ
尼子の味方、今日は毛利の謀に出し抜かれ、國所領にほたされ、一張の弓に二筋の箭
を當てかひ玉ふこと侍の名を腐らし野伏に増たる畜生武士とや云はん、我々が一
揆を立てるは雲の上、水の底迄、尼子無二の忠臣と紙上に留めて後代に名を顯さんと
存ずる故、此所に集り、毛利殿に一箭參せんと存ずる所思ひもよらず、本庄殿と云ふ
内股武士の知行盗人に出合たり、一箭受て、次信が八島にて主君義經の身に替りし
忠義にならひ玉へど、惡口たらと云散せば、本庄は面耻かしくや思ひけん、是非の
返答にも不及物な云はせそと打て掛り、川を涉せと呼はれば、二千余騎、眞丸に成て

川岸に下りける、森田も弓鐵砲を繰け打に打掛射掛ける故、毎度の迫合に本庄勢百五十人斗川越に討たれたり、扱は後陣を待合ひ荒手を先に立て可戰と跡を見れば東の方松林より七百騎斗り出で、西の方より八百騎斗塚原邊には関の聲夥敷本庄が陣の跡より横様に蒐入れと突立る故、本庄が後陣此敵に間を被隔左斗り廣き突根尾原の然も平原にて生死不知の攻戰也、川向の一揆も相圖の時刻と一散に河端迄打て出で鎗長刀にて難立れば、本庄が二十餘騎終に追立られ後陣の勢にぞ入にける、然るに吉川元春は、此頃毎度野伏軍に味方敗走すること無念也、一揆軍立の模様をも見ばや迎、且は後詰共可成物也と思惟して二千騎許りを前後に隨へ、往還を靜に歩ませ出玉ふ所に合戰兩所に分れ、其外一騎合戰爰彼所なり、然れども其機勢味方負色に見へければ頓て二千餘騎を二手に分け、無二無三に短兵急に挫かんと蒐立玉へば、流石森田も此荒手に戰勞れ鐘を鳴し諸勢を引立、川尻の方へ入りにける、元春經光も敵の引くを幸に及黃昏赤穴へ歸陣あり、此時毛利方三百餘人を討れる、森田も二百八十餘人討死す、元就公右京亮を被召來島の一揆は其元譜代の家臣どもの由、數度我勢を支へ、味方の軍勢を損し、且又近郷に於て狼籍亂暴の仕方有之と云へども一圓是を不被制餘所に見成し玉ふ所存の程不審也、定めて深き思慮

も可有之哉、巨細承度と宣へば、右京亮被申は如仰他の一揆に候はゞ度々御勢を被向迄もなく某頓て掛向追散し可申處、元來一揆大將兩人は某が家臣森田左衛門島田權兵衛と申者然るに去る頃三刀屋が進めに依て我等御味方に降參仕や否や評議の節彼等兩人専ら義心を守り、降參不義の諫言を以て尼子家無二の志を立申候然れども其外の家臣等は當時の利害得失を申不義ながら御味方へ參る様にと衆評區々に候へども、某面を伏忠義を捨て害失を去て利得に付降參に一決仕候故彼兩人諫言無益と成り大に怒り、飯令主君は忠を背き、義を捨玉ふども、我々は武門の明鑑を磨き、名を後世に留めんと、一途に忠義を立某を勵候、依之主従の情離散は仕候へども、人道の正路は彼に有て、非義は某に候間、飯令敵對仕候とも私に手を下し忠義一途の兩人の賢士を討事不忠の上を無道と存用捨仕候勿論他の力を以て彼等を御退治候ては某が悪名不出候間、乍餘所指控居申候、此上御不審も不晴候はゞ宜く御掟を可蒙と有の儘に被申ければ、元就公暫く御思惟有て是は最至極の御所存也、貴方味方へ被屬候事武士の本意には非ず、彼等が義は理の當然也、自ら手を下して退治は成難筈、適成る主従かなと稱美不淺、其後吉川、小早川の人々に向ひ、右京亮は古今の義者也、森田、島田は伯夷、叔齊也、斯様の人傑、味方に屬しては末頼母敷事

やと宜ひけると也。

元就赤穴陣中閑談 附雲州攻入向城の事

赤穴陣の内諸軍士は笠掛犬追物杯して徒然を慰められけるに元就公は文武の明聖なれば軍務の暇には兵書神儒書手爾於葉物迄被講ける、或時多賀美作守を被召、御自分は雲州に居城して専ら神學を磨かれ候由承る處也、雨中の徒然に神道の荒増可承、勿論雲州の神社來由等被語候へかしと宜ふ多賀承て舊事記古事記、日本記の大概兼て御承知の上に候へば不及申上、雲州八社八幡と申事の候、右大將賴朝公の御時、雲州神國たる事を細に聞玉て、斯程靈神跡を乘玉ふ中に、八幡宮の鎮座無之間、武運長久、國家泰平の爲、新に八幡宮を可建立、迎鶴岡に於て厚朴の一本を以八体の應神帝を爲造、賴朝御手柄御眼を入玉ひ、雲州に被下、其厚朴の第一の元を割たるを意字郡平濱八幡と祭り、第二能義郡安田第三當郡須佐第四當所に程近き油來第五仁多郡横田第六神門郡朝山第七大原郡木次第八同郡佐世の八幡也、何れも大小の氏社と奉崇、其後氏人等思ひ思ひに神功皇后を合せ祭るもあり、又仲哀帝神功皇后を合せて、相殿三座と成すも有り、夫に高良武内明神を添て四座とするも有之

就夫村々郷々に正八幡を奉勸請所の産社と崇め、唯今にては大分の儀に候、併し三部の書に無之儀、唯申傳中興の神書等に顯るゝ斗に候、大社素盞烏尊と申候へども、本社は己貴尊にて、素盞烏尊は神避玉ひて後、曾我の宮とて、本社の後に祭る、又新羅國より赤土船に被召、御子五十猛の尊と俱に當國に歸り玉へば、仁多郡鳥上の嵩に神避ます、新羅の馬韓より、赤土の船彼山へ通りたると云心にて、俗に呼んで此山を船通山と申傳候、夫より初て八重山の鷲尾猛と申邪神有て、常に霞霧に乗り、神通自在を成す、彼の魔王の隠れ居たると云ふ所を後の世に文字を替て入間と號し、猛住ける岩屋の末とて竹の尾と申す、尊初て猛が住洞穴を見定め玉ふ所を穴見と云、偕彼猛を尊御退治有て、暫く八重霞の内彼洞穴に入代り住玉ふ、故今八重山權現と奉崇、稻田姫と五十猛の尊と三座を相殿に祭るは、則、箭島御陵風呂とて云傳ふ舊跡あり、又神避まして後、御當郡素佐の郷に天降玉ひ、則彼所に奉崇て、素佐大宮と號し、末の世に須佐と書候はその音響、同通なればなり、神宮の司を大社國造の如く申候へども、血脈は異性にて候、須佐の國造は脚摩乳の正統大社の國造は天の穗日命の苗裔也、右八重山神社は須佐國造の火繼の社にて、毎年國造彼社に參籠して忌火を被繼候、又日の御崎は上下の社に十座を祭り、則天照大神の御陵とか日の神の御陵

と可謂を中略して日御崎と唱申由承り候佛家には法華守護の十羅利女と申由偕佐陀は冊尊の御陵出雲伯耆の境簸波山とは此所を指申也伊弉冊尊十月神遊ます故諸神等の母神なれば八百萬の神十月は皆佐陀の神有濱へ來り玉ふと謂心にて諸國は神無月と申候へども出雲斗りは神在月と稱し士農工商ども此月は専ら家宅を清淨にして物忌を仕事上古の遺風今に不變候去れば龍宮より使者迎毎年時も不變長さ一尺餘の龍蛇此神在の濱へ又大社等へも波上より上り則寶殿に奉籠是等は深秘の中の神祕に候其外大社年中の行事の儀は神祕舌頭に講じ難し本朝隨一の神國今に神代の餘風を被殘万民渴仰の頭を傾候近日御出馬に候はゞ猶以御歸依有て出雲の神國御手に入様に御祈念最に奉存候其外大庭佐草の香賀等泛々の神跡不遑舌頭候間追々軍務の寸隙を以物語可仕迎入にける此故元就公雲州に入國の後には専ら諸社を信仰し玉ふ也多賀美作守元就公へは神道の正直を奉進ながら其身は不義の穢名を後世に残しけると人々嘲弄仕けり猶も赤穴滯陣の中三部の書は不及申延喜式同格貞觀式同格弘仁同格其外神社考神社啓蒙大成鏡杯の中興の本會等追々被誦けり又吾郷伊賀守勝久を被召汝は當城譜代の幕賓として右京亮一門の席に連り則吾郷を食地に領す然るに文道を好み儒書兵書を能達

する山承及たり我近々當國中へ攻入んと思なれば首途の吉凶手合合戦の方角等占ひ可申旨宣ば勝久如仰最少々軍議の餘力に書籍を試候へども中々其道の門邊にも不入恥敷存也乍爾上命辭するは恐多候間荒々誦み可申迎退出し頓て晩に出勸し周易の表君の當卦は兌の卦に當り玉ふ兌は悅也大望當卦の内成就無疑覽候其象最宜候兌は方角に配して西也敵城の西に屯し玉ひて秋分に至り箭初あらば是同機同性にて最上可爲候と申上れば元就公聞玉ひ目當の敵は富田也然れば月山の城より西に向ひ城を築屯せんと永祿四年夏末楯縫郡林木藪ヶ巢山を甲城として秋分の節に至りければ赤穴出馬有て油來通り大津今市へ着陣する軍勢もあり須佐通鹽治邊に着くもあり赤穴は備州石州の境目兵糧運送の喉なれば迎警固として一千餘騎の兵を被殘留猶も一揆發起する事も可有迎油來にも五百騎頼原山に要害極置玉ふ此時多賀美作守は去る天文十二年背尼子家風大内家せしかと義隆敗亡に付宍道遠江守と諸共に神門通り石州より大内の供にて防州山口に下り義隆義長二代の祿を受陶大内歿して後毛利に降り石州數ヶ度の出陣にも隨れければ兩人共に此度舊領安堵して立歸けるが晝の錦を着て古郷を見れば日倉山の盛衰纔に十七八年の間に替果砦櫓も零落し秋風冷く狐梟の栖と荒日倉の屋形は

野良の礎斗り残り、重干狼熊の遊所と奢廢す、一族譜代の家の子、老少ともに尼子の指揮に依て、白髪露と消失せ、妻女幼少の人々も、彼地此地と漂泊しあさましき途横死、万昔に引替て泪の種と成ければ、勇む心も朽果て、夜の錦と恨めしく、誠意哉賢臣不仕二君とは、譜代の主君に不忠を盡し、其報ぞと、初て因果歴然の道理を思當り見上げ見下し行ければ、駒の足波四度亂にて泣々出陣せられけり、爰に多和の孤城は高尾豊前守久友預りけれども、其身は老中の類にて常に月山の城に有りければ、家の子も百騎斗、虛城を守居けるに、先鋒の本庄に一散に蒐散通りける、斯て出雲郡高瀬の城主米原平内兵衛綱寛も頓て林木へ降禮申す、又伯州南條豊前守宗勝入道并行松入道も、大永三年山名と尼子の合戦に、經久に被責出、毛利の太刀の蔭に隨ひけるが、此度本領安堵せられ、則南條は裂石城行松は尾高の城に立歸る

本庄本田乃本合戦 附所々城主降參の事

本庄越中守、出雲爲案内先鋒を承り、父子四人家の子どもを引率し、大勇を振ひければ、雲州過半毛利へ降禮す、尼子晴久公聞玉ひ憎き本庄が振舞かなと、本田豊前守に打向ひ、經光が首取て見せよと宣へば、承りて二千騎を卒し出向ける、本庄も二千騎

にて白濁を放火し、乃本乃白にて行合合戦強く勵みけり、本田も富田第一の勇猛なれば、本庄も度々追立られける家の子、椿服部等大勇にて命を不惜揉合けるに依て勝負は五分くにて引ける、然れども毛利多勢にて、國中數ヶ所城を切取り玉ふ故其武威に恐れて、阿用の櫻井入道大東童山の馬田入道、牛尾信濃守、白鹿の松田兵部熊量、兵庫介等皆降禮しけり、又推鍋の城主村井越中守も城を渡し、富田の城へ退入けり

雲陽軍實記 第三卷

本庄越中守經光父子逢誅戮 并評論之事

去る程に本庄經光毛利味方に參り、石州雲州所々の城攻に先鋒として向所不落と云事なし、其勇力古今に獨歩して、軍功莫大なり、元就公は宍道にも向ひ城を築き、兵糧以下の手傳せずんば富田攻不用心可成とて、自ら幡屋に出張し給ひ、大西立原を押して日夜普請を責立給ふ所に、情思惟有て、本庄希代の勇士、今我々に降參すと云へども、又少々恨も有時は、尼子へ返る事掌を返すより可易、若し敵とならば銀山合戦の如く、彼に對する味方の武勇は有間敷畢竟我子孫の心肝の病と成也、所詮事不發前に本庄を偽り討て、後年の愁ひを可除と宣へば、吉川元春の曰仰最の計略に候へども、富田攻伏せ候て後兎も角も計ひ可申、夫迄は先々御延引候へかしと被申は、成程其理も至極せり、去ながら當國の者共、過半味方に加はり、己に仁多、飯石、神門、出雲、楯縫、秋鹿、島根郡手に入て候へども、富田攻落さん事、強ひて本庄か手を借る迄もなぐ掌の裡にあり、殊に富田落城已後に、彼を討たば、國士等不審を生じ、何の過有ることも不見に、功拔群にて人の知る處也、仮令毛利へ降る者も、追日如斯に可被害とて、も

可死命ならば尼子方を不見難義を字り討死して、其忠臣を楮上に可留鳥盡て犬養
 らるゝとは此事也とて、此後味方に降る者一人も有間敷今戰半途にして彼が罪を
 數ふるに、當國諸神社の領地を軍用の爲とて、我儘に押領し、彼れ先鋒して行先きに
 我々にも不斷制れを立て、又餘の軍士に宛行し、采地をも自由に押取り人を追出し
 或は切散して我が有となす、其惡政無道の名を元就に譲りし如斯の罪科を以て退
 治せば、諸士の誹謗も有間敷疑ひも不生、又彼が惡逆は敵味方共に指處なれば、かほ
 ごとに戰功厚き本庄さへ無道なれば半途にして被誅戮賞罰嚴重にして依怙なき元
 就と却て我を可稱無左は万卒怒り不正、政道の正理を失ふ事眼前なり、此故に今彼
 を退治するは味方の利得莫大也と宣へば、元春承り、如仰小科と云へども須佐在城
 之刻、大宮の神寶を取散し、神領を押取、大庭の神釜を打割、其外非義まゝ多候間、任仰
 計略を廻らし、某手にて方便討可申と領掌して、頓て二千餘騎を以て夜討と定め、勢
 を三隊に分ち、組手刺手をれゝ勇猛の人柄を選み、一々用意備りけり、去に依て、本
 庄の油斷を見清し、夜討せられければ鬼神と云し本庄父子、神通を得ざれば吉川勢
 忍入るをも不知寢入りしを、曳々聲にて切散しければ、家の子椿服部の一族も命を
 際と戦へども、寄手は物具に身を堅め、本庄が勢は素肌武者なれば、手向迄もなく、暗

々と一夜の内に皆討れける、運の程社哀れなり、嫡子太郎兵衛は石州津賀に居ける
 を、天野紀伊守蒙討手誅戮す、服部治部大夫は銀山の城に留守して居けるが、色々偽
 り招きて降参させられけり、運の傾く時は、刺き刃も不立智も不發勇も劣り無下の
 死場に及びけり、此時執々に評しけるは、元就公此度本庄退治は、御一生不仁思慮の
 誤り世敵子降らば愛するの道に闕、又近年莫大の軍功を盡し、雲石土地十の内八九
 御手に入る事は偏に經光が武勇より出たり、假令經光、太郎兵衛等は誅戮ありども
 末の子一兩人は被殘遺其家名を繼がせ、先祖の祭をも執行可爲致事、大將之道也、然
 るに根葉を斷玉ふ事は仁惠の道に非ずと也、又中には元就公は三世通達の智勇な
 り、凡人の知る所に非ず、惡逆數々奮驕の体多ければ、一人を誅戮し万人を懲しめ玉
 ふ是大將之則也と様樣評しける、頓て吉川元春は二千餘騎を引率し、舟津上の江に
 陣取、膠山と須佐と高櫓の城番共へ軍使を以て被申入けるは、汝等數年本庄が家臣
 として、其領城を預り居ける處に、本庄父子重科有之に依て、一人も不殘致誅戮處な
 り、汝等改心底、自今我手に降りなば、本知可令案堵也、若し古主の爲めとて於致籠城
 は、即時に押寄、一々可加誅戮と使者相演れば、兩城番ども降人に出て、吉川勢に加は
 りけり、依之高矢倉をば熊谷兵庫介暫く預けられけり、

雲州國士及於毛利再爲尼子方事

韓信は楚去入蜀亡項羽後、齊、楚、魏、晉、吳、趙、越等中和の國々切取り、東夷、西戎、南蠻、北狄迄平定して漢家宗業の立奇功、其名三傑に冠たりし大功も、齊王の位を急ぎし罪に依て、呂氏が爲に未央の露と消へ、本庄經光先鋒の威風烈敷雲石の諸士悉く毛利に屬すと云へども、其功一朝の嵐に散り、父子家従の者迄無殘被誅戮れて後、一應毛利へ降被參、雲伯の諸士も薄氷を蹈む思をなす、方便に本庄を味方に付け、軍功を立させ却て其武威輝す事を惜み、其功高き事を妬み、如斯滅亡に及ぶ我々、迎も爲、毛利今日苦戦するとも、明日は英布、魏豹が死を玉ふ事眼前也、所詮生死は運也、毛利の手には死なんより元の尼子に返り心を一致にして家運の興廢を可誠と同心の人々には熊野入道、松田一族、阿用、虎山、四郎三郎、大東の馬田山城守、半尾信濃守、并三澤が郎黨布弘、左京亮、伯州には岩坪の日野孫右衛門、江見の蜂塚等一統して再び尼子へぞ返りける、三澤父子、三刀屋の久祐、米原平内兵衛、赤穴三吉、右京亮社心を金石の如く不變して毛利に與力せられけり、古詩の世上功名看木丁とは、則金言なるかな、功の高ければ溢れ、木の良なれば被伐事、世の有さま也。

元就元春於嚴島鰐淵山調伏法被修事

吉川元春思惟し給ふは、出雲大半討取、今は富田へも可押寄と思ふ折柄、國人ども大勢心替しけるは、唯事に非ず、本庄を方便討し、怨念、恐靈のなす業と覺へたり、所詮怨敵調伏せは、治國可速進、嚴島に法外高驗の僧有けるに、兼て懇の中なれば、尼子退治の祈願を頼まんとて、頓て早打を以て件願書に、此間雲州にて得玉へし重寶の器物共數々取添、又布施料莫大添られて、僧の方へ被送、抑尼子は當家累年の怨に候處、兎角國人どもの心不定、於今富田攻及遲滯候條、近頃申兼候へども、晴久が一命急々歿し候様に、叱祇尼天大聖天の法を被修、怨敵退散の祈念、被抽丹誠可給、大願於成就者、追而宜く謝禮を可演となり、彼僧無據領掌して我が坊に構壇、半生の業にて、晴久公の人形を拵へ壇に立て、色々供物を備へ、七日七夜斷食して被祈ける、七日目の朝、廟へ行き歸て見れば、不思議や人形的首落て、爐壇の花皿の中に有り、偕は大願成就せりと喜びて、頓て雲州元春方へ件の事共被言送り、又元就公も斯迄味方と成りし國人の心替りせし事は、本庄が遺念の作業也、古今不双の勇士をたばかり殺せし怨可成と被心附ければ、陣處に程近き鰐淵山へ參詣あり、則和多坊を宿坊として、現

住榮敬へ對面して、本庄が怨念靜まり、且又晴久一命を玉はり候様に、無二の根柢を盡され候へど、無餘義して頼玉ひける。榮敬も辭するに道なく、頓て鰐淵の瀧坪に墳を構へ、初三日三夜は五大尊の法中、三日三夜は六觀音の法終り、三日三夜は七佛藥師の法を被修る。爐壇の煙りは滿山に霞み、振鈴の聲は万峰に響き、大法秘密九日九夜修行ありて、元就公も陣所に歸り給へば、追付其驗顯はれやせん。闇に恐敷ぞ覺ねける。夫天子將軍は天下の軍亂を靜め、万民安樂に爲令住に、怨敵退治調伏の秘法を修し玉ふ舊例多しと云へども、是は民を利し玉ふ大仁大度也。然るに毛利尼子は民を治むる仁戰にも非ず、我意の働きを以て他の國を切取て我が有とせんとの欲心故、累年中國を騷動させ、万民を苦め玉ふ戰也。責て劒戟刀鎗にて敵を亡し、其國を得るならば、武門の業ども可謂に、智謀計策に敵を亡すこと不能して、佛神に祈り、呪咀して敵を落命させらるゝ事、元就公元春不仁不義例少なかるべし。又六觀音の法を被修たれば、咒咀諸毒藥は忽還著於本人之要文を以て、毛利家にも此後如何様之不思議の愁か可生とて、人々眉を寄せ愁嘆せり。晴久公、永祿五年十二月廿四日の曉行年四十八歳にて手水の爲に椽先へ出て頓死有りし社勞敷けれ、是嚴島鰐淵山にて被修し、祈禱の驗也。又翌年八月四日和地の元實が毒藥にて、毛利大膳大夫隆元は

行年四十一歳にて頓死し給ふ、是唯事に非ず、毛利家の柱石も還著於本人利益に被碎、御父元就公に先立玉ひ、御子幸若丸殿とて十一歳の幼稚を捨置玉ふ、御心の中被推量て勞敷と、万民因果の道理を感じける。

八畦地王峯合戰 并依浮說富田勢逃走事

尼子修理大夫晴久公急死有て、一家中は不足謂、在々所々の味方の武士ども、闇夜に燈火を失ひ、盲人の杖に離れし有様に、勇氣も折け果て、唯茫然として窮腐する斗也。殊に元就公、元春隆景大勢にて、白鹿の城を圍み、日夜の軍に松田の一族大きに苦むと聞へければ、熊野入道西阿諾卒の氣を慰めん爲め、急度思ひ立て、三刀屋赤穴毛利方の不變故に、藝州備州よりの兵糧自由にて、元就公旅陣に愁ふる事なし。此故に諏訪部久祐は白鹿に出張もせず、糧道を開續ける。先彼を一番に追捲り、毛利の糧道を斷ちなば、白鹿軍は自由間敷とて、富田に在合ふ。軍卒一千餘騎を率ひ、十二月廿七日大原路より不意に押寄たり。日も西山に春く頃、前原立原邊に陣取ける。久祐聞之て、八畦の節所を敵に不被越と、六百騎斗日井郷より竊に峠に登り、頓て熊野が陣に夜込に打て蒐れば、三刀屋勢是迄出向べしとは思ひもよらぬ事なれば、陣中大に周

章して、敵に渡り合はんとする者なし、唯無人の境を行く如く、案内は能く知りたり。奥々聲にて短兵を急に進め、此一戦に挫がんと採み立たり、西阿大に怒り、真先に進み志し有らん者は續けや」と呼はりて、大勢群れたる中に切て入り、蛛手輪違ひに切廻り、難立々々戦ひける。左ばかりの三刀屋勢、辟易して、八畦の絶頂へ颯と引ければ、逃さじと續いて三百騎斗追て行く。斯る處に、尺の内谷より、三刀屋が勢五百騎さしも、嚴敷山坂を上り、横矢を放つ事夥し、勝誇たる熊野勢少しも不疼吐、関の聲を合せ戦ひける。大勢箭豪を造て射ける故、道の入道も射すくめられて、危く見へけれども、後陣の者は長者原にて戦ひ、程隔たれば、救ふべき様もなく、夜中と云ひ、案内は不知、討るゝ者其數を不知、三刀屋が若黨、中西八郎左衛門弟與三郎二人取て歸し、西阿と渡り合ひ、採立てゝ戦ひけるに、五百人の者又取て歸し、中西討たすな、續け續けと聲々に蹈込々々戦ひける。故熊野入道も、其身不鐵石者、數ヶ所の疵を蒙りて、心はやたけに思へども、跡成味方も不續終に中西が爲めに討たれける。一夜の合戦に、敵味方共に落命二百十餘人、手負凡六百人と聞へける。明れば、永祿六年正月十三日、再び三刀屋へ出陣あり、宇山飛彈守久信、牛尾遠江守幸清を兩大將として、二千餘騎相隨ふ、立原源太兵衛は案内者として先鋒なれば、日井の江川一散にかけ、涉り、地王が

峯に打登りければ、三刀屋が家の子坂倉彦六に源太兵衛渡り合鎗を合する事八ヶ度なり、彦六鎗疵二ヶ所負ければ、可被討見へける處に、諏訪部左近南原豊前守坂谷平藏等助來り散々に戦へば、源太兵衛も高股を被突ける故、三谷山へと退きける。此所は三刀屋の城を目下に見下す處なれば、機を奪ふて控へたり。三刀屋勢も元來小勢なれば、相引に社別れにける。双方都て死人を改むるに百三十二人、手負も三百人に余りける。斯かる處に、宇山牛尾も馳着て、明日は勝敗を一時に決せん、三刀屋在家を放火して、城一片に見上れば、後ろは深山峨々として、茂林の古木枝を繁り、前は大河を覆ひ、諸軍勢鳥雲の陣を設けたり、去れば無左右川を涉さん事可難と思ふ處に、源太兵衛申けるは、敵は鳥雲に備へ、我が追手の者は長蛇に備て、此川を涉せ、定て敵矢、彘作て、川中に射留んと計るべし。其時牛尾殿は搦手より廻り、虎韜に備て横鎗を入れ、川岸之敵跡を不被切と、隊伍を亂して可引、左あらば我々一散に飛龍の如く川を涉り、一群々々に勝敗を可試と申ければ、何も同意して町家を焼拂ひける所に、早立原宇山は追手なれば、城の東西より川に添て乗出す。牛尾は搦手なれば、七百余騎を引率し、幅三町斗の三刀屋川の下を打涉り、八幡の森を妻手に見て、天神丸を弓手になして、北の方へぞ向ひける。然るに、尼子方運の盡にや、富田より三刀屋を攻る

事急なりと聞き、荒隈より小早川熊谷、天野、赤穴等の人人々猛勢にて一手は和名佐佐世通り、一手は共道通りにて、二手の後詰、今朝出馬ある由風説頻也。何分大勢に道を不被塞前に、御開陣候へかしと道中に置れし物見の者共馳返り證據分明に陣中へ觸廻りければ、我先にと大東通り、富田を指て引入る後に能々考ふれば、是は跡形もなき虚妄の空言也。荒隈よりの計策にて、斯様の浮説を被出けるかと見れば、無左も誰言ともなく斯様の偽り流布するも偏に、尼子家混亡の前表かとあきるゝ人も多かりける。

白鹿城二之城戸大合戦 并箭文返歌之事

永祿五年十月、毛利陸奥守元就、公吉川治部少輔元春、小早川佐衛門佐隆景父子三人再び島根郡へ爲出陣、赤穴藤が釣の城を發向有て、相從ふ人々には、共道陸家平賀太郎左衛門隆直、天野民部大輔元定、熊谷伊豆守信直、同兵庫介同左近、同左馬介三善修理亮、山内新左衛門高野山久意、同五郎兵衛古志清、左衛門有地美作守益田越中守出羽中務介佐波常陸介小笠原彈正少弼三澤三郎左衛門三刀屋彈正左衛門香川左衛門其外木梨池上祖式郡野久利三須等其勢二万余騎、油來縣合三刀屋大津平田邊に

曳きも不切軍兵ども支へたり、是より白濁へ出、荒隈山に向城を築き、南西の湖の波打際に亂杭逆茂木を挽舟懸りを構、東は中原末次の泥に堀を貫き、櫓を結廻し、北一方は比津原生馬法吉に馬の懸場を殘し、白鹿の城と其間三十四五町隔て陣所を取玉へば、富田を遠攻の謀にて急には軍は非じと社見へにける、其頃畿内には三好、細川、松永、織田、本願寺等の亂逆無止時、京師度々放火し、人民安住する事不能世の中なれば、道々の達人毛利に、寄心雲州の陣に下りける、中にも飛鳥井中納言雅春卿、聖護院門跡道澄、其外攝家清華、羽林名家の歴々を初、醫師道三或は能大失迄、聞連々々雲州に下りける、故被講席を立、儒書兵書の釋說、鞠の逸遊、或は和歌、連歌、席繪、武藝等日夜不怠、歡樂し給ふ、是唯尼子家の銳機を屈し、勢を待玉ふの計略とかや、斯遊樂の半にも二季には、富田近邊の麥稻を薙捨て、兵糧の道を斷玉へば、富田籠城之軍士、行末危く、二心を抱く者多し、況や毛利の武威に聞恐れ、但馬に山名祐豊、大田垣柿谷因幡に山名源十郎、豐定、武田高信が一族、美作には三浦の一族、佐用、新見、江美、齋藤、葦田、玉串の類、備前には浦上、宇喜多、一色、波多野、赤井、荻野、一黨播磨には神吉、別所、上月、矢島小寺等の人人々思ひに馳參り、荒隈、末次、白濁、中原、奥谷、龜田、佐田、比津原、法吉、生馬持田邊迄、村々郷々天地も不余充滿す、富田白鹿の兵糧を斷ち、折々矢軍の隙もなく

爰に白鹿麓に二の城戸を堅めし大將は、常福寺普門西堂とて、城主松田の末弟にて幼少より強氣逸勇の惡僧あり、近在の土民原は、元來弓馬刀鎗を好み、血氣剛氣の者共也、一年大内義興公管領の時、藤澤の清淨光寺の遊行一遍陀阿上人、大社參詣の素願有て、島根郡へ赴きけるに、白鹿近郷の百姓ども相集り、大内尼子は累世の怨敵の間なり、何ぞ義興之御教書を功に立る遊行坊主を通す事あらんや、連、白鹿の城へ訴へ、頓て四五百人往還に出向ひ、遊行の同勢を散々に射伏ける故に、宗密是非無く降參せられ、以來島根より北西郡へは入込間敷、西國一通りの往還は是迄の通り、可給通、頻に訛被申、故に許容して白濁より、宍道、三刀屋掛屋、油來、赤穴より三次へ直に通、被通ける、島根、秋鹿、幡縫、出雲、神門の郷々へは、後年に至る迄も不被通、斯様の一物剛猛の百姓どもなれば、普門西堂の催しに應じ、忍び、兵糧を城中に入れて、木戸に四五百人閉籠る、又此手之將帥として、赤穴浪人森田、左右衛門好澄、九州浪人神田彌右衛門、其外佐貫大介杯と云、精兵強力ども馳集りて、毎度毛利勢と手詰の合戦しけり、或時は三保の關にて廻船之米穀諸陣所へ可屈、兵糧を奪ひ取、香賀大芦の浦に竊に廻し、小白鹿山より忍入れ、城中、榎米、澤山に貯へける、此旨小早川聞て、小白鹿新山の尾崎、山道に勢を入置き、糧道を留玉ふ、依之城中以の外苦みけるに、又水を乾さん

とて、銀山より堀子を呼、寄山の薄き方より井戸の方を見すまし、堀入らせらる、故水自然と洩れて、城中渴し、艱苦不大形されども、敵に勢れたる色を見せじとて、白米に灰を交へ、朝々小高き所にて馬を牽出し、柄杓を以て振掛ければ、地低なる敵陣より之を見て、湯洗など如此致す上は、水も不盡と思はせけり、彼白米は直に洗上げ、馬の飼料となす、然りと云へども、追口偽事知れば、近々惣攻可有之とて、支度嚴重也、出羽中務少輔、我勢三百余騎を以て、拔掛し、切岸の根に着て、箭文を射ける、其短冊に

とし経れば白鹿の糸も破れ果て、毛利の木蔭の露と朽なん

此矢文を二の廓の内へ射込ければ、頓て本丸に達しける、松田兵部誰か返歌して射返せと云ければ、神田彌左衛門不取敢

安藝の毛利枝葉も落て、木枯の中に松田ぞ色しけり

此短冊を佐貫大炊介受取て、十三束三伏の大箭に結付、三人張りの弓を以て、能引て射ければ、下り矢の事なれば、出羽が陣を射越跡に續たる、熊谷が若黨の鎧の袖に受留たり、兵庫介取上見て、隆元公之急死を知て、枝葉も落て、誦たり、毛利方は木枯と成る中に、松田は雪後に色を増すと云心を以て、斯る返歌はせし者也、にくき返歌の仕様なり、さらば追詰手痛く一合戦せよとて、出羽一手に成て、討ども突けども、少も魏

々せず戦ければ、城兵も久村久左衛門、山尾刑部、村井兵庫介等、一千余騎命を不惜戦ひける。熊谷出羽散々に討たされ、一町斗引退く。隆直下知して追返し、自ら猛勢にて救ひ來り、揉立々々戦へば、城兵は荒手もなく、戦勢れながら、森田神田を初として浪人の者共一騎と成て突けども、切ども物の數もせず、待鶴たる合戦なれば、千騎が一騎に成迄と、隊伍を亂し、勇を振つて踏込々々、深手の血煙りに眼も闇み、盲打にぞしたりける。故、流石の熊谷出羽が家の子九人迄討取られ、隆直も己に危く見へける所に、元春三千余騎にて無會釋も横様に掛入、隆直出羽を助玉へば、又牛尾松田等人數を盡し、二千余騎、久村村井を助よごかけ出く。戦ひければ、合戦は互格成りし所へ、杉原播磨守五百騎にて救ひ來り、青眼に討て掛る勢れ切たる城兵ども、今日の合戦は是迄、逆城中へ颯と引、此時若林伯耆守が嫡孫宗八、宗五郎兄弟共に敵の首三つ四つ取て分捕高名し、本丸へ出し、其後又蒐出て討死す。兄は十八弟は十五歳とぞ聞へける。誠に鬼若林が孫なれば、孫鬼とも可謂逆比類少き名を揚げける。其外牛尾太郎左衛門深手を負て引く家の子和田、恩田、飛石等を初として大勢二の城戸の外に戦死す。毛利にも百八十余人討れ、手負は數を不知とぞ聞ける。

熊野合戦 井和泉守討死之事

雲州熊野城には兵庫介、和泉守、小次郎等、櫓籠動もすれば毛利一味の者を惱しける間、一當當て見よとて、白鹿の城は攻口の守りを堅め、置大勢を押留め、元就父子三人出馬有ければ、三澤、三刀屋、山の内、三善、小笠原、木梨、猶崎等押寄て、鐵炮數千挺掛、城中の様体を試みたる、兵庫介久忠、城兵を一手に成て櫓を突寄、其影より箭を放つ事夥し、元來要害堅固にして、勇猛の者ども命を不惜防戦ひければ、毛利勢度々被追捲ける所に、山内新左衛門五百騎斗にて取て返し、咄と攻上りけるを見て、城兵ども箭を射る事雨の如く、鐵炮を搏つ事雹の飛に似たり。然ども山内是を物どもせず、一枚櫓をかつき、連ね隊伍を亂し、攻上りければ、熊野勢辟易して、引色に見へける所に、富田より加勢として被籠置たる大西重兵衛、四百騎にて打て出、三澤、小笠原と渡合、不疹不去、揉合けるが終に三澤、小笠原勢か捲落れければ、熊野和泉守續て付入、小笠原郎等を一鎗に突伏、其首を取んとする所へ、三澤勢取て返し、ねらひ詰て放つ箭に和泉守が腰のはづれを射られたるを見て、山形小五郎と云者、森脇彌四郎と兩人駆付打て掛る。和泉守運の盡る所にや、味方不知之一人も不來助終に山形に討れける。

社無念也、重兵衛が曰、此度大勢を引受ながら軍には勝て、一騎當千の和泉守を失ひたり、當城の一臂折たりと呆れて居ければ、兵庫介が曰、和泉守續く味方なきに深入して討死仕るは理の當然に候、運にも五運と云あり、天運人運、世運事運、義運也、彼れが討死は事の運にて候也、不足悔と申ければ皆感じ入にける、

富田勢出張先鋒争ひ 并白鹿の麓合戦尼子方敗北之事

斯て富田には、大守右衛門督義久公并九郎倫久、八郎四郎秀久、其外家老近習の諸士を集め、此度熊野合戦に、大西重兵衛を加勢として遣し、勝軍したれども、一騎當千の和泉守を失ひ、其上白鹿は久々籠城、此頃に至ては殊に及難義難忍、由法進日夜也、然る上は當城の人数を盡し、加勢して藝州勢を國境まで追拂可申やと宣へば、立原源太兵衛山中鹿之助申けるは、此度白鹿の城へ後卷を被指下候は、近習の者に先鋒を給るべし、味方何程勢を盡し候とも毛利の勢には難及候間、近習三百人先鋒仕り手詰の合戦仕りなば、大敵を追退く事も候へども、大身之旁々并々々の戦ひせられ候ては、中々敵を追拂ふ事成がたく覺候と申ければ、老中大身之面々聞て、近習の人々先陣被致とも、元來小勢なれば若敵の大勢に揉立られ、一度敗北あらば、大勢之後陣

と害迄成可く、先懸は大身の者共仕るが理の當然にて候、近習三百人にて千四五百人より外は候間敷、此小勢にて大勢に出合初度の合戦仕損じ有ては立返し難成、又我々は五百七百或は千騎二千騎づ、持候へば十三人の家老斗にて一萬四五千は候間、隊伍を分て戦候へば、強懸は分りても畢竟大勢也、又某等年齢は長け、一騎合の勇社各には劣り候とも、人数の掛引軍に馴候義は、我々に各劣り玉へば、一隊二隊敵を迎合、合戦半と見玉ふ時、各拔連れて或は敵を欺き、或は伏勢と成て、臨機應變に依て、横鎗を入られ候は、必定軍に勝利を可得候と、各々一同に被申ければ、若手の者共、合戦は變動也、味方必勝と思はれる、大身衆之御所存を破り、我々強て前鋒仕り万一戦ひに利を失ひ候時は、當城の御大事に候間、各々御先陣有るべし、我々は御旗本近く罷在、救應の時に至り、討て出可申とぞ答へける、依之舍弟倫久惣大將として、隨逐の人々には龜井能登守、佐世伊豆守、半尾遠江守、同彈正忠、同豊前守、河本彌兵衛、宇山飛彈守、森脇長門守、湯野信濃守、同佐渡守、川副美作守、高尾縫殿助、同右馬亮、神西三郎左衛門、秋上三郎左衛門、同伊織之介、熊野兵庫介、櫻井入道仁齋、三刀屋藏人助、馬田彦三郎、廣田藤四郎、黒正甚兵衛作間、淺山、山佐寺本、棋山以下七千余騎先陣に進めば、後隊は近習立原備前守、同源太兵衛、山中鹿之助、大西重兵衛、同新四郎、本田豊前守

同與次郎、力石兵庫介、同源介、平野又右衛門、同加兵衛、吉田三郎左衛門、同八郎左衛門、眞木惣右衛門、津森入道、同息四郎二郎、岸左馬進、同孫右衛門、屋簀右兵衛、安達重兵衛、足立二郎右衛門、池田市左衛門、相良九郎兵衛、正田右衛門、尉遠藤甚九郎已下三千余騎、永祿六年九月廿一日富田月の城を立て先陣七千余騎を五隊に備へ進ける、近習の三千騎は一手に成て先鋒負けなば入替らんと、勇氣盛に其行粧最爽に備へたり、倫久公は旗本馬廻り一千余騎にて其跡に續玉へば如何なる阿修羅が堅城八万四千の魔敵なりとも、どりひしぐべき有様也、此上にも万一軍中に變ある事も可有か、其備へとして牛尾三河守に、二千余騎を添へ、二日後れて被差下、斯て白鹿城中には月山より大勢救ひ來りしと大に歡び、内外一万五千余騎、軍機を取直し備へ嚴重に堂々たり、毛利方是を見て、此度は數年の合戦と違ひ、尼子毛利の讐晴し、國争の勝敗は、此一戦に極りたり、手強く當て以來のこらしめとせん、乍爾大敵は欺きかたく、虚實恒に變動す、武勇に誇て仕損じ玉ふな、大將の免なきに、拔掛して、仮令拔群の手柄有と云とも、軍法を以て其罪を糺すべし懸るとも引とも互に助合、拔んで一人の手柄を勿好事、捉稠敷軍令し、先づ熊谷伊豆守、益田越中守、佐波常陸介を合て一隊となし、天野民部少輔、平賀太郎左衛門を二隊となし、其跡は小早川隆景大將たり、杉原

播磨守、三刀屋彈正左衛門先隊として其跡に吉川元春大將たり、吉田旗本勢は合戦の弱からん方を可助と備へ給ふ、然るに出雲勢早朝より馬を出し、弓鐵炮を放掛、關を數度作り掛戦を催すれども、毛利方一圓に不騒靜まり返て楯を一面に突并べ、其陰に控へて不出合、依之龜井、牛尾等も色々疑勢をなし、呼引けれども、箭の一筋も不射出、早今日も申刻に下りければ、徒に精氣を揉、或は雜言して敵を勵し、偽り欺きて招きけれども、馬にだに乘たる武士一人もなく、中々軍すべき有様とは不見、富田勢退屈し、勇氣緩み、隊伍も不堅見へけり、去れば今日は引て休息し、明日疾く攻寄無二無三に切入らんとて、諸卒後陣より繰引に曳歸るを、元就遙に見玉ひて、時分は好きぞ、蒐れ者共と攻鼓を入、貝鐘を打て、追掛給へば、惣軍箭を放ち、鐵炮を響の飛ぶ如く、砂卷上蔭下し、攻附玉へば、龜井、牛尾、高尾等も扱は敵の謀に落入たり、此場を逃れ、何日誰に面を向くべき返し合せ切捲れど、聲々に呼戻し、各眞先に引返し、鎗の柄も折る斗に控立て、前後不顧防戦す、隆景、大野、平賀、杉原、三刀屋、赤穴、三澤等、曳々聲にて追詰め、蒐合せ切付れば、流石の龜井、牛尾等、後陣も不返、單兵にて防兼て見へける所に、立原、山中、横合に入り、手痛く防ける故、龜井、牛尾も稀有に命を助り、猶も味方を呼返せども、引立たる大勢なれば、耳にも不聞、右往左往に引にける、元春下知して、假令日

は暮るゝも、此勢に何國迄も追詰々々分捕して、大將之御威に預れ、斯大崩れに成たる敵を逃し、重て何日高名を顯はさんと勵ましければ、諸軍勢なにかは一人も可臆引組で、討つも有り被討もあり、逃る敵は遠矢に射落せ、近寄る敵は薙伏入亂れ戦ひけるに、敵味方三万五千余騎の軍兵なれば、何れを味方共分けかたく陣々亂れ備へ崩れて亂戦す、去れども富田勢は敵に欺かれ、不意を討れたる故、真木彦左衛門池田宗六等を初として、二百余人を被討ける。此儘月山に引入にも無面目とて、末次の端城に伯耆國人ども籠りて、毛利之味方致しけるを押寄て、一戦に追散し、首七八級討取て、是を一面目にして、何れも富田へぞ開陣せられける。不與成ける敗軍なり。近習の面々大守義久公に向ひ、老中大身の衆望にて先陣せられ給ふに、二時斗りの戦に、味方大崩れし、某等後陣より頓て引返さんと仕候へども、引く大勢に道を被塞押立られ、延引に切出候所、漸々龜井牛尾等取すくめられ、玉ふ所を救ひ命の際の一合戦仕りをめ、こ引返候事無本意存候と申ければ、義久公聞かせ給ひ戦の道、勝つも負くるも耻ならず、百度戦ふて百度勝つものもあらねども、味方何んの軍慮も不施、敵の不出合は謀有るに極りたり、きたなき負をする耳ならず、敵に機を吞れ、嘲弄せらるゝ事の殘念さよ、白鹿城内にも思儲ぬ味方之敗軍最早籠城も難成、敵に降

るか生害するか、是又我が軍威の滅する所也と、以の外怒り玉ふぞ理り也、夫より近習の者ども日夜大守の側に侍り、老中大身の面々を讒訴する故、所々の城主、或は采地を滅じ、又は家城を被取上人々多し、依之義久公を恨みて、積憤する者、大勢出来、日々富田を背き、毛利に降り志を通じ、内變を待つ者もあり、一家中思々々に立ち分れ、軍議等も一致せず、白鹿城中には頼切たる加勢も、纔一戦に敗亡し、城中兵糧盡き、何日の際に城を守べきとて、元就へ降参を乞ひ、藝州へ入る者多かりけり。命を助り、富田へ歸る者あり、城主松田兵部は夜に紛れ、隠州へ落行けり、牛尾太郎左衛門は城に残り、自害せんとしけるを、吉田勢蒐込み、色々と申宥め、富田の城へ返しける。普門西堂は松田の一族を伴ひ、甲の丸へ入て、漸く生害せられける。森田左衛門好澄は、愛をも落て富田へ入る時節を社待ちにける。此松田が母は、尼子晴久公の兄弟にて、義久公の伯母也、其子息は從弟なれば、富田よりも無二の恩祿を玉はり、榮花を極し人々なれば、一族忠死せられけるも、理なり、兵部隠州に蟄居するは時を待て、再び鬱憤を晴すべしと遠慮ある故也、惣而尼子旗下にて、祿の第一は白鹿、第二は三澤、第三は三刀屋、第四は赤穴、第五は牛尾、第六高瀬、第七神西、第八熊野、第九真木、第十大西也、是を出雲一國の十旗と云、其外石見、因幡、伯耆等にて、大小品々あり、爰に此度富田勢、白鹿

麓へ來着の時、城中元春陣中へ箭文を射込たり、

元就は白鹿の糸に繋れて引も切られず射も射られず

と有けるに熊谷返答せよと有ければ取敢ず、

・尼の子の命とたのむ白鹿糸今ぞ引切る安藝の元就

と書て城戸へ射込ける富田方には不吉の返歌を受たりと後にぞ思合せけり、

伊藤福良城合戦 井作間入道討死之事

意宇郡伊藤城主作間左衛門入道は、尼子譜代の待なりしかども、聊尼子を恨む事有りてか、又は毛利の勢にや恐れけん、元就に降禮し、富田怨讐の思を企ける事社不忠也、月山に近ければ、其次第早く富田へ聞へければ、搦捕て誅戮せよとて、秋上伊織介久家を大將として、眞木宗右衛門、同七郎左衛門、岸左馬之進、同孫右衛門、目加田馬田を先として、宗徒の兵八百余騎斗有ければ、伊東の城へ押寄たり、折節入道は二百騎斗有之、左右前後に引牽し、城戸を堰と開き防戦す、作間は焚槍が勇を得し、拔群の者なれば、富田勢を一散に蒐散し、眞木一族を大半討取る、富田勢不叶して引ける所に眞木上野介が弟に岸左馬之進と云精兵の手連あり、藪陰にかくれ居て作間が出る

を待居たるに逃るを追て、蒐來る矢頃近く成ければ、覗ひ寄て能引て兵と放つ、作間が胸板を射抜きたり、一箭なれども急所故、二言とも不謂死たりけり、頼て岸が若黨ども首取て鬼神とも欺く、作間入道をば岸が一矢にて討取たりと、矢柄を控て呼はれば、初に切立られし者ども取て返し、百余人の敵をぞ討取ける、殘黨原は行衛も不知逃失ければ、頼て城内を乗取けり、彼眞木上野介が弓術は養由叔草女が意合の秘密を傳へ、本間孫四郎が附屬の傳授を能く練磨して、強弓の手垂也、其奥儀を傳へし左馬之進當代之弓の古實者なれば、作間が胸板を射通けるも理也、斯て義久公は伊藤の福良山の城を一戰に攻取而已か、城主作間入道を討取、大に力を得、頼て城番として吉岡、波多野兩人を被籠置所に、此者ども俄に心替りて荒隈へ使者を立、御味方に可降候間、御加勢の爲め御人數を當城へ被添候へかし、近々富田御發向之刻、御手合可宜候と申す故、元就公大に喜悅あり、鐵炮の小頭、小川右衛門兵衛勝久に、大筒小筒五百余挺を爲持、伊東の城へ差遣し給へば、義久公聞之、憎き吉岡波多野ども哉、不日に打向ひ、彼等を討取、諸侍の懲めとせよとて、自ら大將として三千余騎、福良の城へ向ひ給ふ所に、勝久が鐵炮を車輪方に立て、懈怠なく打掛る故、富田勢即時に死人二百余人ぞ出來ける故、此城力攻には難成、連虎口を少し引退き、元來小城なれば追

取巻兵糧攻にぞし給ひける、依之城中一日も堪へがたく城を明て荒隈へ落て行ける故、義久笑坪に入又城番を置き、其上助勢の爲め迎安來の十神山の城にも人數を籠置き給ひけり、

伯州濱目合戦 并因伯之兵糧船大江奪取事

出雲國內も最早八郡毛利方へ切取て富田近邊は二季に麥を薙ぎ、稻を薙ぎに難兵を出し、富田を疲らし玉ふ而已か四民飢に及び、適々月山に志を通ずる者有と云へども、敵に兵糧を被差留ける故、城中以の外精力盡き、此上は但因の味方より、兵糧を被寸志候へど、使者度々重りけるに付、小船數艘に積て、十神山、福良山の兩城へ繰入る由荒隈へ漏開へければ、兒玉、飯田、香川、山縣等に、軍兵を差添、馬潟、大江、戸の井、三保關を警固させ、陸路には福原、飛落等に、鐵炮を三百挺爲持、濱の目へ陣取らせければ、但因の船ども中々弓ヶ濱へは着事不叶、此旨富田へ聞へければ、先濱目の福原を夜討に打破り、兵糧を引て城に入よとて、十一月廿七日宵闇に、千余騎、究竟の者を選んで押寄せ玉ふ、福原も無油斷待設たる事なれば、陣所より鐵炮三百挺打掛て防戦し、池田、力石、相良等命を不惜戰ける故、合戦互格にして、一引曳て休みける所に、弓

ヶ濱に合戦有と聞て、警固の軍兵、小船に取乗て漕付て、一人も不逃と後を取巻ける處に、神田、濱へ富田より伏勢を被出て、熊谷、新右衛門、横道、兵庫助、宇山、大八、河添、小平、太目、黒大學等、蟄龍に陣取て居けるが、船手より後巻掛るを見て、濱に添て打向ければ、船手の勢岸にも不得上、唯但因の兵糧船を奪取て、大江へ引ければ、伏兵は味方の敗軍を助引入けり、福原も不案内の場所なれば、跡をも不追、元の出張へ引返す、双方死人百余人、手負は不知其數とぞ

野白一揆合戦毛利勢敗走の事

荒隈旗本勢の内血氣の人々、毎日近郷へ出て、民屋を追亂し、又は麥稻を刈捨てる故、万民苦みに堪兼て、富田へ訴ければ、鐵砲百挺、斗貸玉はり候へば、近隣の士民等、野伏一揆を催し、荒隈より出る所の隘者どもを防ぎ可申と願ければ、鐵砲百五十挺、弓五十張添て、足輕二百人を被加勢ける、依之忌部、平原、野白、福富、藤名の百姓ども、打集り野白に陣小屋を構へ、秣新等、迨支へければ、惡き土民原の振舞、戟掛向て追散せとて、元春より下知せられければ、桂左衛門大夫を大將として、庄原、兵部、坂新、五左衛門等を始め、旗本勢五百余騎、白潟より押寄ける、野白の陣小屋には、物音もせず、煙も絶々

に見ゆる故、扱は百姓共は今朝より野合の防ぎの爲に小屋を出けるぞ、其留守へ押掛小屋を焼拂へよと云儘に、五百余騎の者ども備を亂し、近付けるに、箭頭も好しと見る時、分鐵炮一度に打掛、又玉藥を仕込間、は雨の降る如く箭を放ちければ、元來百姓斗と思ひ侮り、備も不立押掛たる事なれば、的に立て射らるゝ者數を不知、這々乃木濱まで引て一息繼居ける所に、百姓共案内知りたる事なれば、山越をして二三百人古志原邊より廻り、荒隈勢を目の下に見なし、不寄思も東の方より関を咄と上るや否、鐵炮を打掛、戰掛れば、荒隈勢大に周章て、そも此敵は天より降りけん、地よりや湧出けん、呆れ果て、防がんとする者は稀なり、前後の敵に被包立漏る方無き陣勢なれば、百姓の手に掛らんより、湖水に溺死せよと云ひければ、中にも坂新五左衛門は機變に賢き者なれば、いざや一枚楯を突て、鐵炮弓を凌ぎ、東方を手痛く切り破らば、元來野伏原なれば、打物に難立られ、寄附事有間敷と下知して、真丸に堅まり、袖師の浦より打を切立々々戰ひければ、流石の集たる百姓勢、此勢に辟易して山手へ颯と引ければ、其間に荒隈勢は白濁迄を引にける、然るに毛利勢の内に林奎之丞と云小賢き主從五人、百姓勢に紛れ入込、野白へ附入て、火を掛ける故、俄に燃上り、折節暴風烈敷して一軒も不殘焼拂ひければ、百姓勢軍には思ふ圖に勝ながら陣屋

を焼かれ、無詮方己が様々退散したり、此日百姓方に被討者三十五人、毛利方に死する者百二十一人、何れも皆鐵炮に當り死たれば、首を被取者はなかりけり、

杉原播磨守盛重と山中立原秋上等三保關軍之事

伯州尾高の泉山城主行松入道は、近年毛利の大刀風に随ひ居けるが、病死せられ子息兩人は未弱年なれば、杉原播磨守盛重は武勇智謀兼備の者なれば、行松が子息徳若丸、松千代を守立、且は伯州の鎮守として可罷越と元就公より被下知ける故、己が居城備後國神邊には宗徒の勢を少々殘置、泉の城に行にける、然るに三保關には兵糧手寄の爲め、山中鹿之介、立原源太兵衛、森脇市正、本田豊前守、同息與次郎、平野又右衛門、秋上伊織、介、眞木宗右衛門、同興市、牛尾彈正忠等四千騎を富田より被指向、毛利家之營固の武士を追拂はせ、猶彼所に在て、折々伯州を惱しける事度々なれば、盛重泉山に入て三保關を追拂ひ、武威を振はんと思立ち、二千余騎を引率し、不意に三保關へ押涉り、敵の備なきを討んとて、働きけるに、待設たる事なれば、森脇本田父子、眞木等一手に成て先鋒として戰ひけるに、勇猛なる盛重地利を能々見て、阻難路狭ければ、兩寄の陣に備ひて、受つ開らきつ攻附れば、尼子方戰窮て、引く所を、追立々々附

て行く斯る處に山中、牛尾、平野等一千騎斗にて二陣に控へけるが敵は兩寄に備へて追來るぞ、我勢は未兵糧に不備、必定可打負、暫く九島に備へ、敵を苦しめ、其隙に食を遣うて可戰とて、頓て騎馬を四方に立て、弓鐵炮を繁く并べて、緩兵の策をなし、九島にぞ陣取り、先陣己に被追詰軍將の面々も危く見へける所に、山中、立原、後陣を入代へ、陰陽に取巻、敵の楯より内に蒐入り、薙立れば、流石の盛重、後陣に控へけるが戰負て十町斗り引て行く、斯處へ秋上は後陣に有けるが時分はよしとぞ、山の後より関の聲を作りて、横槍を入れ、嶮岨の岩壁より追詰引詰射ければ、伯州勢大きに崩立ち、跡を不顧、逃走れば餘すな漏すなど、拔連て行く、盛重、渚の吹上濱の小高き所に旗印指上げ、敗軍を待集めければ、無程又六七百騎斗ぞ集りける處に、吉田八郎左衛門、福山肥後守兩人は此度の着到にはあらねども、勇者々々の杉原、山中、立原等が合戰なれば、定めて能き戰有べき間、見物せんとて靜に出ける所に、彼六七百騎の敵共、一息繼て居けるを見て、殆ど笑を含み、咄と掛寄、関を揚れば、盛重、勢爰も敵の埋伏有るやと、惻れながら、回霜に備へて又大きに戰たり、去れども窮れたる伯州勢なれば、不堪して一方を切抜、這々泉山へぞ歸りける、尼子方も最早、勢れたれば是迄ぞ、連三保關へ引入けるが、又泉山へ押寄せ、拒戰ふ事度々なり、然其盛重が謀に落入て、油

斷せしかば、尼子方討負、後藤、福塚、吉野等も討死し、飛石も、平井、中山等も數十人、深手負て歸陣の後卒しける、其外吉田八郎左衛門、真野宗右衛門、牛尾彈正忠は深手に苦しみ、漸く己々が家城へぞ歸りける、

富田惣政三口合戰 井毛利勢荒隈歸陣之事

永祿八年二月始、方毛利隆元の嫡子少輔太郎輝元、十三才、元春の嫡子吉川少輔次郎元長十八才にて、雲州へ來り玉へば、祖父元就公大に歎び、孫兩人が初陣の爲め、四月十七日富田攻可有と諸軍に觸玉へば、陣中勇み立、其用意嚴重也、然る處に、赤穴の舊臣吾郷伊賀守勝久聞て頓て右京亮に向ひ、四月十七日富田惣政可有之由承候、然るに三畧の虎巻にて考候へば、此日味方より蒐玉ひては大惡日にて候間、重て日取有之候様に、と元就公へ可仰達候と申ければ、右京亮此度は輝元初陣なれば、專天象地形支干等迄、随分被改、出馬可有筈也、さらば此趣可申達、連本陣に行き、斯と演達有ければ、元就公暫し御思案有て、成程支干にて考候へば、吉日に候へ共、軍事に用候ては蒐の負に相當り候間、然ば十八日に、出陣可申、殊に孫共が始て戰場に向事に候へば、天象地利、能考可申處、兩人之孫共軍を差急ぎ折檻仕るに仍て、十七日と觸廻し候也

伊賀守は六稻三略に、吳子、孫子、司馬法尉僚子、太宗問對都て武の七書を能考へ誦學したる者に候へは、是迄も度々吉凶を占せ候也。連四月十八日を惣攻と改てぞ觸ける。斯て三隊に分けて一方は尾子森口、此一方は大將元就、輝元公向ひ玉へば、其先手として福原左近丞、桂能登守同左衛門大夫、志道上野介、口羽、兒玉、栗屋渡邊、赤川己下毛利家譜代の者共也。鐵炮大將には、飛落七郎右衛門、渡部太郎左衛門數百挺を卒し眞先に向ふ。鹽谷口へは吉川元春、嫡子元長、大將として熊谷父子相隨ふ。菅谷口へは小早川隆景に、平内兵衛、杉原播磨守、南條豊後守等也。然るに拔蒐したる毛利勢四百騎、斗森口にて細屋奎之助、河本彌兵衛二百騎斗りにて渡り合、火水に成て戰けるが又吉田八郎左衛門、福山肥後守、牛尾彈正忠、三刀屋藏人、中井駿河守、同平藏等助來りて、鐵炮入替々々討懸る。故横見、木原、櫻井與次郎、江戸、材間、三須等を先として、尼子勢に被追立、討死しければ、毛利勢不叶して引退さける處に、福原左近丞、桂元澄、同元忠、志道廣好、口羽道好、同春好、兒玉就忠、同就方、坂就清、其外渡邊兄弟、栗屋兄弟、庄原兵部、香川廣景、三須隆經、南方、井上、藏田等押寄せ、拔懸の敗軍を助けければ、義久公も牛尾豊前守、神西三郎左衛門、高尾右馬允、櫻井入道、横道兵庫介、平野嘉兵衛、力石兵庫、津森白次郎、馬田尾張守、黒田右京亮、川添右京介、同次郎左衛門、吉田三郎左衛門、熊谷兵庫介等をぞ被追向、既に毛利勢をぞ追立けるよと見へける處に、輝元の旗本勢、天野民部太輔、同紀伊守、同中務少輔、眞先に懸り、横槍を入、火花を散し防ぎければ、毛利方は力を得取て歸し、喚て懸れば、又義久公の旗本勢一千斗り、山上に有けるが、是を見て一文字に追下し、毛利方に名を得たる勇士八十余人ぞ討たるに、尼子方にも二十余人討死すれば、互に元の陣所々々へ相引にぞ引にける。鹽谷口には元春備に規律有て熊谷も戰の是非を考へ、討て蒐らんと思ふ處に、是も拔蒐の者五百余騎深入して戰けるが、森脇市正、平野又右衛門、大西重兵衛、熊谷新右衛門、立原源太兵衛等、三千余騎の眞先に進み防戦しければ、毛利方引色に見へける。故秋山三郎左衛門、同伊織介福山次郎左衛門等、三百騎斗にて茶臼山の蔭より不意に討て出けるに、何程心命を投て懸戦へども、窮切て見へける處を、横道源助、百騎計にて打て廻り、細廻源右衛門と渡合ひ、終に細廻を討取ける。又笠間刑部少輔も被討けり。城兵是に力を得て、山上より逆様に落し懸れば、無詮方引退く。此時熊谷吉川四千余騎にて後陣より押寄せ、敗軍を救ひければ、立原、山中、黒田、川本、湯田、胡河添等渡り合、既に毛利方勝軍と見へれば、龜井安綱、牛尾の一族三人一と手に成て、六百騎短兵急に助け來れば、前後不覺に備も混亂し、閉ちつ開きつ討つ捲つ、雌雄は今日の此譽れと戰けるに、日も夕陽に

をぞ被追向、既に毛利勢をぞ追立けるよと見へける處に、輝元の旗本勢、天野民部太輔、同紀伊守、同中務少輔、眞先に懸り、横槍を入、火花を散し防ぎければ、毛利方は力を得取て歸し、喚て懸れば、又義久公の旗本勢一千斗り、山上に有けるが、是を見て一文字に追下し、毛利方に名を得たる勇士八十余人ぞ討たるに、尼子方にも二十余人討死すれば、互に元の陣所々々へ相引にぞ引にける。鹽谷口には元春備に規律有て熊谷も戰の是非を考へ、討て蒐らんと思ふ處に、是も拔蒐の者五百余騎深入して戰けるが、森脇市正、平野又右衛門、大西重兵衛、熊谷新右衛門、立原源太兵衛等、三千余騎の眞先に進み防戦しければ、毛利方引色に見へける。故秋山三郎左衛門、同伊織介福山次郎左衛門等、三百騎斗にて茶臼山の蔭より不意に討て出けるに、何程心命を投て懸戦へども、窮切て見へける處を、横道源助、百騎計にて打て廻り、細廻源右衛門と渡合ひ、終に細廻を討取ける。又笠間刑部少輔も被討けり。城兵是に力を得て、山上より逆様に落し懸れば、無詮方引退く。此時熊谷吉川四千余騎にて後陣より押寄せ、敗軍を救ひければ、立原、山中、黒田、川本、湯田、胡河添等渡り合、既に毛利方勝軍と見へれば、龜井安綱、牛尾の一族三人一と手に成て、六百騎短兵急に助け來れば、前後不覺に備も混亂し、閉ちつ開きつ討つ捲つ、雌雄は今日の此譽れと戰けるに、日も夕陽に

春て城兵は首七十余級取て城へ引く。吉川熊谷も首五十余級取て引にける。菅田口には尼子八郎四郎秀久を大將として立原備前守、目黒池田、本田與次郎、目加田采女同團右衛門、宇山飛彈守、佐世伊豆守、湯野左渡守、高尾縫殿允、黒正甚兵衛、眞木惣右衛門、森脇長門守、馬田彦四郎、廣田藤四郎、津森入道、相良九郎兵衛、遠藤甚九郎、正田右衛門尉等三千余騎打て出る。爰に米原が郎等に磐の上源介と、本田與次郎と一番鎧を合せ、火水に成て戦けるが、終に源介討れける。目黒甚四郎、杉原盛重に被討。池田宗六は南條宗勝が郎等に被討ける。本田豊前守は岩倉山より五百騎を引て下りければ、勝誇たる小早川勢、少も魏々せず、咄と喚いて突て懸れば、本田も勇力熾盛の者なれば、不疼不慮防戦す。互に死人手負を乗越て、暫し戦けるが、小早川方終に追立られ、敵の首四十八級討取たるを一と面目にして、陣所へ颯と引入けるに、本田も首數五十級討取て、靜に城中へ入にける。毛利勢は都て三万五千余騎を三つに分ち、森口、鹽谷、菅谷の三口より攻寄る。此大軍を引受る城内は、一万余騎にて、三口の戦勝負は六歩城方の勝とぞ聞へける。今日の戦に毛利方仕損せしは、若者共軍法に背き、拔懸せし失なりとかや。毛利勢は八幡山、淨安寺、石原駒返り峠にぞ陣取ける。元就公能々軍慮を廻らし、思案し玉ふは、城中無人とはいへ共、未だ一万余騎有べし、尤兵士すくや

か成事、前々よりすまじ、近來兵糧を妨ぐる。雖、少しも飢饉の様も不見。今何程か戦ふといへ共、暫く攻落す事、不容易去ば、今暫く拒み圍んで、不戦して敵の機を屈し、勢に付て逸を可討。連二十八日には、惣勢荒隈へ引拂とぞ觸られける。夫に付、秋山伊織介、森脇長門守、五六百騎にて弓鐵炮を手繁討懸け、追懸ければ、小早川後殿にて其威勢、少も不疼、英々堂々として靜に引取ける。軍勢を呼返し、蹈止て追捲ければ、原彌次郎少しも不引、井上又右衛門と渡り合ひ、暫時雌雄を爭ひけるが、終に彌次郎討れける。仍て城兵、引色に成て周章ける。後陣の者共是を見て、引續て一千余騎、鐵炮嚴敷打懸けるに、小早川勢七人迄討れければ、城兵共も是を鹽にして、城中へ入にける。小勢なりといへ共、富田方は雜兵共一死賊と成て戦故、多勢の毛利方に、打勝、大將も士卒も、歎の眉を開きける。雖然、大身衆と近習の面々と、去る白髮合戦の刻、前後の爭ひ、大身衆一戦に敗亡したる故、互に讒口無止時。軍卒も不和と成ける故、大將の命令をも不受様々成有様に、行末は心元なくぞ評しける。國の將に亡びんとする時、兩雄爭ふとは、今此時、尼子家の風俗也と、心有人々は安き心もなかりける。

毛利所々人數置 并再富田發向端城落る事

伯耆國江美城主蜂塚右衛門尉は先年毛利に降りけるが、全く非本意當時の急難を逃れん爲めなり。又尼子へ歸り、無二の志を成しけるが、毛利より杉原に下知して城を被攻けるに、今田上野介、二の宮奎之助を探り使として被差向合戦、花々敷有けるが、小勢にて難澁に及びしかば、右衛門尉さわやかに鎧ひ、出立終に潔く討死して名を後代に残ける。又大江の城には吉田左京亮討死の後、嫡子源四郎十一才にて、郎等共守立籠城しけるが、三村修理亮家親、香川光景兩人に下知せられける處に、種上孫兵衛、福山肥後守、熊谷又兵衛、同小平太、平松大八等得たりや賢しと、究竟の兵六十五人、源四郎を中軍に守護し、十文字に切拂ひ、突共射共、少も不慮、四方八面を薙廻り一方を切抜け一息繼ぐ處に、富田より後卷として牛尾彈正忠秋、山伊織介、本田與次郎二千余騎にて被差向けられ共城は早敵の爲に乘取られければ、源四郎と共に敵の首余多提けて富田城内へ荅入城には毛利方より人數を被籠置て、永祿八年九月、元就、輝元、元春、元長、隆景三万余騎にて再び富田へ攻寄せられ、石原山、瀧山邊に向城を築き、又末次の土肥には、米原平内兵衛を殘し置き、瀧山、切川、法性寺、三保關、戸の井、伊藤の福良山へも人數を入置玉ひければ、富田近邊の端城等、毛利勢に圍れ、堪がたく月に引入者も有、又は毛利家へ降る者も有、安來守山にて長屋小次郎を被籠置ける

故伯州口より富田への通路も塞りければ、少々志を通ずる者も憫るゝ計、不思も敵に信を通じける由、粗聞へければ、彼等が疑心も慰せん爲、又は兵糧軍勢催促の爲、平野又右衛門、福山肥後守兩人を尼子より作州に忍んで被遣然るに、早作州の味方は心替りしてければ、小田原法性寺の兩城にて、兩人共潔く生害をぞ致しける、去程に尼子方に熊谷新右衛門と言勇者有、元來此先祖は去る應仁の頃、細川山名合戦の刻、山名家の侍に、永井新藏、武邊、強勇の者ありけるが、聊の儀有て山名時氏の勸氣を受て、京都内野より本國伯耆國に下り、漂泊流浪の身と成て、後尼子經久に被扶持、軍事に度々奇功有るに、仍て熊谷の郷二ヶ村を被宛行ける、依之熊谷山に城を築き、老後を樂みける、依之世人熊谷殿と稱する、故自然と苗字として其子熊谷新右衛門、天性正直質素にして、忠義は誠に如金石、勇力は万人に秀でたり、平生人の惡心不忠を見ては、的前に戒之、又他人にても忠義、或は仮初にも善事有る時は、近寄り親み、一杯の酒も共に呑み、少にても曲り奢る者を嫌ひ、追從輕薄を制する心故に、非道と見れば、主君親族をも悉く折檻す、斯様の忠臣、廉直の人なれば、連晴久公の近習に被置、晝夜奉公無懈怠、意宮仕しける、或時新宮黨日頃武勇軍功を鼻に懸け、非道の權威に慕り玉ふを見て、下馬札の内へ牛に乗て入込、坏しければ、國久の家來共見咎めて、下馬札

を不知無禮者也打殺せど大勢取巻けるを熊谷聞て下馬札を知たる故牛に乗て通る也是も禁制せらるゝならば下牛札を立添られかし逆彼の家來共を追散し打擲しけると也是は新宮黨の我が勇力を頼みに我儘の奢を爲す故熊谷と斯様にしける事尤忠臣と可言父新藏病死以後は家の子を少々我が知行所熊谷に置き其身は富田に有ける處に毛利元就近年は雲州に陣を据へ玉ふ故備藝石より兵糧運送有に毎年熊谷が家の子共夜討強盜して奪取故毛利元就大に怒り玉ひて小川右衛門兵衛勝久と云ふ鐵砲の上手に、雜兵三百人差添へ、熊谷の家城を打潰し玉へば元來小隼の砦を營み置たる事なれば終に小川に打潰され直に勝久を熊谷に暫く在城せられけり又は尺の内に少しの砦を構へ市川徑好を取籠たり是は三刀屋彈正忠勇猛の人なれ共心に決斷なき人にて朝には味方にて夕には仇とも敵とも可成異變の人柄なれば親類の藏人助さへ、尼子方に有て忠義を盡すに彈正父子は毛利に従ふ故第一此押へたり又は須佐邊の山中に本庄が殘黨原徘徊する故此一揆を捕らん爲或は赤穴より糧米運送の道警固の爲め旁以如是熊谷尺の内挟んで市川小川を置かれしとなり此時新右衛門大に怒り直に家城を取返し小川を可討取と思へ共又思案して假令は勝久を討取家城を取歸したり共三刀屋市川に挟れては往々

孤城難守斯迄毛利の大勢に富田を被包拒たる折柄なれば一人にても太守の御先途を見届奉る社本意なれ逆怒りをねさへ居けるが何様方便り寄て元就を刺殺し假令我身は荒隈の土と成る共六十余才の元就に近付さへするなれば一刀に討留んものと思ひ定め傍輩の原宗右衛門は我が無二の朋友賢士にて忠義全く武勇者なれば彼と示し合せん逆頼て密に評議をなし此心底を義久公に伺ひければ忠義至極の義也と甚御威心被成依之密に富田を忍び出ければ原熊谷さへ降參に出たりと口々に私語きけるが追々忍んで降參しける者大小共に十八人跡より追來り別所切川にて追付斯と告ければ兩人思ふ様は彼等が降參は誠の不義也我々兩人は敵を欺き偽る降參なれば胸中は明されず只何となく打連れて乃木の茂木の中に休息して原申けるは諸士荒隈に至れば誰に従て降參の義を可申入哉と尋ければ熊谷聞て爰に赤名の家臣伊賀守美濃守兄弟は右京亮名代として六七百騎を從へ荒隈に有由伊賀守は文武二道の譽有故常に元就元春の身の廻りに侍り軍事を閑談す又其隙には七書を講釋せりとかや然るに彼兄弟は元來智謀軍慮に秀たる者故に毛利の大軍を退けんが爲に偽りて毛利に降り時節を待て運を計りて尼子を取立んと胸中如鐵石と先年白髮戰の時森田左衛門が物語に承る仍而此度

伊賀守へ申入、降参の取次可頼假令我々が胸中白地に不語共、彼は只ものならねば忽承知して取持ち可申間、降禮を述る座席にも彼等兄弟あらば、味方の能き後橋可成、今宵書簡を遣し、明朝案内を可頼と云ければ、原も尤、迎召家來壹人に書簡を爲持遣しける、伊賀守は何事やらんと、此手紙をさくと見て、弟美濃守を密に招き、尼子無二の忠臣熊谷新右衛門、原宗右衛門を始として都合廿人の者共、弓折矢盡て、尼子の家運も今既に傾かんと欲す、此故に銘々毛利へ降参仕度間、我々兄弟宜敷取成し、本領安堵致す様に、呉々頼むこの書簡也、余人は格別、熊谷原は中々一命は果す共敵に下る不義者に非ず、定て胸中に謀計有て、偽りの降参と見へたり、頼む所も多きに我々兄弟を頼み來る事、是又我胸中を闇に探り知て、斯申越せし者也、明日元就公に降参の禮を述べ、盃事の時に彼等が振舞を可見、届迎安々と返書を認め、明朝對顔の上にて万談可承、迎使者を歸しける、明れば廿人の者共、銘々纔に一兩人の家來を召連て、伊賀守の陣所に来り、對面の事終り、元就公に件の仔細を逐一に申上ければ、元就公父子早速許容有ければ、即同道にて本陣に出、降参の禮一途調ひければ、盃を被出、元就公は三間の奥に座し、玉へば、左右に近習の勇士三十四人、二行に連り、二三間に伺候す、酒肴等の給仕人も、皆々二刀を挟み、襖障子一重の奥には、大勢の聲曲に聞へ

て、降人等は三の間に隔て着座す、伊賀守兄弟は三の間の上座に着て有ければ、熊谷原兩人は、十八人の席を蹈越て、着座すと雖、兼ての存意大きく相違し、中々元就公元春公の近所へも不寄附、左右の武士はすわと云は、切付ん勢に見へて、中々以て謀は成就せずと思へば、思ふ程、心中は大に苦しみ、怒り隠すと思へど、胸中は二人が面に顯れけり、然共大事の前ぞと思案を堅め、汗を隠して平伏す、元就公一々降人の姓名を聞き、尼子家にて知行格式の高下迄も聞て書記させ、玉ふ、中には目附番頭物頭等の者も有けるに、熊谷原は知行は有ながら、近習頭也、頼て元就公御盃を玉はりければ、十八人の者共、古實禮義を糺し、恭敷頂戴す、然るに原熊谷兩人は、元就公の膝元近く、摺寄て盃を取上げれば、左右三十余人の者共、此時はいつともなく、元就公の側へ差寄ければ、扱ては彌々油斷はし、玉はず、是非無次第也、迎其後は思直し、此席にて假令十人廿人切付たり共、中々元就父子の傍へも寄付事不叶、一向犬死せんよりは、時節をも可待、迎静まり返りて居ければ、此時取次せし、伊賀守兄弟も大變の出来ぬ、其先に迎辭義を取繕へ、御暇を乞て一同に御前を下りける、斯る胸中を推察し、玉へて元就公跡にて、兄玉、赤川の面々を呼ばれ、今日富田より降人に出し中に、番頭物頭城主も有之事なれば、知行格式の高下を以て着座すべき筈なるに、熊谷原兩人は

近習の身にて十八人の者を踏越上座に着ける不審さよ、其上惣て彼等兩人が眼中に見處多き顔魂身振所作迄返すくも合点行かず、必定方便にて我に降り透を見て、響をなさん謀と見へたり誠に熊谷は尼子の旗下にても山中立原熊谷は三傑と呼ぶる、忠臣義士今安々と降りしは幸の擒也、早陣所へ追込んで稠敷番を付置べし、又十八人の者共は、味方の着到に可入置と宣へば、奉畏候連直ちに馳向ふ處に、熊谷原兩人は、元就公に胸中を見透されしと思ひ、迎も大願不叶と、色々出奔の工面を凝し、忽荒隈を欠落して富田へ歸りける、依之元就公へ斯と注進しければ、其後伊賀守兄弟も彼等を引入し罪に仍て軍法に可被行と仰出されければ、此事早忍びのもの、伊賀守へ告知らせける故、取物も取不敢従者三百人計を引連て、富田の方へ志し、早々陣中を抜出けるに、組手番人を見付て、吉川へ訴ければ、去らば追手を懸よと下知し玉ふ、御前に有合ふ桂左衛門尉某馳向ひ召捕て可參と、早々馬に打乗りて家の子共は跡より急に追付よと呼はり、眞先に懸出す、赤川桂が家の子共、四五百人計り跡を慕ふて追て行、伊賀守が家の子共は、後れ馳に追付て、申様は追手として、赤川桂の大勢にて既に宇賀山被越候と申せば、扱ては富田迄逃る事の不可、一向此處にて兎も角も、運を天に可任、速究竟の地理を見立て、纔の勢を魚鱗に備へたり、美濃守

は五十人計を手元に引連、追來る敵を突捲らんと、今やく待處に、無程桂左衛門尉が先懸、三百余騎にて古志原へ馳着ければ、美濃守迎ひ合せ、鎗先揃へて突て懸れば、乍纔死物狂の勇猛力に任せ、被突立桂勢は色めく處を、桂左衛門下知をなし、鶴翼に開いて追取捲けと呼はりければ、美濃守は歩行立也、桂は馬上也、歸に懸んと、働けば、美濃守は馬足に懸立られ、少し危く見へけるが、懸て鎗追取延て、馬の前足を颯と突きければ、馬は浮に立て狂けるが、桂が眞逆様に、刎落されしを、續て突んとする處に、桂が家子大勢一度に立塞り、美濃守に無手と組む、此隙に桂左衛門鎗追取延へ、美濃守に突て懸るを、後より組附たる勇者を一人引摺み、前へ押出し、鎗の受身となせば、桂は我が若黨をばづみ切たる鎗先にて、用捨もなく突伏たり、桂尙も手繁く突懸れば、彼手負の若黨を手取に、二間計投付れば、桂は叶はじと思ひけん、若黨の手を引立て、跡なる味方をぞ待居けるに、美濃守は不透附込み、桂が妻手の腕を突ければ、既に危く見へける處に、後より三百人計追付て、頓て郎黨が乗りたる馬に乗り玉へとて、其儘大庭の方へぞ引にける、殘黨尙も五百人計、爰彼所にて相手を迎へ、群り戦ふ有様はいつ可果共不見ける、左計り廣き小志原に手負死人ぞ重り伏す、美濃守は手のもの三十余人被討、其身も二ヶ所鎗疵を乍受、敵を討事其數しらず、去共尙

も兄伊賀守が陣も無心元迎引歸し見れば、是も同じく備を亂して戦いまだ半なり伊賀守其身に三矢受薄手ながらも鎧疵三ヶ所負て、敵大勢を引受秘術を盡し、家子小田采女が深手を圍ひ戦ひけるに、弟美濃守此跡を見るよりも、討漏されし若黨其廿人を左右に従へ咄と叫びて切散す、大力の美濃守に被難立軍は是迄也、主人の安否も無心元迎退んとするもの計にて、進む敵一人もなく、次第々々に引退きければ相手なければ美濃守跡を追ふにも不及、迎富田を差て急がんとする處に、一人馳來り某今朝は陣外に出て罷在に付是迄御供も不仕候へども御跡を慕ひ漸只今馳着て候扱又毛利方より追手は桂殿計にては手合無覺東迎、元春よりも米原平内兵衛を津田山越に茶臼山を廻り、別所へ懸りて富田越の道を塞ぎ待伏せ被申答儘に承候間御大事と存是迄懸付候と申ければ、扱は此道筋より富田へ入事難叶然らば道を替へよ、迎手負を介抱し大庭の宮より忌部へ懸り、牛尾通り富田川の水上へ廻り鹽谷口より月山城へぞ入にける、頓て新右衛門宗右衛門對面し死残りたる勢の内二百人計は赤穴直臣故疵を養生せし後赤穴へ被歸ける、伊賀守兄弟の人には手の者三十人計を月山に召連暫休足して疵を保養致しける、又主人赤穴右京亮へは、始終の事を一々書記して申上置又表向にて申遣し候は、某等兄弟は身に覺なき虚名

を受けて身上難立依之無是非出奔仕候處に、毛利家より追手を引受大庭、佐草古志原にて苦戦仕り九死一生を逃れ、月山迄逃入罷在候、早速赤穴へ歸陣可仕候へども、某等罷歸候ては、右京亮公毛利家の疑ひ不少候間、差控富田に暫休足仕罷在候、隨分御身の上御誤り無之段被仰開無難に時節を御待候へと意味を含ませ申送る、是より伊賀守兄弟は浪々の身と成り終に再び赤穴には仕官せざりける、去ども古郷なれば、後には忍んで石州鹽谷澤又は雲州油來邊に住居すと聞へける、惜哉伊賀守兄弟、不和が珠の未だ誠の玉すりに不逢徒に、楚山に朽なんどす、熊谷新右衛門が降參を取持て、毛利家へは敵となる赤穴に再仕官する時は、又右京亮毛利家へ不和の基と成扱又信長より召抱んどあれども二君に仕るの不義、爰を能々守て終に伯夷叔齊が跡を追ひ、首陽の巖に飢て社名は和漢に出るならんとして、隠林に世を軽く住居ける、

雲陽軍實記 第四卷

山中鹿之助品川大膳富田川中嶋合戦の事

石見國益田越中守藤包が郎黨に、品川大膳迎、其丈五尺九寸、色黒く筋骨荒くして、兩の眉尻上て目逆立、體身に毛生て如熊、力量は猪の生首も可捻切勢、血氣短慮の勇者有り、然るに富田方に當時度々功名を顯す、山中鹿之助、立原源太兵衛、熊谷新左衛門、迎、三傑と號謂し、勇猛有て、五度合戦の勇名を上るに付て、大膳思ふ様、我拔群の大勇力を乍持不運にして、是迄萬人の目を驚す程の高名なし、今尼子方の三勇の内、一人成共出合、一騎合の勝負をして、名を格上に可出、勿論鹿之助は軍智博學の聞へ勇猛兼備の者なれば、何卒して渠を討ば、拔群の可爲高名と思定め、附城を出て毎日敵陣を窺ひ、山中をぞ覗ひける、或日富田川端の一陣所に、赤糸威の鎧に男鹿の五鎖り懸けたる角を銀にて卓物したる甲を着、其骨柄五尺餘りと見ゆて、中肉色白く、風俗美敷き男壹人陣所を廻り下知をなす、大膳是を見て必定是社鹿之助ならんと見定め、名字を槓木と替へ、名を狼之助助盛と改て、自慢して言様は鹿は槓の若芽を喰ひ角を落す物也、狼は鹿を能取者也、我鹿之助を討取ん爲斯の如く改號せり、迎、或日又富

田川堤を見渡せば例の美男并に傍輩と見へて三四人同道し通りかゝるを、狼之助見付て大音揚げ向に鹿の角の卓物被致候は及承山中鹿之助殿と見るは僻目か、斯申すは益田越中守が内に横木狼之助と申者にて候、個様に川を隔て、毎日足輕迫合計り見物仕らんよりは、一騎合にあれなる中島にて互に器量をも顯し、敵味方の眠を醒させ可申、日頃の勇名被恥候は、只今見參申さんと呼びければ、鹿之助聞て多き軍勢の中に能社某を被呼し物哉合戦仔細候はん、連直に川中へ涉り掛れば、狼之助大弓に箭打番へ同川へぞ飛入にける、爰に秋山伊織介、五月早苗介、藪中荆之助など一同に大音上げ申様望み懸て一騎合合戦に飛道具を被持候事、臆病に見へ候、互に名乗懸ての勝負に候間、打物にて御出合候へかしと云けれ共、狼之助、川越にて不聞入や、又は空不聞にてや弓をも不捨三十間計涉りければ、伊織介堪兼持たる弓に大雁股の矢を番へ兵と放す、其矢狼之助が持たる弓の弦をずんと射れば、川中にて被切たる故無詮方弓は彼所へ投捨て、中嶋差て涉り行、富田勢堤に見上り、大音上、伊織介が弓は養由より直傳にて候間、河柳の葉にても的に被立候へと咄と笑て控へにける、狼之助大に怒り中島へ上るや否、四尺計の太刀打振り討て懸る、鹿之助も三尺貳寸則光の太刀を以て抜合ひ、手練を盡し、蛛手開手獅子の洞入、虎亂入、青眼に氣

を張詰受つ留つ切結び切拂ひ、曳々聲は流れに添て夥し、然る處に良もすれば、狼之助水際に追詰られ受、太刀と成て危く見へにける處に、急度思案し、鹿之助は打物手練は五陵趙雲が鎗にも越し、鞍馬天狗の秘術を得し義經にも不劣ば、何時迄打達ふたり共我及ぶまじ、力量は又我彼に殆ど増れりと思ひ、いざや鹿殿組申さん勢氣を凝し、最早一時餘り戦ふても互に薄手も不負組で勝負を決せんと言ければ、實尤も太刀投捨て、鹿之助思ふ様、狼は我が勇力を頼んで組伏んと計心懸くべし、力劣りなれば、必定我は組伏られん、下より一刀も刺通さは弱らん事疑ひ無し、其時下より刎返し、首極落して引べしと思案し、懸聲して組合しは、能美の宿禰の相撲の手合も是には過ぎずと見へにける、富田川の兩の堤には、互の味方機を張詰拳を握り、勝負何れと身を縮め、赤面してぞ控へける、稍捻合組合寄つ放れつ、虚々實々捻合けるが、中島の端なる水控きの洲先へ、鹿之助妻手の足を踏込みければ、其身下つて片身に受けるに、大の男の狼之助聲を掛て捻りければ、終に鹿之助は被組伏刺れんと見へけるに、鹿之助は頓智にて、洲先へ足の入や否、腰刀に手を掛け伏すと、其儘下の鍔の草摺疊上て、二刀迄太股掛て繰り付ければ、流石の狼弱る所を刎返し、首極切て大音上げ、石見の國より出たる狼をば、出雲の鹿が討取たり、尤より、横は好物也、相伴せよと呼

はり々、味方の中へ涉り上れば、伊織之助早苗之助、荆之助等を初め、岸の上に控へたる味方の者、覺へず勝鬨を揚げれば、益田方の者共大に嘯をなし、傍輩を眼前に討せ、見捨ては不被歸と、五百余人川中へ討て入り、鹿之助不逃と追て来る、秋山早苗之助、數中等眞先に進み、箭先を揃て射掛け、其少も不疼川中迄追来る、此時立原源太兵衛は本丸に有けるが、只今鹿之助と狼之助と不慮に一騎合の戦ひ有り、と聞くより有合兵二三百人引連鐵砲百挺計にて川岸に下り、著川中の敵を的に見て、打掛く、防ぎければ、矢庭に又十人計打伏られて不叶と思ひけん、元の出張へ引にける、外様の毛利勢は、不入狼之助が犬死哉敵の機を副へ、味方の損を仕出したりと、戦ひを余所に見て、皆々陣所へ歸りける、鹿之助も敵の後より射る矢に、鎧の綿髪の端を三矢迄被射て、漸味方の陣中へぞ歸りける、

尼子家臣降毛利 并宇山飛驒守中井駿河守被讒事

去頃、富田城内軍士共兵糧日々に乏敷成るに、隨ひ心細く思ひにける故、毛利へ降參に出る者多し、中にも牛尾豊前守は、妻女の勸めにて、伯父遠江守が所領牛尾七百貫の地を給りなば、御味方に可參と申入にける故、毛利方にも評議にて、彼が降參せば

富田城中に名有武士は、追々不招に皆可降参、感々許容有ければ、其後龜井能登守安綱、河本彌兵衛隆任、佐世伊豆守清宗、湯信濃守惟宗等一統に降人に出にける、此旨趣を尋るに、大塚與左三衛門と言奸佞邪曲の侍有て、義久公の身邊に侍り、家中の功有者を妬み、讒言する故、無罪にて非業の死を玉る者多し、又座頭一人晝夜近邊に有て、義久公に色を進め、己が深慾に長じ、政道を妨げ、君を邪道に導きける故、彼が爲に、落命し、君臣の愛義を厭離する者數十人也、依之さしも無二の忠臣義士の名を得たる龜井、河本、湯、佐世等も、讒口を怖れ、累代恩顧の義を捨て降参しける也、中にも津の森入道は、荒隈陣中に親敷者多有之故、妻女幼弱の者共は、彼親類方へ先達て遣し置き、嫡子四郎治郎計を被召連、義久公の御先途を見届、忠義を盡さんとしけるに、彼も反人有て、妻子等は先へ荒隈へ遣し置、父子残り居て、君の油斷を伺ひ討奉らんと謀み有る由、散々に讒言しければ、津の森是を聞て、此上は不及力、逆遣言を認め、毛頭二心無之段、書盡し、四郎治郎は君の御行末可奉見届と認め、置、潔く切腹しける、宇山飛驒守久信、中井駿河守久包に向ひ、此頃城中の者共追々荒隈へ降人に出る事大勢也、是大塚與三左衛門と座當角部が讒言を信用し、玉ふ故に、誰が身の上に何時如何様の難澁か可受哉と思ふて、逃る者も有、又毛利方より當城近邊へ附城數ヶ所、拵へ軍士

を入置、北國方より見頃の兵糧船を得んと、三穗關大江、伊藤、島田、角十、神山邊に打出、奪ひければ、城中妻子眷屬等及飢苦み歎く故、無據身を退くる者も多し、然るに御邊と我は家中第一に富裕成り、逆人に常に體弄候間、貧窮の侍共降参せざる前に、隨分勞り置扶持すべし、一人にても留置かば、君の爲莫大の助と可成と申ければ、久包聞て、御邊は世上風聞の通米穀にても余計取持たれ候間、左様も可相成、某は人の評判と違ひ、貯へ余計無之候、然共人の心を曳く爲めに候へば、土藏の窓に戸口へ米穀を積み、澤山に所持仕る様披露して、落人共を引留、屈次第に勞り可申と内議し、此謀を用ければ、兩人が介抱にて、降参を思ひ立者共も俄に止まり、彼家宅に集り、飢を凌ぎ居ける處に、大塚此趣を聞て、宇山を讒言の罪に落し、其跡の財寶を申受奪取らんと思案して、色々讒口を構へける、中に宇山中井兩人は、米穀の貯有之に付、毛利へ降参すべき者共を養ひ置、君の御爲に合戦致させんと、表向に大勢を扶持し、候へども、全く左様にては無之、密に毛利家へ内通し、本領安堵の判物迄、毛利三家より取置候て、近々荒隈より惣攻せらるゝ時を見計ひ、君御兄弟を奉討て、毛利方へ渡し可申條、手筈分明に承り候と、誠しやかに讒言す、依之義久公大に、驚玉ひ、宇山中井は累世の忠臣の家故、恩賞も他に異にして、宛行ひしに、今我落目を見て、反心を抱く段、言語

同斷也、さらは事のもれぬ先に、此方より仕懸、兩人を誅戮せよ、逆何の思慮もなく、虚實も糺さず、討手大西重兵衛、本田豊前守を呼び、明れば、元旦の禮に、宇山中井登城すべし、其刻可討取と下知せられければ、兩人承り、上命には候へども、彼等反心とは難心得存候間、万一讒訴等にて一端の御誤にては、一家中の異變に相成條、被召出幾重にも糺明有て、其上討果し候共、何の妨か候、惣て軍功なく、君の左右計勤候者は、軍賞他の恩祿を妬み、晝夜君の御側に仕る甲斐には、忠臣義士を讒言仕る事、從昔和漢其例多候、愚臣等が存ずるは、彼兩人共なかゝ、不忠不義を仕る者共とは、不見受候、御前に辨佞の者有て、君を申誣る事を恐れ、是迄幕下の面々、直臣老中職の中迄、二心を抱くかと存候と、憚る處なく、諫言す、君大に怒て、我が近習の者は、皆佞奸の者計召仕と存ずるや、謀叛の實正見届けずしては、事は不行、其所存にては、今後の密事行ふ事相成るべしやと、怒り玉へは、兩人は憫るゝ計り、此上御諫申すども、御承引は有間敷候、何分君命の通一往相隨へ、其上比干、吳子胥が跡を可追と申ければ、義久面色赫々として、罪科の證分明也、全く卒忽の下知に非ず、早く用意せよと宣へば、兩人は是偏へに、大塚が讒口と思へども、無詮方領掌して立出けり、頓て供人一人も不召具、密々宇山が館に忍び行き、飛驒守殿に直々に閑談し度候と申入ければ、飛驒守何心なく

一間に立出御兩人月迫の今日御入來は如何様の御内談に候やと申せば兩人涙を破亂と流し去れば語るも難き事に候へども貴方と中井駿河守殿と落行味方を被抱置候事は毛利方へ密通有て惣攻の時不意に内變し君を奉討用意に人數を扶持せられ候と君聞召吾々兩人討手の役を蒙り明元朝に御登城の時伏兵を以て奉討筈に被仰付候は大塚が讒言と推し再往御諫言申候へ共無御承引尼子家破滅の基御武運も末に至り候ぞや大塚と座頭常に御前に伺候し諸人を讒言仕候へば誰々迎も皆無實の刃を可受也併主命難通明日討手に可參候間御用意兼て極玉ふべし其期にて吾々も後れ先達ち草葉の露皆以て冥土の友千鳥にて候日頃無二心申合候間其情難忘内々にて知らせ申すなりと言ければ飛驒守少も不驚斯有べきと存候牛尾遠江守も甥の豊前守降參仕に付御不審を蒙り嫡子太郎左衛門二男彌次郎同名大炊介益田入道等も此頃荒隈へ被降候へども某は此城を枕とし代々の御恩を可報と存候處以之外無實の讒言に被支て君臣の情永く絶候事無念に存候各々日頃の智音を不被捨以內議御知らせ玉る事御厚志の程は來世にて御禮可申然は今生の御暇乞一献頂戴可申迎手早く酒を取出させ此盃は大西殿御始に成され某に可給と所望すれば任望宇山へ差す宇山吞で本田へさす本田吞で宇山へ戻

す大西納めんやと言へば其盃は本田へ被遣候て後貴殿へ納候へかし左候へば各々は三献相濟拙者は二献の腹切酒にて仕舞申候と莞爾と笑ふ有様は源九郎義經の高誼の死酒盛も斯社あらめと目醒しくさらばと涙と俱に立別れけるが振歸り

三つ瀬川何いとふらん我迎も頓てそ落ん道芝の露

本田豊前守

歳暮かな我年玉は道に待て

大西重兵衛

と言捨て人知らず我家に歸りける宇山は兩人を門外へ見送り館に入て嫡子彌四郎を呼寄せ暫し密談して中井が方へ遣し又家臣眞野兵衛を呼我々も此城にて兎も角もと思ひしに此頃名有る侍は大方毛利へ降るに付當城破落近きにあり汝は二男を召連荒隈へ行き米原を頼で先達て元就へ可降我と彌四郎は跡より可落行此一書は平内兵衛へ可届迎幼稚の人に書翰を添被渡ける兵衛は是を誠と思ひ鹽谷の山中迄落し宇山は妻女を呼出し始終の物語りして心靜に刺殺しければ夜は寅の刻計に更行ける勞はし共中々武士の義理程難かりし事ぞ無き是も尼子家の運命究る前表也

宇山飛彈守父子讒死 并大塚與三左衛門座頭等被誅事

明れば永録九年寅正月元旦富田中の諸士上下共に未明より新年の賀儀に登城有り、中にも宇山中井討手の密事を兼て承る人々は卯の上刻より登城して、今やと待處に、最早辰の刻に至れども、宇山中井は登城せざれば、太守義久も不審に被思召飛驒守駿河守は何逆遲參候やと被尋、大西重兵衛進み出先程家來を指遣し、乍余所見合罷歸り候へと申付密に遣候間追付様子相知れ可申と言處に家子馳歸り申様能々密々見合候處門戸を閉し家内静り返て人音も不仕、二三遍屋敷の外面を見廻り候へども、門戸を塞ぎ有之間家内の様子は不相知と言上す、義久公色を損じ、扱も我胸中の密事、昨夜の内に彼に漏らす者有て落失けるか、又は其事は不知共荒隈へ降人に出けるか何條某等早く馳向ひ是非を可試と宣へば、兼て究竟の組手共我逸に宇山が館に行にける、右家來の口上も大西兼て申開置れし口上也斯て大勢蒐附見れば門戸を閉たり、門外にて大勢騒ぐ聲を聞て内より門を颯と開かせ、久々養ひ置く安達重兵衛、杉浦久助、久村又左衛門、高杉右衛門、尉羽倉孫兵衛等を先として三十五人弓箭取て打番箭通りは近し、如雨雹射付ければ、先に進む屋簷右兵衛尉立

原備前守が家の子共、一矢二矢手を不負はなし、大西後に立大音上げ、宇山殿は大勢落行べき味方の者を扶持し、毛利の計畧を受、主君を奉討との二心願れ、討手として大西重兵衛、本田豊前守向ふたり、萬一讒者の虎口にて、虚名を被受たる儀に候はゞ追手を御防ぎ迄も無く、尋常に生害有り、死後に忠臣の名を揚玉へかしと呼はりければ、頓て飛驒守下に白小袖を着し、志那皮威の冑、五枚鍔の甲を猪首に着成し、腰刀計にて静に玄關に出現るゝや、大西殿我胸中に無覺被掛讒口、只今落命仕る、然るに歴々の者共、毛利へ大勢降て候へ共、於某は代々の依恩顧當城を枕とし、君の御先途をも可奉見届と存候所思も不寄蒙御不審、今日各討手として御向候様子、今朝未明に大塚與三左衛門より座頭角部を以告知らせ何分隠し勢を以今朝君を奉襲候へかしと、大塚が指圖にて申越候へども、對譜代之主君可挽弓も無之候、只今切腹仕る死後の申開きは各より能々頼存ずる也、且又大塚か逆心無御油斷可被制候と言捨腹十文字に掻切て伏ければ、諸軍勢聞之、扱は大塚毛利に組し、忠臣武勇の者を退け己が慈心毛利の恩賞を受んとの惡逆、晝夜君の御側に有ては無心元次第也と私言ければ、大西は聞之、適成る宇山が一言哉、富田中万人の障と成る者共なれば、其身は死ても忠義と成る遺言、爲君奸佞を退る謀惜哉、宇山が軍智と、口には不出共、心中に

歎念す頓て立寄宇山が首を討んとする處に、脇指の柄に握り添たる一書有、取て見れば無二心忠臣と存候へども、依虎口之讒言落命仕也、御不審被散候様に能々可被申達、且又大塚は急ぎ殺害なくば内變近きに可有之とぞ書たりける、一間には妻女の死骸有けるが、頓て側近き家の子八人、同枕に殉死をぞ遂げにける、大西は首一々取て家内土藏の米穀を点檢し、急ぎ町家の夫力を以一粒も不散本丸に運送させ又武具馬具其外の財寶不依善惡、一々注文を以義久公の御前へ積上させ、午の下刻計に成ければ、宇山が書翰にて中井が空名も晴たれば、討手に向ふに不及、強て宣はゞ重て可討向逆歸りけるが、本田申様、大西殿は直々登城有て、宇山が遺書と首共を被捧候へ、我は是より座頭角部が宅へ罷越打果すべし、其子細は先刻宇山が大音にて大塚が逆意の手筈座頭角部を以今朝申越たると呼り候事、諸軍勢聞處に候我々が密事は覆ひ隠し、奸曲の大塚座當兩人を誅せん軍勢の心を休め、君の御爲を存ずる故に社宇山も斯は計らふぞと見えたり、此座頭を助置かば全く大塚が使に不被付時は、只證據無之義宇山が志も點心し、且吾々兩人が爲も可惡大塚一人は御前にて理不盡に打果し可申是詮する處は忠義の謀也と密々言ければ、大塚聞て遁れ遠智の至才と領掌す、從是立分れて角部が宅へ行ければ、家中禮に廻り酒機嫌にて歸り

懸けるを踏込汝兼々晴久公、義久公兩代の君に仕へて惡心を申進し事數々也、依之萬人の爲に只今首を落すと云より早く打落し、直に登城しける、斯て義久公大廣間に出玉へば、家中の面々其席に座したる真中へ、大西畏り任仰宇山飛驒守父子并殉死の者八人の首御實見と椽側に差置、義久公打笑み玉ひ早速の功神妙々々、殊に宇山が貯へ置し料の物、本城へ送り兵糧の助を得たる振舞旁以祝着せり、追手軍卒の怪我はなきかと尋玉へば、大西承り今朝密談を告る者有之に付、全く反心に非るゆへ、潔く切腹仕死後に申開仕らんとて頓に覺悟を極め妻女までさし殺し、殉死八人の者も、いまだ某等向はざる前に相果居申候、遺書一通を残し置、是は宇山へ某等詞の戦も有之に付暫く控へ相待居候て、右逸々問答相濟候て、直に生害仕候故、味方に手負も余計は無之、只切腹の時分少々射捨候間、箭を受候者味方に、總計御座候と言上す、又義久公曰、我密事を宇山に知らせしは誰ならん、不審不晴處也と宣へば、大西懷中より壹通を取り出し、大塚殿是を君へ被差上よ、先他見は御無用拙者直々に差上可申候へ共、戦場の歸懸け、甲冑土足にて候へば、御取次頼申と言ければ、大塚與三右衛門何心なく立て大西が一通を受取り歸りける處を、富田中の人喰ひ惡虎不通と切付れば、妻手の腕に受けるゆへ肩を切落され、うんと計に伏ければ、大將も列座

の面々も驚立て、如何に大西亂心かと、面々拔身にて立騒ぎける、大西少しも不驚狂氣不仕爲君奸曲佞人を退たり、鎮り玉へ人々、君はまつ彼壹通を御覽有て事を定め玉ふべし、斯申す上は某忠義を重んじ、君の爲亡命を不顧れば、遁れも不仕と、討物御前へ投出し、少もひるむ氣色なし、此故諸士も卒爾に刃を可向様もなく、只憫てぞ居たりける、又曰子細有て大塚を打果すは、御家の爲萬人の爲、巨細は本田が罷歸り候上一統に言上可申と、左も英々たる有様にて演ければ、無程本田豊前守角部が首提て立歸り、否に不及、大西が側にぞつかと座し、如何に大惡人一人は討留たり、今一人の大塚は如何にと言ければ、被見通討懸し處に、土足ゆへ御前を憚り少々目當違ひ腕を切落し候へば、定て君の御下知も可有と存差控へ候也と云處に、義久公兩人に向ひ、扱ても大塚が惡逆言語に絶たり、宇山父子が遺書逐一披見する處、大塚が謀計を以つて却て不意に吾を討んと計りける處の憎さ、斯様の八逆罪人とは不知、今迄は晝夜身邊に召仕へ、大小事共に悉く彼と内談して事を定めし無念さよ、諸軍士も嘸頼少く可思、我愚智の耻かしきよ、早く大塚が首討て獄門に梟よ、座頭も則本田が討取由一所に梟晒し、己來の見懲しとせん、昨日大西に討手申付候刻、段々諫言に及ぶと雖、我愚鈍にして不用之忠臣の宇山父子を殺せし事の無念さよと兩眼に如

瀧落涙し玉ふ、折社得たりと一座の人々、日頃大塚座頭が奸曲不屈者と存すれども君御寵愛の者故に、皆怒を押へ罷在候處、此度自ら惡逆顯れ候と、取附引付大勢申出る事口々也、頓て大塚をば休息部屋より引出し、熊谷新右衛門が手討に、川原にてぞ討れける、宇山父子殉死八人并飛驒守が妻女の死骸慙に葬り追善も不忘可營、我暗鈍にして斯る忠臣を無故誅戮したる事生涯の瑕瑾たりと、義久公前非を悔ひ玉へば、一座の軍士皆々袖をぞ濡しける、さて梓彌四郎は、父と一所に生害すと雖、未だ幼少の次男有之筈也、尋求て連來り、父が本領無相違可宛行と宜へ共、其行衛不知ける是は家臣眞野兵衛が介抱して、去る大晦日の夜深雪を凌ぎ、鹽谷山の麓に一宿し、夫より忍び、正月三日末次に至り、米原平内兵衛に對面し、一通を出し頼みけるを披見すれば、兵衛尉が口上と文通とは大に違ひ、嫡子彌四郎諸共可達生害候間、此次男は未だ仕官の身にても無之條、舊交を不忘、如何様共護り育て宇山の名字を残し玉へと、吳々と頼の文言也、兵衛の尉聞て、さては主人父子は討死と被極、我には隠し跡より降参に出べしと宜ひて、此幼息を添られしか被欺て一處に生害仕ざる事の無念さよと悔み果てぞ申ける、米原聞て尤の心底驚入候併、幼少の次男を預り守立て再び家名を被顯候は、是又殉死に勝る忠義也、我今敵味方と隔る共、元は同じ流の

尼子の家臣侍輩の頼を以一子を養ひ育るは武士の習隨分危略候間敷と又余義も無く申愚めけり此宇山は死て後讒者の敵を取而己不成万人の怨を散じける遁忠臣と言英雄と言ひ古今稀なる人傑なりと諸人口舌の稱美止まざりける、

元就以謀新宮黨被讒 井藝州似座當之事

抑座當角都が惡心熾盛數多き中に先年晴久公に仕へし始より晝夜伽と成て身邊に侍り色を集め酒宴技藝の者を集めて逸遊の亂酒放埒無限政道軍議に怠玉ふ様に仕成し家中又は所々の城主の面々迄も是を不用人をば散々に讒言し無罪も采地を取上或は死を玉ふ者も有又斯様の事に恐れ追從輕薄の賄賂を與へける老中城主をも物の數ともせず常に上席を穢し賄賂する者は雖無功宜く申成し不思寄加恩給りし故出頭第一にして一つとして望不足と言事なし然ども新宮の國久父子は一向此座頭を不用其身晴久公の伯父或は從弟なれば家中も幕下も肩を並る者もなく武功廣大なれば武威尤熾盛にして驕奢の心日々に出来る然共此人々亂世には孔孟の道不足用連和漢一巻の書籍も見玉はず五常に欠實は輕く行ひ罪は重くし玉ふに付諸士の恨甚有て名染者稀なり此時座當己を不被用事を憤り様々

讒言を構へける由國久聞玉ひ何條今亂世に鎗矢一筋の用にも不立藝者盲人を抱置き誠に寵愛甚敷一族も老臣も足下に蹴散す事存外なり第一兵糧の不益も有所詮彼座當を討果し不益の遊人原を追拂はんと兼々怒玉ふを聞て角都晴久公に向ひ君の御寵愛を蒙り晝夜御伽に奉公仕故君は軍事にも怠り玉ひ政道も不正由依之無科某を切殺し玉はんと新宮の御父子兼々御巧み御座候由體に承り候大事の我身に掛らん内御暇玉はり候へかし上方邊に罷越し一命を繼申度候と段々訴へ申けるは遊人を抱置軍糧の不益利の當然也此義不及是非一往何方へも身を寄せ代の治る時を待迎路用の貯共耽々と與へ玉て出させらる去共國久の仕方心底には不叶内心不和の基と成る角都は高野山に弟子兄弟有之に付彼方へ通り尾の道へ通りける然るに兼て毛利家より富田へ物聞の恐びの者十人様々に妾を簞し入込居けるが此由聞き出し其儘毛利の陣所へ歸り耽々の事申述べれば元就公聞玉ひ今尼子方に新宮黨父子武勇血氣の將帥たる故度々の合戦に味方放走せり此人を失はんは此座頭也と工面して頓て小賢き徒士二人を呼出し謀を具に申含ませ座頭に妾をやつさせ角都が行し跡を忍びに附行けるに備後の尾道にて同船し乗り合餘多四方山の嘯しに中にこよせ賸の座頭角都に申様御仲間は何國

より何方へ御越候やと問角都答て拙者は雲州富田の角都と申して、大守晴久公御情深く奉公仕る者にて候と言ければ、藝州座頭申様さては承り及候角都坊にて候や、我等は藝州の者元就公に年久しく仕へ、雲州の御陣所迄御供仕罷越候へ共、吉川小早川の人々我を惡み陣中に不益成連被追出候故、上方邊に罷登り世の望には少しの出世をもと心掛け申候、其元には常に晴久公の御出頭と承り候へば、定て此度は檢校職の御望にて御上洛と相見へ、御美敷存ずる成りと言ければ、角都聞て去れば、社如仰晴久公には御寵愛不淺候へども、新宮の人々我等を散々に被爲謔言、君の御不義は皆某が業成連既に可被殺を、大守の御慈悲ゆへ一まづ上方へも立越世の靜謐の期には立歸り候様に、宜ふゆへ何の便もなき上京仕成りと答けり、其時似座頭申けるは、是は驚入たる御物語り承り、御勞敷社存じる也、出頭の者は我も人も必妬有事は、苦界の淺間敷さよ、然共其新宮の國久誠久にも大き成る不義有、我等も廿日計以前迄は、雲州毛利家の御陣所に相詰元就公の御側に罷在候處、彼父子三人より、密使度々來り候し、細は晴久を討果し候はば、吾々父子三人に、因伯雲の三ヶ國を都て可玉御判物を被下候に於ては、不日に晴久父子を討取其首を進上可仕と、度々の使者は來候へども、元就公は仁義大智の大將にて、今彼人の望に任す共、鬼神と

謂れし國久父子なれば、後日には少しの恨を以反心し、備石作州迄も切取んと企て可玉同姓と言惣領家と言親しき甥の晴久を亡し、敵の恩賞を受んと宜ふ國久は、人面獸心の惡人也、假令味方に屬して一端軍は治る共、後には當家の仇と成るべし、逆許容は不有之共、元春隆景の人々渠が望に任せ、一と先被差免候て、月山城には何れ成共被籠置、後日に反心あらば、其時計略を以可討候と、強て諫言を被致、依之元就公も大に得心有之趣に相見へ候、定て近々御判物新宮へ可被渡候、某其頃元就公の御膝元に罷在能々存居候成り、然ば尼子御父子の滅亡も不遠候と語りければ、角都聞て心中に思ひけるは、扱は能手掛りを聞付たり、立歸り君に密奏し、是迄の恨みを討返しせん物と、大に悦び軍陣に出千萬騎を討たり、其晴久公父子の御命を助奉る此度の功には可及と、獨り笑して浮立計に見へにける、扱船も兵庫に着ければ、角都申様某は此所なる、在所に智音の人候間、彼所へ罷寄り、五七日も休息可仕、貴方は夙に御登候へと暇乞して立別れ、其夜は兵庫に一宿して翌日より西へ、と急ぐ程に盲突に蒐て行似座頭も跡を付廻し慕ひ行けるが、播磨の明石の町にて見失ひ、何と尋ても不知然れども事は仕濟したり、連作州、湯原越して雲州に下り、荒隈の御陣所へぞ歸り入にける、角都本道筋を通り、富田の町端れに親き待有ければ、彼所に至て

某儀君の御大事を密々可申上、連兵庫より罷下り候間、今宵御引連れ登城被下候へかしと頼みければ、彼侍直に同道して登城しけるに、各番人もなく頓て晴久公に對面し、伴の物語一々言上すれば、大守大に驚き玉へども、今合戦の最中なれば暫く事を指延ると雖、心中には新宮黨を方便討ん謀を工夫し玉ふ事日夜也、座頭も亦本丸に隠し被置御寵愛前より又篤かりしが頓て新宮黨横死の後は、誰怖しき者もなく、息義久の世迄君を欺き徘徊し終に義久滅亡せられけり、

新宮黨父子横死 并敬久討死落書之事

如是晴久公、飽迄角都を愛し玉ひ、其身急死の後は、猶又息義久公の家務にも此盲人朝暮御側を不放しが、去る頃晴久公の伯父、紀伊守國久、其子式部大輔誠久、同左衛門太夫敬久、父子三人新宮谷に手勢三千餘騎にて住し、國々所々の剛敵も亡び、尼子家を興隆し玉へば、其英雄の名中國に輝き、毛利も尼子を亡し玉はん事は不易に依て、様々謀を以彼黨を退去し、然して後富田を攻んと思ひ玉へば、似座頭を以議之、又極罪人壹人を順禮山伏の跡に仕立、國久より元就公へ謀反の書翰を肌掛させ、富田川の水上にて溺死させ玉へば、川下の洲先に懸り居けるを郷人原見當り、彼書翰

と死骸とを月山に注進しければ、頓て書面を披見有るに、新宮黨毛利に心を寄内變を生じ、晴久父子を奉討、忠賞可給哉の文書なり、殊に中井平藏、末次讃岐守等國久に耻辱を被與し、怨も有て折々讒しければ、隱謀無疑に究り、堪忍難成、本田、大西、立原、相良、池田、平野等に、兼て國久父子を偽りて討と被下知れ共、新宮は努々不知之、驕奢旦夕に超過す、依之去る天文二十三年正月元旦に、國久は新春の賀詞を爲、演若黨貳十人計召具し、登城せられけるに、本田、豊前守、平野、又右衛門待伏し、組討に大勢集り討たりける、さしも猛將と聞へし紀伊守、方便に手なしとや、闇々と被討玉ふ事、社無慙也、式部太夫は富田の町家にて、大西、十兵衛隠れ居て、片股より馬の太腹迄切込ければ、馬より真逆様に落玉ふ處を取て押へ刺通し、立原、備前守首を掻く、國久、誠久方便討に逢玉ふよし、家子共逃歸て告ければ、敬久は道より取て返し、家門を閉て控へ玉ふ、其勢僅に貳千人計、一死賊と成て楯籠り玉へば、晴久公自身に打出玉ひ、富田に有合ふ軍兵、我不後と馳來、其勢五千余騎、新宮の館を取卷て戦けるに、敬久の弓勢に射立られ、時の間に二三十人を射られける、孟賁が勇、北宮黈が勢有て、寄附者も稀なりし處に、箭疵餘多負玉へば、逆も不叶物を、父や兄や、嗚々待遠に思れんと、椽先にて深く腹搔切て伏玉ふ、無慙成哉、晴久公、毛利の奇計に被落、親敷富田、桂石、伯父從弟を

一朝の間に讒言の嵐に打果し玉ふ、當家泯滅の前表とは言ながら、惜まぬ者はなかりけり、誠久の子息三人有て、嫡男は善四郎常久、二男は神四郎吉久、三男は助四郎、迎後に左衛門尉勝久と申せしは此人也、此時漸く貳歳にて有りしを、乳人懷中に抱き、他國に出養ひ立、再び乍暫時、尼子の家名を被起たり、兄達兩人は十四歳、十二歳にて見事なる生害有て、御首は本田豊前守取て、指出す哀れと云も疎なり、城門に落書張しに

尼の子の杖柱なる鬼神も、盲打にぞ討れけるかな

似座頼の謀ゆへ如此亡び玉ふとなり、又貳人の孫も被討玉へば都合五人討れ玉ふ

子指まで切れば、敵に向ふとも刀取られず足摺をする

又尼子の枝葉如此滅し玉ひては、富田の本案滅亡遠からず迎

子指皆切れば、大指只壹つ相手なければ刀握らじ

如此辻々にも落書するよし、晴久公被聞召、心中大に後悔し玉へ共、更に益なし、角都は新宮黨横死の後は、彌増に臂を張り、讒言無止時、依之終に義久公の治世、宇山が死後に盲首を拷木に梟てぞ晒さる、罪の程社恐しし、

平賀太郎左衛門向城合戦之事

斯て永祿九年五月下旬には、富田城中残り止る者、大身にては河添美作守森脇市正、近習には山中鹿之助、立原源太兵衛、横道源助、本田豊前守、同嫡子與次郎、大西重兵衛、牛尾彈正忠等を先として、名有る士纔に三千人に不過、平賀太郎左衛門隆祐が向城は、月山に程近ければ、押寄せ追落さんと評議して、五月二十四日彼向城へぞ押寄る、平賀も英雄万人に勝たるものなれば、終日小勢を以戦けるに、雌雄度々に替りける處に、平賀が郎黨東村小平太、大働して終に森脇に討れければ、双方相引にして軍は出にける、暫の戦に敵味方手負死人夥し、

元就公瘧病、尼子和平、并利害を以異見之事

同五月末方より、元就公瘧病頻りにして、寒熱往來甚しく、飲食日々に衰ける故、醫師花陀が術を盡せ共、六十餘歳の瘧病難治、扁鵲が法も難叶ければ、頼少く見へ玉ふ故、泰山輔君を祭り、其外不籠願もなく、不頼神佛もなし、軍中心肝を勞し、軍務に稍怠りける様に見へければ、吉川、小早川、其外諸老臣集りて曰、富田にも七年迄籠城する故

追々人數落失し、今は兵糧も盡る由聞へ候間、此時和を入なば、義久降幡を立玉ふべし、無左ば大將の病癘を幸に、是迄味方に降りし國士等反心して内變を生じ、或は富田勢を引入る事も可有候と評議一決しければ、頓て聖護院の道澄を以和義を言入られ候へかしと有ければ、道澄聞玉ひて、先年將軍義輝公より下知して、准后我等罷下り候節、大友とは和合有之候へ共、尼子とは累世の怨讐有之は、迎元就承引無之候然れ共、今各遠慮の段其理りに候間、一扱ひ執持見可申迎、米原平内兵衛綱寛を以、富田へ申入れれば、義久公御兄弟舊臣陪臣無殘大廣間に招き、此義如何と、被尋ければ、諸士一同に申様元就近頃、疾病の苦み強く、老體難堪由就夫軍事も懈怠の由、儲に承り候間、此處に乘じて三穗關、戸の井、意東、安來の端城を責落し、直に馬潟を堅め、兵糧船の通路を塞ぎ、又湖上に晝夜人數を浮め、西の方より攻來る体をして、糧道を支へなば、荒隈は不戰して一ヶ月の内に糧盡、諸軍勢方々へ離散可申、其時元春、隆景、矢竹に思ふ共不叶して、一先藝州へ被引べき間、和睦之儀今暫く御延引候へかしと異口同音に申ける、義久公兄弟は、最早七年之間、毛利に被圍、諸軍士莫大に命を落し、苦戦すと雖、方に一つも此城持事難叶ければ、一往降參して、又舊交の者を驅催し、時節を待て可切返と宣ふ處に、熊谷新右衛門赤名の伊賀守兄弟、久々賓客として有けるを

伴ひ、彼は陪臣なれ共、古今の治亂を知て利害得失に賢く、勝負の機を能察する者也、彼か異見を聞玉ふべし、迎同道しける故、降參の義如何被思哉と尋れば、勝久聞て、立原、山中殿の軍議至極其儀に當り候様に覺候、併其計畧去年去々年にも被廻候はゞ、軍兵も一万に余り、其謀も成就可申に、今諸士三百人當城に有て、難兵共に漸く貳千に不足、此微勢にては端城々々も漸く攻落し、玉はん事難計、馬潟を關上げ、荒隈、末次を水底にするも叶ひ候まじ、依之假令當城を被明渡候とも、何れ成共國中にて一城を替地に受取、采地何程可被宛行哉の議定を被極たる上、御思慮を可被決事勿論に存候、元就は偽りの謀多き人にて、當分能程に揆揆有之、此城を受取て後は、累年の結恨を可散、迎約束を變じ如何様の難澁かあらん、被欺城を出玉ひては、諸軍士の手前も有り、又御先祖經久公へ御不孝、後世の笑草と成、尼子家の永き御瑕瑾也、替地へ入部有て、御降禮肝要に社存候と申せば、又一座是に同意して立原源太兵衛を以、米原へ斯と申入ける、綱寛則立原を伴ひ、吉川、小早川へ種々申遣しける、此時毛利家にも評議有て、尤成望哉、富田を退出せられ候はゞ、石州、銀山の城に五千貫の地を添可參迎、則月山受取の檢使として、福原、左近、丞、貞、俊、口羽、形部、大夫、道、良に三千餘騎を相添遣す、約束相違有間敷、迎頓て城を明渡し、玉ひける社是非なけれ、經久公山中龜井を

頼み、此城を切返し玉ひしより數十年住馴し富田の郷を打捨敵陣に降り玉ふ事盛者必衰の戒眼前也とぞ、百姓も町人も寺社の輩迄老若男女誘ひて街に出て、御名残を惜み、流す泪は富田川の水も彌増計り、誠に越王勾踐吳に降り、玄宗皇帝の昔をも思ひ合せたり。

兄弟尼子和陸藝州下向 并義士評定離散之事

抑も毛利陸奥守從四位下大江元就公は永正年中、多治比の三百貫の地より發り、今永錄九年迄四十餘年の間、軍務に肺肝を碎き、二六時中に奇謀計畧を工夫し、身心を勞し玉ふ、其武威長防藝石雲伯因作三備州は申すに及ばず、九州四國に至る迄英々たれば、越前に朝倉、近江に淺井、佐々木、尾張に織田、河内に松永、大和に筒井、備前に赤松、浦上、但馬に山名、丹波に赤井、波多野、丹後に石川、攝津に本願寺、紀伊に根來、雜賀を始として、信を通じ其下風に寄らん事を求る故に、中古の大將とぞ唱ける、尼子降参に付、永錄九年七月六日、吉川小早川兩手の兵二千餘騎、道迄出向ひ、一と先藝州へ下り玉へと下知しける、義久公御兄弟宜ふは、先達て議定の通り、一應元就へ遂對面、替地の銀山へ入部申べし、是始よりの約束也、何ぞ今直に藝州へ可下哉と宣へば、武士

其口々に御約束之後は、我々一圓存不申候へ共、元就公所勢先より一往藝州へ御供仕、氣分本腹の後、兎も角も計ひ可玉との下知にて候と、理を不盡に押立れば、是迄附隨ひ奉りし諸士も、是を聞より手を空にして、伊賀守が先言如し、元就が奇謀に被落囚人と成玉ふ、社御運極て盡果たり、然る上は我々も是非御供して大勢の者共は御先途の程を可奉見届、逆色を變じて、怒ける、去共隆景、元春の下知として、大西重兵衛多賀勘兵衛、津森四郎次郎三人の外は、童一人も不相成旨、嚴命也と、大勢藝固に被追立玉へば、無是非各杵築より立別れしが、尙も集り議論して、藝州へ跡より下り、三人の添人共と内通じ、盗出し奉り、直に織田殿か信玄か頼み、兩勢を合せ不日に切返さんものと、異口同音に申合ける人々には、立原源太兵衛久綱、山中鹿之助幸盛、諏訪部藏人、黒田右京亮、秋上三郎左衛門綱平、同伊織介高尾縫殿介、同左馬允河添美作守、同右京亮、同三郎左衛門、同次郎左衛門、黒正勘兵衛久澄、横道兵庫介、同源介高光、同權之丞、古志因幡守、松田兵部少輔、平野嘉兵衛、同源兵衛屋簀右兵衛岸左馬允、津森惣兵衛宇山彌太郎、吉田八郎左衛門、同三郎左衛門、三吉五郎左衛門、同甚九郎、熊野兵庫介、同次郎、岸孫右衛門、月坂助太郎、中井助右衛門、眞木惣右衛門、同甚九郎、目賀田采女佐、同團右衛門、小林甚之丞、疋田右衛門尉、同甚九郎、神西甚之丞、熊谷新右衛門、米原助四郎

目黒助四郎、正覺寺、大塚彌三郎、日野又五郎、田原右兵衛、馬田長左衛門、青砥三郎、大野嘉兵衛、福山次郎、左衛門、同彌次郎、同内藏允、中井與次郎、松井助右衛門、片桐治部允、渡邊内藏介、津桑四郎次郎、池田助兵衛、同縫殿允、松浦治部允、本田平十郎、長谷川小次郎、横山主水正、山崎惣右衛門、寺島兵部之允、眞野甚四郎、江見平内、同九郎太郎、高尾惣五郎、妹尾十兵衛、大塚助五郎、加藤彦四郎、力石兵庫介、野津次郎四郎、福頼四郎右衛門、本田太郎左衛門、宇山右京亮、立原備前守、本田豊前守、同與次郎、大西新四郎、眞木彦右衛門、重藏坊、杯以上八十五人、神水を吞み、石見國にて之に追付奪はん、若藝州へ下り玉はば、直に吉田へ押寄んと、荒に荒てぞ勇みけり、此有様毛利方へ聞へければ、使者として天野紀伊守馳來り、尼子御兄弟の添人餘り少分に候間、今少し被差添候様に、聖護院の道澄御訴訟に付、義久公へは大西の外、宇山右京亮、立原備前守、本田豊前守、同與次郎、大西新四郎、眞木彦右衛門、力石兵庫介、福頼四郎右衛門、本田太郎左衛門、眞野甚四郎、高尾宗五郎、大塚助五郎、正覺寺殿を被相増候、倫久公へは、津森四郎次郎の外、松浦長谷川小次郎、山崎惣右衛門、重藏坊を被相増候、秀久公へは、津森四郎次郎の外、松浦治部丞、松井助右衛門を被相増候、尤宇山、立原、本田の三家には、家僕少々被召連候ても、陪臣の儀不苦之由被仰渡處也、源太兵衛殿は、此度和睦の御使等被致候間、毛利へ

御下り候て、當國に於て一千貫の地を可被宛行旨に候間と高聲に申ければ、立原大に怒り、初御扱には、銀山の城に五千貫の地を可參之由に付て、社拙者も降參の御使は仕候、それを變じて囚人として吉田に押込め玉ふ、是を知るならば、爭か御使は可仕様無之候、賢臣は二君に不仕、何ぞ敵に腰を折んや、連以之外に返答しける、依之紀伊守無詮方、荒隈へ飯りける、搦申合せの通赤穴通り石州へ追懸路次にて奪取んと聞ける、本田立原、山中等改て申けるは、今又大勢を御兄弟へ被附添上は、急難の氣遣もなし、何れも是より中國五畿内に身を墊し、時の變を待、與力徒黨を催し、重て雲州を切返し、其時は御供の人々と内通を究め、御兄弟をも奪可取、元就六十餘才の老病なれば、彼が死命を期すも一畧也、吉川小早川、赤戸は智元就には不當、尤勇なりと雖我々又義を如金石にして向はゞ、勇何ぞ劣んや、司馬仲達は壯年の諸葛亮が死するをさへ待ちしと聞く、連判金石の約を不變後計を可施と言ければ、一味の者共聞之、吳王夫差に降りし越王勾踐、何ぞ陶朱公が計策なからん哉、蜀に囚はれし玄宗皇帝も再び唐朝を輝し玉ふ、近くは我朝元弘の帝、隠州に左遷し玉へ共、名和、楠が如き智臣、今連もなからんやと衆議一同に勇を残し、思々に立別れ、千辛万苦を不屑計畧謀策にて工夫を凝し、已が様々散行ける、中にも源太兵衛は京都へさして登りける、抑

此富田月山の城は、平相國清盛攝州福原に都を移して後、彌平兵衛宗清に命じて、始て繩張して築きし名城也、其後佐々木雲州を領し、同國に部類を所々に地頭として置しに、此月山を本城とす、尼子經久、義勝兄弟、切返して、經久の嫡政久、其嫡晴久、其嫡義久迄、四世にして、今毛利に被攻取、先祖の血脉を斷絶し、玉ふ事は非もなき次第也

尼子義久公妻室爲尼事

義久公は約束之通、石州銀山山吹城へ直に移る事と思召、兄弟北之方并有合一家中の面々迄召連れ、神門郡通り銀山へと志し、出城有ける處に、思の外是非藝州吉田へ一先引取可玉ふと、吉川小早川より大勢警固之武士を遣し、追立ける故杵築にて御夫婦御別あり、北の方は古郷の錦の浦を行過て、積る涙は袖師の浦に止ても止らず、夫の左遷は此世に安藝の國とかや、警固の武士に圍れて、行旅の姿を何國迄も御供と湖水の浪も渚の船も、哀を催す風情也、彼處の山手には彼菅原や、天満神の生有玉と、土師の里花栗梅の來海をも打過て、佐々布の宮は高貞も、尼子の余類餘所ならずと遙に拜し、高瀬城を乍見も、米原が二君に仕へし面憎さ、佛教山を跡になし、馬を早めて行程に、杵築に旅宿し玉へば、是より御夫婦御分れ、北の方の部屋家老、餘江與

十郎長言と言老臣一人同く、彼が妻女、御側放れぬ局女房等三人を添て、此郷に止め奉れば、誠に偕老同穴の御契りも、仇波の可立飯道も絶て、哀れと言も疎也、玄宗皇帝の馬魂が原の御嘆き、漢の武帝の甘泉殿の御恨も、是には不勝とぞ、勞敷義久公御兄弟は、石見湯高角山も過行て、十四日藝州長田の圓妙寺に着玉へば、内藤下野守受取て、二重三重の垣を結び押入奉る、警固稠敷押込み、吉田より桂少輔五郎元春より二の宮全助隆景よりは、宗近加賀守を被附置、都て余人の出入を被制、獄舎の住居に不異、北の方は杵築にて打捨られ玉ひて、後、朝山觀音寺に引籠、御供の女中四人と共に、鬘の黒髪削落し、光明遍照、十方世界、念佛衆生、攝取不捨と受戒して、御名をば宗旭禪尼と號し、六時の勤不怠、餘江も俱に通世して、與十郎入道長言と法名し、阿字十方三世佛、彌字一切諸菩薩、陀字八万諸聖經、皆是阿彌陀佛の飯縁にて、九品の淨刹の臺に登玉ふ、御志高くも又哀れ也、御供の人々も、罪障深き女人ながら、依逆縁穢土を厭離し、種々の十罪五逆も消滅し、先立つ討死の人々迄、自他平等の同向して、即身成佛を得玉へと、水汲み花折りて、給仕隙無く、たはしける、或時北の方、義久公の御事を思召、被出折柄、月清明なるを見玉ひて

見るらんと見るも、先だつ涙にて、慰めかぬる秋の夜の月

此北の方は近江佐々木京極修理太夫の孫君にて、御心はせ優長に、艶敷風雅の道にも携り玉ひけり、扱又鯉江與十郎入道長言も、薪水の苦勞を不厭、觀音寺に仕へけるが、或時住侶長言に向て、宣ひけるは、扱北の方并女中方望に任せ、尼となし奉る、是迄は當寺に育候へ共、當寺は尼にても、忌み申聖刹の宗派に候へば、何方へも御所替ありて、心靜に後世を修行候へかし、外に存寄も無之候へ共、是より南三里計行き、神門と飯石の境に、小體の庵室あり、誠に辻堂同様に候へ共、物靜に候間、此方にしつらへ住玉へかしと宣ひければ、長言入道仰畏入候、我々五人主君を養育仕候儀、尙又當寺よりも被御心附可被下、一ト先彼辻堂へ拙者罷越間所等經營致し、其上尼等を迎ひ可申迎、彼處に尋行、一間の住所を營みて、尼を伴ひ、露命を送りける、斯て雲州泰平の辨と成しかば、富田には天野紀伊守隆重を城番に被据置、元就公、輝元公、小早川を始惣軍勢荒隈を引拂ひ、大社へも參詣有て、藝州吉田へ下向、吉川元春は、尙も國中の掟をなして、六七千騎計にて、暫く雲州に滞在有、其後天正の頃に至り、少輔十郎元秋富田へ被移ければ、天野は熊野城に居住して、國政を助け沙汰しける、

尼子勝久雲州へ攻入 并舊交馳集り所々攻落事

斯て尼子家の浪人共五畿内關東へも落去り、時節を伺ひ居ける處に、永祿十一年の頃、九州大友と元就と牟柁と成、毛利三人の面々并備藝石雲伯の幕下、無殘毛利の軍役に被立けるよし、山中、立原等聞と均しく浮立て、尼子再興の時至れり、旧交を催し、所々に觸廻り、暫時に京都へ集り、軍議可被定と頻りに催しければ、横道兵庫介、同弟權之丞等は、近年松永彈正久秀を頼居けるか、暇を乞取り、ものも不取敢、山中、立原吉田等に對面し、評議して曰く、我々傍輩計にては、軍政難治、新宮の式部太輔三男は、御一族の泯滅の時貳歳にて、乳母人に被抱、富田を落て、備後の徳分寺にて育て上洛、東の東福寺にて僧と成、最早成年も近く生立、勇智最も英でたれば、還俗させ參らせ、大將と奉尊敬は、一味の志も篤く、軍威をも可震と言ければ、皆々一同し、頼て眞木惣右衛門、同與市、吉田八郎左衛門、同三郎左衛門、横道兄弟、牛尾彈正忠、同大炊介三刀屋藏人、遠藤甚九郎、山中、立原相伴ひ、京都へ登り對面し、件の計畧物語ければ、大きに歡玉ふ故、尙も御器量を伺ひ見るに、天性大將の氣備り玉ひ、劍術軍智勇力仁愛誠に、尼子再興の芽顯れたり、古今獨歩の大將を得たりと、喜悅不斜有様は、彼の後漢の光武帝亦眉を誅し、再び漢業を起せし吉例を思ひ、尼子助四郎勝久とぞ奉被名乗けり、夫より處々に塾居せし舊交の者共も、聞連々々馳加りければ、六十三人雜兵共に三百

余人、但馬國に突抜けて、海賊素佐の日本之助が船に取乗り、永録十二年五月、隠州へ渡りければ、隠岐守大に歎び、佐々木尼子は、我氏族也、再興の時至りぬとて、先祖京極藏人より以來持來りの本郷宮田の城に招入、頓て原田の勝山を城に築き、勝久を移し入、六月下旬に先雲州島根郡へ押渉り、忠山に在陣して國中の勢を被招、大庭の大宮司、秋山三郎左衛門、同息伊織介、二百餘騎計にて一散に馳來る、森脇市正、横道源助は勿論、足田右近、同右衛門尉、原田孫六、松田兵部少輔、熊野兵庫介、同次郎、馬田兵庫介、同長左衛門、櫻井與八、朝山六郎、田原右兵衛以上究竟の者共、七百騎にて相加る、大山の教悟院精兵三百騎、中井平藏、同助右衛門、加藤彦四郎、寺下市之丞、進左吉兵衛、高尾右馬允、同宗兵衛、目加田采女佐、同團右衛門、福山次郎左衛門、同孫次郎、長森吉内、日野一族、熊谷新右衛門、池田與三郎、相良助太郎、比田十郎、徳吉孫九郎等も五百騎にて打連々々加りける、五日の内に三千余騎にぞ成にける、隠州勢も三百騎にて海上を送り來る、先多賀美作守が、其頃しも多賀左京亮と改號して、籠居ける新山の城を一戰に攻落し、物始め吉連、末次に砦を構へ、城郭として、楯籠り玉ふ、天野紀伊守が籠り居たる富田の本城をば攻ん、連山佐布部九瀬杯十ヶ所計に向城を築き、其外在々へ手配して、毛利方の端城を落す事八ヶ所なり、此趣因伯へも聞へければ、密々志を通

じ信をなす者多かりし、抑新山城は薩摩守忠度、隠州渡海の砦に、本庄、守山邊を添て清盛より被宛行しによりて、新山の城を築き、隠州の政務を開れし時の古城也、富田と同じ時代に築たりとかや、

秋山伊織介富田敗軍 井山中鹿之助異見之事

富田月山の城には、天野紀伊守隆重在番しけるに、當國の本城なれば、近々是を攻取て、其後國中を可落と評定有けるを聞て、隆重思ふ様は、毛利へ加勢を乞たり共、九州陣に被妨急難の間には、難計所詮、欺て見ん、連頓て秋山伊織介方へ申入けるは、某今纔に三百騎を以銳利なる勝久に對し、合戦仕勝利を可得共、不存候間、本領に五千貫被相加候は、御味方に參り、當城を速に明渡し、其上國中御退治の魁可仕と様々申入ければ、秋山披露して、此儀如何と評議有、山中聞て、天野は毛利無二の忠臣、無二心者故に富田をも預けられたり、然るに一戰にも不及、降參とは難心得、無勢にて籠城、難成、儘降參と偽り、合戦を延引させ、其隙に所々の味方を集め、且は毛利よりの加勢を受ん謀也、何條三百人計の小勢、祖面白けれ、一千餘騎を卒し、秋山殿御討向、隆重が首取て可被差出、追々降參の使者は有れ共、未だ此方より返答せざれば、定て天野油斷

して居候べしと申ければ、秋山聞て天野程の義士降参に偽りは候はじ、併討向へとの御事に候はじ罷向、其虚實を見て彌降参に紛無之候はじ、其時使者を以可申入候間御宥免候へし、迎目真先に立、一千餘騎を引率し月山の麓に至りければ、城内静まり返りて物音もせず、扱は降参に違はあらじと思ふ處に、侍一人櫓より高聲に申けるは、追々降参の後申入候間、定て城受取として御向にて候へし、追付城を明渡し可申無御用捨御勢も直に可被入、委細之儀は城内に於て秋山殿見参の上可申承と寛々優々と申ければ、秋山聞て、去ば社彌誠の降参なり、合戦杯の支度は少も見へず、二三の城戸もク様に打明たり、更ば城に入て降禮を受勝久公へも早討を以可申上と無端油断して、七曲の道を城戸際迄上けれ共、太刀の鞘をも不外鐵砲の火繩に火も不渡靜に社寄たりけれ、天野は兼て謀りし事なれば、二の木戸と三の木戸との間に二百人餘伏勢を置、甲の丸には三百人鐵砲の筒口を揃へ、箭先を并て待ける處に、一千餘騎何心なく上りければ、俄に関を上げ弓鐵砲を放つ事、霰の飛がごとく、一千餘騎の者共大に周章拔合せんとする者もなく、我逸足に逃下りける間、猶も逆矢に射懸打懸切捲りければ、僅一時計の戦に、手負死人過半也、秋上は途方を忘れながら支へ拒て命を不惜切廻はりけれども、不意を被討て無詮方諸軍勢上連に引下りけれ

ば、猶も裏切の者貳百人横様に打て懸り縦横無盡に突捲りければ、岸與九郎、相良新三郎、三刀屋惣五郎、堀九八郎、三浦惣八以下の究竟の者十六人被討けり、岸左馬進、相良孫六、進惣兵衛、宇山久太郎、牛尾作兵衛、松阿彌、徳阿彌を始め、五十七人は深手を負て漸末次に社引にける、山中申けるは、此度何れも千死一生の戦をはし玉へ共、不多味方の勇士十六人迄失ひし事偏へに秋山殿の油断より事起りたり、惣て泰平の時に、だにも武士は一刀は不離は何事ぞや、油断の後れを取間敷爲也、況や既に敵陣に向ひ、甲冑を帶し出陣せし折柄、警降参と申せは、迎心に油断は成難し、我此節米原を押へに出る故、僅五百騎計の天野に討洩されは、武威を失ひし事の是非なきよ、以來は軍事に怠り玉ふべからずと教訓しける、然共當城の小城を落す事十六ヶ所、軍卒も最早六千に餘りたれば、近國に威を震ひ、勿論京都に有し時、大友へ神文を以堅く手合の約を申遣し、又備前美作の舊交へも連に申合せり、尤九州へは眞木宗右衛門を密に龍道寺へ下し、毛利を東西より挟み可攻盟を成ける處に、宗右衛門石見灘にて暴風に船を被覆溺死しければ、重て吉田三郎左衛門を作州へ遣して、味方を催しける、依之三浦、齋藤、葦田、玉串、宇喜多、直家、并赤松、浪人共伯州へ切入つて、岩倉城を攻落しければ、泉山の行松、左吉兵衛、正成も不及力降幡を立てり、作州勢集りて、高田の城

を日夜攻ける故香川美作守光景長の左門大夫泰道等拒み戦ひければ、迫合無隙處々石見には福屋次郎少輔隆包本領を切返さんと働けり。

所々尼子方發起 并富田合戦之事

國々の味方より九州藝州へ早討を以急を告る事晝夜也、先米原平内兵衛、立花の陣所に有けるを呼返し、高瀬城を堅固に可守と下知被仕けるに、忽尼子に降禮しければ、又石見へも森脇市左衛門、雲州へは日野孫左衛門、三刀屋彈正左衛門、檜崎彈正忠を被差上、伯州へは南條伯耆守、山田出雲守等來て、合戦日夜止時なし、小笠原長雄も石州へ歸りければ、所々に迫合の無之所もなく、中にも七月十七日、山中立原大將として、一千餘騎富田へ押寄せ、淨安寺に陣取て、伏兵を以城兵を呼引出し、散々に合戦す、元來城兵は五百騎、寄手は、一千餘騎、捫立られ手負死人を踏み越て、天野を始城に引直るに附入れよと言處に、軍歸來り告けるは、毛利方より、小田助右衛門を軍將として佐東佐西の者共、大勢石見路を経て川本邊迄切入候處、池田、服部、川村、岩崎、矢野、高橋、栗栖等馳加り、吉田孫左衛門は銀山城を追立られ、合戦事急に候間、取別早速加勢せられ候へかしと申ける、近頃吉田父子は味方に志ける處、猛勢に取込られ難義

に付、難見捨逆倡や此處を引拂ひ、末次に歸り、吉田を救ふ謀を可廻逆引立けるに、城内より神代大炊介七、八十人計跡を追ひ、逆る敵を打留よと下知しけるに、牛尾彈正忠後殿して、散々に追散らし、岩崎迄引ければ、神代も小勢なれば、追事不叶、城中へ引にける、抑此神代大炊介は元は大友宗麟の侍たりしが、聊の事にや被追出、毛利方へ身を寄せけるに依り天野に添て富田に被籠置たり。

小田助右衛門雲石の味方爲加勢被登 并討死之事

吉田孫左衛門は銀山城に居て尼子方へ心を通じけるに、仍て彼を討たせじと、神門と飯石の境へ、山中鹿之助、立原源兵衛、横道源助、同權之丞等二千餘騎にて進みければ、隱州の隱岐守爲清も、七百餘騎にて馳参り、二陣に備へ、米原平内兵衛五百騎にて高瀬の城を出、勝敗を見て後に、敵と成共味方と成共可附逆、遠陣を取て伺居ける處に、池田、服部等先陣に備へ、坂出羽が手の者二陣に備へ、小田は七百騎計にて三隊に備たり、先陣箭合して頓て拔逆て切て蒐れば、山中立原真先に立て右往左往に難立れば、一陣二陣も皆大崩に成りて、死人手負其數不知、散々敗走す、小田は名を得し勇功の者なれば、先手の逆るも不構、七百餘騎を前後右左に備て、ごつとためいて入代

り、暫く揉合手詰の合戦三度迄しける處に、隱岐守も七百餘騎にて横槍を入、餘すな
洩すなど扣立突て廻りければ、山中、立原、横道兄弟、正面を薙立、追捲り、勇を振て戦ふ
を見て、扱は、尼子方勝色成、沖、米原、平内兵衛も打て懸り、拵合ける故、流石の小田も戦
疲れ、味方を見れば、只六七騎手許に添て居けるに、其身も六箭を負たれば、目暗み、惣
身疲て立たる處を、横道權之丞得たりや賢しと、飛懸て終に、突伏首を取出、羽元資は
手勢三百騎計にて、赤穴へ落て、右京亮留主居の者を頼み、一手に成て、毛利より来る
加勢を待居たり、依之、尼子再興之時至りぬと、自他國共に信を通じ、其威、青雲九天に
登る勢也。

隱岐守爲清反心三穗關合戦 井山中諫言之事

隱岐守爲清は、尼子の氏族として、是迄無二之味方にて、此度も横矢を入、無比類軍功
有しか、聊、尼子に恨有けん、忽變心して三保關に控へ、富田の天野と心を合せ、近在を
放火して、民屋を騷動しける事不少、山中聞て、憎き爲清が所行、哉、同姓を背て、異姓を
助る無道者、定て我々陸より急に寄るべしと思ひ、船手は、油斷有べし、海上より不意
に夜討を懸け、爲清が首を、佐々木の祖靈へ手向よ、逆船用意して、小船十艘計有けれ

ば、大勢不被進、山中、立原、遠藤甚九郎、正田、右衛門尉等二百五十人、壹番に船を漕着、敵
陣へ押寄、又足輕百四五十人は、海岸を通り、民家に遣し、所々に火を掲、関を作らせけ
れば、爲清も支度相違して、山中が計りし如く、陸地の伏兵に、逆、眞野が嶽、聖返し邊へ
三百人遣し置ける故、本陣には、僅に四百騎計有けるに、隱岐兵部少輔、中畑、藤左衛門
同忠兵衛、眞野三郎左衛門、田平市之丞等、吐と突て出ければ、切れ共、不疹不去、命は今
宵の名残ぞや、名は後代に止やと、聲々に、勸合ひ、十騎が一騎に成迄も、戦ける有様、目
醒しかりし亂戦也、斯て敵方にも、死人手負數不知中にも、原田權六勇を、振ひ戦て、大
勢を討取、其身も胸板の外れを、被突て死ける、山中、立原も少し虎口を引退き、三保明
神の社へ入一息繼し處に、尙も敵追懸來り、中畑、藤左衛門、鹿之助と、渡り合けるに、山
中大太刀を手繁く討ければ、階の石に打附、太刀二ツに打折ける故、脇指を、抜んとす
る處を、中畑忠兵衛、太身の鎧にて突て來る、打物は折れ、無詮、方後の山へ、逃入ければ
立原も、戦勢れ、一所に、隠れ居ける處に、横道兄弟、松田兵部少輔、植木美作守、同、源三兵
衛等、後馳に、百五六十人來て、山中等が合戦の様子を聞き、扱は、本陣へ、可、向、逆、関を吐
と上れば、折節、陣内には、五十人計、殘居て、寺本、安藝守一族、三千人計、引連て、打て懸る
處に、始め、山手へ、伏兵に、遣し置たる、味方の勢、三百人之者、其、尼子勢は、海上より來る

と聞て取て歸したりと心得、大に碎易しけるを見て、横道松田植木等陣内へ切入、敵を討事數不知、殘黨原船に乗んとする處に、小船に大勢乗て既に船覆んとする故に先に乘たる者共は鎗長刀にて打拂ひ切拂しければ、敵には不討味方に切れしもの六十餘人計とかや、隱岐守は辛き命を助りて本國へ歸りける、山手へ向置たる者共合戦には不出合、味方は敗軍し、大將は沖を遙に漕ぎ逃ければ、途方に暮て居たる處を、山中立原走り廻り、四百餘人生捕て、一命は助け大根島へぞ流置く、勝久公横道松田植木が今度の働を大に感稱有て加祿を玉り、其外今度の勲賞に預者大勢也と雖、感狀をば不被出、山中立原申様、此度彼人に加勢無候ては、我々迄も一命は捨可申處、日頃の勇者等手詰の御働被致候故、負軍を勝、我々も一命無恙事を得候、然るに御感狀不被出段は、我々兩人へ對し定めて面ぶせしく可存と被思召ての御用捨と社奉存、大將は賞罰明ならざれば、忠臣不出、某等此度危き戰致候ても恥共不存、眼前大功有る人々を差置候ては、政道依怙有之候間、早々感狀可被遣と諫めければ、勝久公いと喜悅あり、誠に汝等貳人は吾が股肱の賢臣也、人の功は妬む習なるに、傍輩の軍忠を揚て諫言する事、古今珍敷人傑也、迎頓て植木松田横道等に御感狀をぞ玉はりける、扱、隱岐守は四百餘人の一命を助玉ひなは、某儀は切腹可申と、度々願被申に

付、則大根島の流人共、一命を助り、隱州へ被送ければ、爲清は切腹せられけり、中畑忠兵衛は稀代の勇者なり、迎、山中是を助て隱州へ返しける、斯て隱岐は三郎五郎にぞ被宛行ける、抑爲清數代尼子の旗下にて誠に氏族と言ひ親も他に異にして、恩顧の身なるに、如何なる遺恨有て敵方へ返忠を思ひ立れけるや、是も尼子氏族の斷絶すべき前表かと、諸人不思議に思けり、

雲陽軍實記 卷之五

神西三郎左衛門再尼子方一味之事

神西三郎左衛門は先年富田籠城の砌、七年以後は元就公に属し忠勤を抽ける故、二心なき者連伯州末石に被置、中原善左衛門、小寺佐渡守を相添被守ける處、勝久雲州へ切入玉ひ武威再熾盛なる故、神西も味方に戻度被思けれ共、今は毛利無二の忠臣と成ければ、卒爾には言入難く、山中立原共へ評議有けるに、山中謀を工夫して、禪僧一人呼出し、駈々申聞せ、末石へ遣しければ、彼僧神西へ對し四方山の物語の序に、山中鹿之助殿は今敵味方と隔り被居候ても、明暮神西殿の御事なづかしく慕ひ玉ひ舊交難忘、我々にも兼て御物語御親切に候間、罷歸り無恙御渡候趣をも語り可申候何成共是に御手跡を留被下、持歸り山中殿に見せ申さは、嘸や床しく思ひ玉ふべしと、扇子一本差出し、神西も日頃朋友の情不淺間なれば、否にも不及下地拔群之能書にては有彼扇を取りてふるから小野の元柏と計書て渡し、能々傳言可給連、奥々申含ければ、彼僧直に歸り山中立原に是を見せ、巨細に末石の有様を物語ければ、山中扇を能々見て、扱は神西も其身は毛利に有ながら、志は尼子を不忘と見たり、古歌

に石の上ふるから小野の本柏元の心はわすれなくにと言心を込めて書たり更に彼僧を再遣し何卒尼子を助玉へと熟々申遣しければ子細に不及一味の約束せられけり然共中原善左衛門小賢き兵なれば討て捨てんは我が二心の隙とならん小寺佐渡守は幸此節爲軍議藝州へ遣したれば中原一人は討安し逆謀を廻らし討手の者を定め基會を催し林阿彌と言大力量の者を基の相手にして都て基の詞を盡して助言し切と言はゞ其時可切若切損じたらは林阿彌組留よと議定して或日圍基をぞ催しける神西と討手とは見物に助言數々有て後そこを切と言ければ討手の者拔打に丁と切れば中原早業の達人なれば心得たりと基筒に受一尺八寸の脇指を抜合討手の眉間を切附る二之太刀にては林阿彌を切て落せば神西不遜中原が弓手を切落し即座に首を振落し念頃に葬り供養し夫より神西は勝久公と共に味方にぞ歸ける

日登合戦 井市川三刀屋勢後卷之事

三澤三郎左衛門は九州立花の陣に有けるが其留主に山中立原等勝久公を守立雲州を切返んと企けるに依て三澤が家子共評議して仁多郡の内へ敵をは不入連向

城を守り山佐邊へも一手の軍卒出張す又大原郡日登へも出張す頃は永録十二年十二月の事なれば深雪道を塞ぎ馬蹄不叶時節なれば急には敵寄間敷と乍思吹野郷の峠に陣小屋を掛大川を前に當寒風を凌居ける處に山中鹿之助立原源太兵衛横道源介同權之丞等貳千餘騎にて川に添て攻上りける處に市川少輔經吉の手の者少々又三刀屋が留主居の者馳集りて一手となり挟みて鐵砲ふすまを造て道を追て熊谷迄追附たり日登の者共大きに力を得雪を踏立五百餘人防戦けるに尼子勢猛く勇といへ共不意に跡を被塞殊に長途に手足凍へ働自由ならず即時に貳十七人ぞ被討ける山中立原大きに怒り是式の小勢に負る事やある一面に切上れど各眞先に立て切て懸りければ三澤勢に三澤次郎左衛門同甚吉宇山久太夫等迎合揉合戦ける處に又吉野次郎兵衛野尻大學瀧野源介等も此節三澤を頼居ける故一手と成て加勢し面も不振防戦す山中軍慮賢き者なれば四百餘騎計東日登へ廻し郷峠の陣屋を焼立ければ三澤勢大に動亂し吹野の出張も難堪見ければ山中立原下知して射れ共少も不疼附入々々突伏よと鼓を打攻鐘をならし追立れば三澤次郎左衛門同甚吉宇山久太夫野尻大學等を始難兵共に九十三人被討ける尼子方も數百人深手を負ひ殊に川向には三刀屋市川が家子共矢尻を搦待懸居ける先

此度之合戦は敵の引を幸にして味方も引入べしと重て雪の晴間に社可寄連川向の敵には手も不出靜に引入ければ市川三刀屋の者共も不取合を勝にして引敵を見送りて引にけり吹野の者共も此處の小屋を焼けるを幸に少も跡を不追相引に社成にけり

毛利方大勢攻上り多久和城明渡并布部大合戦之事

明れは元龜元年正月勝久退治可有連立花の陣より元就は藝州吉田へ凱陣あり嫡孫右馬頭輝元吉川駿河守元春嫡子治部少輔元長三男又次郎經信小早川左衛門尉隆景を雲州へ被差上正月十六日吉田を立て二月八日に輝元隆景は石見國津賀郡に附玉へは元春父子三人は先鋒として赤穴衣掛山の城に入玉ふ爰に雲石の勢を待擲既に三万五千餘騎と成豊前國大友宗麟を押への爲め宗像高橋等に防長の勢を添て殘し置武田高信押さへには南條小鴨等に山田福田等を加へ伯州に出居ける備中邊には三村元親を先として各守城に宇喜多直家を押たり爰に多久和に尼子方より小屋城を築き秋山伊織助福山次郎左衛門遠藤甚九郎川副右馬介を大將として五百騎計出張せし處に毛利勢如雲霞津賀赤穴を立抽來掛合より押寄ると

聞我々纔五百騎にて毛利の二万騎と合戦す其の中々可勝謂なしいさや爰を捨て山中立原等と一手に成防戦すべしと言は諸軍勢一統に不叶敵に立合死ぬる計が忠義にてもなし命を全して君の御用に立社誠の勇士忠義なり敵の來銳を避て引共耻辱とは中間敷連頼て砦の小屋々々を自焼して引ける處に九日の朝より元春先陣に進み赤穴右京亮を案内として福原等諸共に多久和へ押寄見玉へば城は雲一片に焼上り軍士は一人も見扱は沒落しけるか跡を追詰分捕せよと追懸行熊谷日登にて追付戦ふも有返り合て討死するも有都合百七十七人被討けり吉田勢も村上又左衛門を始難兵共に廿三人討死す此時往還に高札を建て狂歌有り

城を明落葉の頃は道理なりいかに伊織を春焼にする

と言ひければ伊織介面白なくぞ思ひけり勝久公は諸將を末次へ集め合戦の計畧を尋玉へば山中立原等申けるは先此末次は君の本城として大勢被籠様に見せ某等一千騎計にて布部山に出富田入口の兵糧を支る様に見せ近郷の味方を招き彼所にて一合戦可仕毛利方に此勢疑勢也謀にや落されんと戦を謹み卒爾に大合戦は候まじ其内御味方も追々懸付可中間人數増は元春と花々敷合戦を可仕と申ければ何も其理に伏し打立けり守山より伊織介七百騎にて一番に馳着けるが先多

久和を自焼せし恥辱を雪んと一際勇で進みける、三笠城より牛尾彈正忠五百騎にて馳付熊野兵庫介四百騎高瀬城より米原平内兵衛七百騎宇波より真木與惣右衛門同與市五十騎山佐吉田八郎左衛門兄弟三百騎其外疋田中井遠藤福山隱岐三郎五郎淀井末石稻石の城により貳百騎三百騎五十騎七十騎打群々馳加り其勢六千七百騎とぞ聞ける、布部の城には森脇市正三百騎にて籠り居けるを鹿之助招寄合戦は明日にて候へし軍機手配は如何と問ければ市正答て先水谷と中山と兩口に手分して戦候は必定味方勝可申何れも險阻にして味方山の上により谷は一騎合の難所なり敵利不尽に攻上りなば大木大石を倒懸防可申と言ければ山中も同意しけり、水谷口には山中鹿之助幸盛立原源太兵衛久綱真木與三右衛門同與市中井平藏米原平内兵衛森脇市正隱岐三郎五郎加藤彦四郎神西三郎左衛門寺本市之允進左吉兵衛力石九郎兵衛馬田平左衛門高尾右馬允同惣兵衛目賀田團右衛門同采女佐池田與三郎相良助九郎比田十郎太郎德吉孫九郎真野黒正屋葺以下四千騎也、東口には牛尾彈正忠秋山伊織介岸左馬進同孫右衛門羽倉孫兵衛平野嘉兵衛横道兵庫介同源介同權之丞遠藤甚九郎疋田右近同右衛門尉松田兵部大輔熊谷兵庫介同治郎古志新十郎福山次郎左衛門吉田三郎左衛門同八郎左衛門長森吉内馬

田入道淺山太郎次郎日野介六牛尾大炊之助足立治郎左衛門目黒熊谷原吉岡以下貳千八百餘騎皆明日を最後の合戦と思ひ定め敵何百万騎也共我魁として取控がんと勢也、藝州勢は仁多郡鴨倉山に三澤加郎等布廣が居ける故此處へ陣替して十二日比田に着玉へば三刀屋赤穴三澤杉浦八重田等元春に向申けるは明日の先鋒は我々に玉はり候へかし案内と申して手痛く當て見度候と申ければ元春聞て尤の望事に候へども是迄度々の合戦に元春隆景兩人替るゝ先鋒致し此度は輝元一分之大將として御出陣有之候へば猶以吉例に任せ我々先鋒可仕候三澤三刀屋二陣に横矢を被入候へば赤穴穴道は彼谷より不意に起り益田佐波は山陰より時を見計ひ打出可被申進翌十四日水谷口には吉川小早川兩勢三千五百騎二隊は杉原盛重三隊は穴戸隆家熊谷信直天野隆方益田藤包也東口は吉田勢福原桂志道兒玉赤川栗屋口羽以下三千餘騎其次は小笠原平賀猶崎木梨以下一勢々々攻寄る惣大將輝元公は旗本勢を以後陣に三千七百餘騎を備へ兵鼓を打て攻上る中にも多土右衛門尉栗屋又左衛門真先懸て進みければ横道源助同權之丞渡合火花を散し鎗の柄も折るゝ計に戦ければ多土右衛門尉權之丞に被突伏て討死す源介は栗屋と戦けるが頓て組合て捻合けるに栗屋組被敷て首を源介に被取り源介が郎等長

澤重兵衛打物の達人にて、粟屋が郎等一人討取、一人は深手を負はせ追詰けるに、跡をも不見して後陣に入、扱水谷口には熊谷信直が家子細廻右京亮直勝壹番に鎧を入れれば、尼子方の者共大勢に手を負ける處、森脇市正數本の鎧ふすまを造て終に突伏たり、惣て市正千五百騎にて戦へば、惣軍受口々々を以亂戦目を驚かし、曳々聲は大山も崩るゝ計討合太刀の音は金輪際迄も響くらんと夥し、頓て森脇鐵砲貳百挺を逆矢に入替へ、打せければ、毛利勢楯の影にひるむ所を千五百騎切て下り、猛威を振ふ事獅子の忿怒の如くなる故終に突立られ、麓をさして引ければ、吉川小早川後陣より揉合繰返し、死人手負を踏附踏越支ければ、峯々谷々の廻し勢、時分の好きぞと打て出四方八面に追取急攻上りけるゆへ、森脇米原二度目の戦に打破られ、引色に見へければ、山中立原入替て防戦す、東口にも初に敗走せし者共取て返し、諸方相圖を待て一同に懸合せ、揉立てる故、牛尾彈正忠、横道遠藤等も二度目の軍に被突立、石塚與市被討けり、敵味方の精兵共入亂れ、尼子毛利國爭も今日を限りと戦たり、隱岐三良五郎も討死しければ、郎等寺本次郎三郎、東藤八等を始五人迄ぞ一所に自害す、横道兵庫介も深手負て道の傍に休居ける、彼が姪、中井善左衛門連、十日以前に毛利家へ降人に出けるが馳來る故、横道是を見て、如何に中井殿深手負候と言

へば、返答もせず鎧取延て、突伏首をぞ討取り、敵も味方も是を見て、横道は姪、智と思ひ、親さに油斷して不仁無道の中井に被討たり、是を社人面獸心の善左衛門と言へきぞと憎まぬ者社なかりけり、扱眞木與市が首をば江田七郎左衛門討取、目黒左近は自首、掻切て失にけり、牛尾彈正忠は家子金尾半四郎、飛石孫太夫、油里甚七等返り合追懸くる敵を防ぐ内、牛尾之城へ逃返る、都て熊野迄の道中に、尼子方之人々貳百八十五人討死す、手負は數不知、毛利方にも多土右衛門尉、粟屋又左衛門、兒玉彌七、細廻右京亮を始百十二人討死す、手負數百人とぞ聞へける、山中立原は所々に踏止まり、後殿し、敗軍を集め、末次へ社返りけり、毛利勢も十五日に富田城に入にけり、斯て末次には白濁表に扉を構へ、柵を結廻し、橋を引き今やと待ける處に、廿四日に元春父子七千五百騎に乃木古志原清水、津田邊に無透間陣取けるに、湖上大河の橋を引船も不殘、末次へ乗取りければ、卒爾難涉見へければ、元春は面して三千騎を陣々に分散して、其夜に大篝を數ヶ所に焼捨て、籠りたる牀にし、頓て精兵四千五百騎を引て、野白藤名湯濱に出て見れ共、是迄も船は末次へ被取たり、夫より來海穴道に出ければ、爰彼所より渡海十艘計、尋出し、密に乗て佐陀の江に涉り、荒隈の古陣所へ廻り、比津原法吉生駒坂本邊の民家を放火して、関を吐と揚ければ、末次籠城の人

々支度相違して、後の方よりひしめけば勝久公も此平城にて躬兵を以大敵を受ける事無覺束を、ろに長詮議して敵に道を取切られ、先途を失んより、いさや新山へ引て可楯籠と宣へば、諸大將も尤迎靜に落玉ふ。

三笠城合戦 并放火落城牛尾彈正忠戰死事

牛尾高平城主豊前守は、作州升形城番として去年被差上妻子并幼稚の養子大藏左衛門留主居して有けるに、牛尾彈正忠其虛に乗じて山中鹿之助が加勢を受、元龜元年三月上旬に押寄攻動す、彼妻女は武田刑部少輔信實が妹にて男勝の強勇劍術者にて、今巴と異名せし程の女なれば、終に攻落す事不能、頓て三笠城を取立修補して楯籠り、透間を伺ひ攻取んとす、元春の家臣今田中務少輔經忠、香川兵部大夫春綱、三百人計にて四月十六日三笠城へ押寄る、中にも小阪越中守、黒杭惣左衛門、足立彦左衛門、岡又十郎等、曳々聲に攻登ければ、城中より大木大石をまくり落し、無透間礮に打ければ、香川か郎等、鐵櫃彌三郎礮に當り死けり、香川小阪、黒杭等も石に當り大木にをされ生氣を失ひ、九死一生に成ければ、元春聞玉ひ、拔懸は兼て堅く制し置しに軍令を背き、味方を損ひし事、言語同斷也、迎以之外、怒玉ふ、然る處に彈正忠が弟隣西

堂降參を取持ちけるに付て、元春領掌し玉ふ處に思も寄らず、城の小屋二三軒俄に燃出陣所々々に火附ければ、毛利方の諸軍勢は是を見て城中には自燒するぞ、攻上りて分捕せよと言儘に我先にと攻上る、城中には思ひ儲ぬ火災なれば、周章ふためき防ぎ戰ふ者も稀なれば、此虛に乗じて漏すな餘すなと捲立攻上りければ、彈正兄弟隣西堂家臣恩田與市、左衛門飛石、惣兵衛、岩田等、煙の中を控立、最後の軍と切結ぶと雖然も虛に乗じたる大勢を防ぐ事なれば、終に恩田は内藤河内守に被討、長澤石見守は香川に被討ければ、彈正忠甚次郎、今は是迄なりと妻女并拾歳になる女子を連煙の中に飛入て一所に燒死てぞ失にけり、其後牛尾豊後守を作州より呼下し、三笠城へ入置ぬ、扱又十日に諸大將諸共、戸倉へ陣替ある。

熊野城高佐城明渡并平田手崎城軍高瀬城兵糧之事

熊谷兵庫介は、先年富田城没落之時、毛利家へ被降けれど、勝久國入之頃、舊交難忘、再尼子方に立歸りけるに、井上肥前守は熊野と斷絃の交なる故、頻に毛利家へ降參を進めければ、無據兵庫介熊野城を明渡し、又降人とぞ成にけり、大西高佐城をば可被攻迎、六千餘騎にて被押寄と聞ければ、孤城堪難く思ひ城を明て、是も高瀬の城へ蒼

けり、元春は夫より齋巢を本城に被召、平田手崎城を修補して、牛尾大藏左衛門に岡又十郎を添て被差籠、七月上旬に狼が森に陣を被取けるに、米原與市兵衛、同四郎兵衛等討て出、箭軍しけるが、其後兩人之者其平田手崎の城を攻ん、連、せり合度々に及けるに、加藤彦四郎、福山次郎左衛門、岸左馬進、力石九郎、目加田采女以下一千餘騎、勝久公より指向玉へば、晝夜攻動しけるに、杉原播磨守加勢に來り命を不惜戰ける故、尼子方も存念を不遂引入けり、然ば佐陀に程近き勝間城には志道左馬介、中村内藏大夫を毛利より被置けるを攻ん、連、三刀屋藏人に八百餘騎を添て被向、合戰手繁く敵味方共に亡命を不顧切戰けるに、三刀屋藏人運の極にや、鐵砲に脇腹を討抜かれ失せにければ、勝久公無念之憤無止時、追々軍兵を差向、勝間を攻落さんとし玉ふ由開へければ、元春より森脇若狹守、益田越中守五百餘騎を添て加勢被致ける處に、途中にて森脇市正、平野嘉兵衛、真木與三右衛門等に出合、追つ返しつ戰けり、然るに毛利勢は過半は手負死人は又二三十人出来ければ、不叶して引退くを跡より附入追討にしける故、追々齋が巢へぞ入にけり、此節高瀬城に兵糧乏敷、新山へ追々申遣しければ、兵糧船拾艘計に目加田團右衛門、同采女介、高尾右衛門尉等警固して、湖上を漕渡りけるに、吉川式部少輔岡德左衛門等懸向奪取んと散々水戰しけれ共、船軍に

馴たる高瀬勢なれば、終に目加多高尾等打勝て、兵糧を不殘高瀬へ引入て警固の勇士は又新山の城へぞ歸りける、

元就公所勞に依て諸軍勢藝州下向并所々尼子方落城之事

毛利元就公老病、逐日衰窮し玉へば、元春の陣中へ注進日夜なり、飯食退廢し、服藥だに難叶ければ、醫療の術絶たり、御存命の内に家法軍議をも傳授あるべし、連、輝元公隆景、元長同道にて、元龜元年八月二十一日に、雲州林木嶋、巢城發馬有、杵築に一宿有、尙元就公の御存命の祈願を籠め、國造千家北島へ祈禱料如山被差出、又密に兩國造へ宣ふは、古志因幡守前古志の栗栖山の城に籠置候、何卒以扱味方に降參仕様に御取扱可有と、吳々頼被置藝州差て開陣有、雲州には元春壹人殘居て、軍兵六千餘騎を指揮し、所々の敵城を被攻ける處に、兩國造の扱にて古志も一番に降幡を被立ける爰に、羽倉城には長屋小次郎を被籠置しに、是を追落さん、連、山中鹿之助、横道兄弟を伴ひ、押寄放火して攻上りける、既に落城しぬと見ゆる處、益田越中守、三澤爲清、三刀屋諏訪部等貳千餘騎にて東西より横鎗を入、鶴翼に懸れば、山中も魚鱗に備へ、中を突切、左右を當り一死賊と成て戰ける故、井上源左衛門、中島善左衛門等深手負け

れば吉川方引色に見ゆる處を、城中より長屋小次郎一度に突て下り四方八面に引包控立ければ、植田與三右衛門、川村善六被討難叶見へければ、東之方を切抜て新山へ引入ける。然るに元就公所勢に依り諸軍勢大半藝州へ下り、國中に残り留る毛利方以外微少也と聞ければ、此處に乘じて小城共を押潰し可申と觸廻し玉へば、秋山三郎左衛門は病氣と號して子息伊織介に四百餘騎附て馳加る。米原平内兵衛、本寺安藝守、福山次郎左衛門、同孫次郎、神西三郎左衛門、加藤彦四郎、大山教悟院杯も馳來し、都合其勢四千餘騎、同十月五日末次の土肥を討動す。此由富田へ聞ければ、元春も二千餘騎にて出馬あり、杉原南條三刀屋三澤益田等馳着五千餘騎となる。元春軍配して此末次を救んは是程迄大勢は無益也。南條宗勝、山田重直は貳千餘騎を引卒して新山へ攻懸り、勝久山中立原等を不洩様に圍み、末次の寄手追拂候て我々も後より可向逆勢を二手に分ければ、此時鹿之助打て出んと言ければ、立原押へて斯程大勢の銳氣充滿の所へ、我々打て出たり共、平場の戰可勝事無覺束、暫城門堅閉て何度呼引共不構敵の機をつからし陣中の變を見て、四方より打出るか、又は夜討に可懸か、何の方便もなく小勢にて大勢には難向と頻に制しければ、山中も是軍法の至要也。連夜番日廻不怠慢守り一圖に戰を不好。末次には川口刑部久氏、小嶋四郎

次郎等籠鳥の思ひをなしけるに、新山へも討手向たりと聞て、寄手の者共靜に備引退ければ、城中大に悦居ける處に、折節元春風邪にて陣中へも出玉はず、軍將なれば一と先引て高瀬城を攻落し、又神西をも可被攻やと評議區々なる處に、米原平内兵衛如何思ひけん城を明捨其身は新山へ入、神西は落て因州へ行ける。故勝久公の軍中大に力を失ひ頓て鹿之助七百騎にて入替りける。依之末石稻石之城にも暫軍はなかりける。

平賀嘉兵衛伯州尾高合戰 并討死之事

去永正七年九月、藝州鉦山合戰に、一番鎗を入無比類手柄を中國に顯し、其後作州小田草にて潔く自害せし平野又右衛門久利が嫡子、平野嘉兵衛久基、迎尼子無二之忠臣、勇猛は父にも不劣、武功之達人有然るに、勝久公雲州再興の後、毛利勢再來て國中を切返し、所々の端城或は攻落され又は降參して敵の手に屬しける。故勝久公初一味の諸軍勢力を落し機を屈せしかば、嘉兵衛情思様如只今にては、纔の味方も追々落失なば勝久公單身にては合戰も成まじ、我手勢を以目覺敷一合戰し、一城も二城も切取て味方の勇氣を上げまさんと、元龜三年末三月七日、纔の三百騎の手勢を以

船に打乗り、伯州尾高の淨満原へ夜討にぞ懸りけり折節一投原出て防戦すと言共平野勇立たる事なれば難立々々切散し、尾高城を見渡して働けるに、杉原盛重一千餘騎にて迎合せ互に勇名を被知たる同士なれば、名を惜み面を耻て戦けるに、杉原が若黨共即時に三人迄討死す、雜兵大勢半死半生に手負勢たり、又嘉兵衛も百騎計に討なされ、其身も鎧疵三ヶ所手負勢たれば、大石に腰を打懸一息繼て居ける處に、杉原が家子進孫次郎安季、早業は如飛鳥劍術の達人あり、又谷本勘解由忠方、勇者貳人連嘉兵衛を見掛、今日の大将ぞと突て懸る、元來死物狂の嘉兵衛なれば、頓て永正の與三右衛門祐定が打たる切れ物と、築紫信國が太刀兩刀を振廻し、貳人を相手に切結ぶ有様、修羅天魔の荒軍受つ開つ、薙つ潜つ踏込々々切付る、谷本鎧の柄中より切折れ疼む所を附入けるに、孫次郎不透一鎧を脇坪へ入けるに、ぞ目もくらみ流石の平野弱て倒るゝ處を、谷本飛懸て首を掻取る、嘉兵衛が勢七十余人被討ければ、盛重方にも九十余人討死す、可惜平野尼子方に無比類大剛武勇の忠臣、一日の合戦に亡し社無慚なりと、譽を楮上に殘しけり、

山中鹿之助尾高合戦 并馬田慶篤討死之事

山中立原は平野が尾高に被討し由聞惜む事無限、いで彼が吊軍して修羅の本意を遂せんと、横道兄弟馬田入道慶篤、森脇等取集、千五百余騎、尾高に向ひ関を揚や否、捫立攻寄ける、其鋒先の鋭き事大潮の打來るに似たれば、流石の杉原も戦屈し、家の子前原所原福田等も、蒙疵被追立、颯と引ける處に、菖蒲左馬允重政、伏勢三百騎計、立軍鼓を打て救來れば、山中勢正面の敵をば打捨て、重政に向合、八方無盡に戦ける、盛重も是に力を得、小竹簾の影より指詰引射る矢は、電の飛ぶがごとし、馬田入道は八方の敵を追捲り、靜に味方の勢へ引入んとする處に、高橋右馬允資、高樫の木刀を打振り、馬田を支へ、千變萬化に秘術を盡し、揉合ける、是を見て、檀上盛物、重行掛合、左右より討て掛れば、頓て馬田慶篤、高橋を取て押へけるに、其透間を見て、檀上馬田が高股に一鎧しかゝゝと入ければ、大力の馬田も少し弱りける處を下より、高橋は剣返しける隙に、首は檀上取たりけり、高橋は太刀鎧甲等を剝取て歸る、是を見て、味方の兵さては、尾高方勝軍也、連入江大藏兄弟、佐田彦四郎等一散に切懸りければ、山中も後まはらに成ける故、二度の軍に失利無念ながら引にける、

羽倉孫兵衛米子合戦討死 并秋山反心之事

秋山伊織介久家は、近頃尼子方端城所々没落し、味方の氣を屈しける間、手近き米子城を落し、味方諸卒の心を取直さんと思ひ立てける處に、俄に痛邪に被犯出陣難成乍去思立たる事なれば、止みなんも心憂し、逆頼て羽倉孫兵衛元陰を物頭として、目加多采女、同團右衛門、高尾右馬允等馳催し、五百騎計三月十八日守山を立て、船十五艘に取乗、其夜に夜討せんと企みけり處に、米子城番福頼次郎大輔孝興聞とひとしく町家迄出で待けるに、羽倉孫兵衛舟より上り町家を焼拂ひ、軍手強く攻寄ければ、福頼無詮方城に入門戸を閉て不出合、羽倉思ふに、軍には勝たれ共、夜討せざる故、福頼打洩せし事無念也。此勢に杉原と合戦せば、や逆、稗津の町家を焼拂ひ打て懸れば、杉原が聲吉田肥前守元重入江菖蒲等七百騎にて懸合、火花をちらして戦けり。羽倉は兩度の戦に勞たる上、又盛重が三百騎にて後陣より打て懸れば、最早難戦見ゆるに、猶も鎧襖を作り突來るを、太刀にて鎧十四五本程切折別所九郎原權六、杯と言剛勇の者を打留、四天王の荒たる如く、控立てけるが、數ヶ所手負て、浴の方に寄て、郎等壹人と俱に腹掻切て失にけり。殘黨少々有けるを、船に乗て守山さして引入たり。抑此伊織介は、大庭の大宮司秋山三郎左衛門綱平が嫡子にて、勝久公國入の思召立有し時、使を以宣ふは、雲州切返の本望達しなば、山中秋山を兩大老として、恩賞等も拔群

に可宛行と細々頼玉ふ故、元來無二の尼子方なれば、彌以勵忠義、不顧身命所々の合戦に無比類手柄を顯しけれ共、勝久公國入後は、萬事山中壹人執事とし、秋山は平士同然にて左のみ寵愛もなかりければ、行末逆も頼少く思ふ折柄、去る富田攻之節、隆景に攻られ、そゝろに油斷して大勢の味方を失ひし事、無本意思ひ、色々秋山勝久公に教訓せし事、無念に存じ、尼子方に在ては、此耻辱難雪と兼て、憤怒しけるに、此事元春風に傳聞、去は謀を以秋山を味方に可附、逆使者を以色々利害得失を被説、一味於同心は平田近邊にて千貫の地を可加増、元來尼子譜代之家臣にてもなし、今毛利へ被屬候共、さのみ武名之穢とも成間敷、永く神職を相續候て、社可爲本懐と利を盡し被申入れれば、秋山は渡りに船を得たるが如く、大に喜悅し頼て、一味同心の神文を取替しける。依之吉田八郎左衛門直景も秋山を頼み、毛利隨心の由、此事新山へ聞へければ、終に被誅けり。如此名有人に討死し、或は敵方へ降人に出、其勢滅する事大山の崩るゝ如く、武威日々に衰へしかば、毛利の威光は追日増長し、尼子の血脉も此勝久公迄にて可斷絶基也と諸人を苦めけり。

毛利元就公病死山中鹿之助僞て降參 并勝久公隱州落之事

毛利陸奥守大江元就朝臣近年鵬疾に苦み玉ふ處に老衰治するに無術元龜二年六月十四日行歳七十五才にて逝去し玉ふ誠に此大將は天性聰明にして三德兼備の良將故多治比三百貫の地より起り大友大内陶尼子其外三備州之諸士を伐隨へ中國を幕下に掌握し玉ひ敬公方尊君扱又万備万民恩澤の化に誇らしめ玉へば四民の靡く事如風草也依之聞傳々々泣悲む事釋尊の涅槃之岸に生類集て愁傷するに不異此旨雲州高瀬城へ以早打注進有ければ元春愁歎不少此上は供佛施僧の善根は藝州に可被執行間我は吊軍して黄泉の闇地の遺念晴らし奉らん先大山教昭院并末次の山中等を討取て追善とせん物をと不日に軍勢を催しければ三刀屋三澤南條杉原を始とし雲伯の人々并に完戸熊谷佐波益田口羽の者共馳集て一萬餘騎と成ければ同廿二日に高瀬城を打立進み玉へば山中等聞之晝夜軍勢を催促すれ共聞怖て加る勢もなく只手勢四五百騎有ければ元春の多勢に恐れ物の用にも難立見へける故鹿之助情思案して今か程に勇まざる小勢を以吉川の大勢に對陣するならば石を以卵を碎くよりも易かるべし所詮方便を以て一先毛利に下り時節を待ち再大望を可企と思ひ頓て宍戸安藝守隆家口羽刑部大輔通義とに使者を以申入けるは山中儀御承知之通尼子家を再興可仕ため是迄心肝を碎き御敵と成度

々及攻戰候得共勝久公愚昧にして諫言を不納我意の働を以無二之忠臣をも讒言之下に死を玉はり此頃も吉田八郎左衛門中井平藏等を被矢ける罪の虚實をも不被糺近習の讒口一片に成敗被致候間斯迄忠義を存る某も明日讒言の舌頭に非業の死を遂申さん事重々無念に存候間從今毛利家へ降參仕一所懸命之食地を玉はり候はゞ亡命を不顧以往之御用に相立可申と左も禮敬正敷詞を盡し申入ければ隆家通良尤哉と聞受早速元春公へ具に演說有降參和義を被願けるに元春も智勇の大將なれば暫思惟して山中が降參行末誠とは不被思候へ共敵子降る時は助之と言ふ古語に任せ可差免候併余の降人とは違ひ人質坏にては難差置候間各御兩所へ急度預け申也日番夜廻り稠敷預玉へ追て決定之下知可申入と奥深く宣ふ故に降參には極りける頓て元春公對面之後周防國土地にて千貫伯州に千貫を可給旨先尾高の宿に嚴敷警固を据被置けり扱元就公贈位有て從三位に勅許あり輝元公は中納言に任じ玉へり斯て鹿之助は一命有免有といへ共獄屋同然之有様にて被取圍ければ兼て工みし方使も不叶此上は何卒して此處を拔出新山の勝久公と一所に楯籠んと心を碎けれ共可施計もなかりしに元就公輝元公の位階并進に付祝義に取紛れ元春も軍議少し懈怠し玉へは山中使者を以て隆家通良に附て訴け

るは、御敵の張本たる某一命を被有免候だに重々の御恵と存候に、采地貳千貫可被宛行の由御懇篤の程無際限奉歎入候此報恩には、軍卒五百人前之扶持を助勢せられ候はゞ諸浪人を集め四國に渡り、長曾我部を退治可仕と申けれ共、元春承引なし又人數千人の扶持米を助勢せられば九州に渡り、大友を退治仕豊筑を取て御恩を謝し可申と願けれ共更に承引なし、山中思様は我變心之胸中を元春疾悟り知れり去は此處に長居せば事難しかるべし何方へも忍び出素懷を達せはやと思案し、或日赤痢を煩ふと號して晝夜七八十度廁へ行けるに、番人も最早退屈して左迄は不附行故、頓て廁より透垣を越て底樋の水門を抜出、伯州黒坂へ越夫より仁多郡岩屋寺山に隠れ籠ける跡にて番人共騷立、松明を振廻し其所よ爰よと尋けれ共終に行方を見失ひ、尾高の山中を出奔せし由其沙汰隠なければ、同國八橋城に福山次郎左衛門、慈正、横道權之丞、高宗、籠居けるが、南條入道様々に扱ける故、山中落ては此孤城難堪、逆城を明渡し新山へぞ退ける、去は新山を攻落すべし、逆、穴戸杉原口、羽南條三刀屋三澤赤穴を先として其勢都合七千餘騎、敵一人も不漏、逆駒の足を并立次第々々に取巻けば、城中には逆も防戦難成、此小城に大功は難立ければ、不多味方を損せんより明去て、簾ヶ岳と言處に落玉へば、元春續て跡を追ふ故、小船に乗て香賀の浦

へ逃退き、潜門に忍び居て見玉へ共、兒玉内藏介兵糧を積みし小舟に乗て追懸來る間、隠州さして渡り玉ふ、依之、尼子方の城一ヶ所も雲伯の間にはなくして、毛利一統の有となりける、是皆神明の加護に依て一國平定す、逆、杵築、佐陀日の御崎等へ鞍置馬、貳正三、正太刀等迄奉納せられける、誠に永正之頃より今に於て六十余州兵亂に苦み、万民片時も安きに住する事不能しに、勝久公、隠州出發に依て、暫刀鎗の煩ひ絶、萬民堂々の化に誇る粧とぞ成にける、

山中鹿之助、漂泊宮寺寶物押領し、并因伯度々合戰之事

山中鹿之助幸盛は、伯州尾高末石を落て、仁多郡岩屋寺に隠居て、近郷の諸浪人山賊を驅催し、兵糧軍用之爲に、逆仁多郡中寺社の寶物重器を押領し、飯石郡へ出て同宮寺へ押入、或は福祐の民家を追入、惡行無限少しにても支へたる者をば切捨、夫より神門郡宇竜日之御崎、鷺邊の浦々にて、他國より入津の廻船を点し、金銀不殘押ひ取て大社へ出、兩國造は無二之毛利方なれば、押寄合戰して、社内の神寶を可集と從黨者も頻に申ける、去共山中申けるは、當社は國家經營之祖、神國造は穗日の命の正統也、いかに我々斯様に狼籍惡行を爲し難し、國家を經營して當國の民を安穩に治め

ん爲也、當社に於ては用捨可然併度々毛利家より寄附せられたる寶物給はり候へ
 と國造へ訴無承引くば社中の者計打散し可申と評議して、元就公輝元元春より被
 寄附たる鞍置馬杯は奪取宮と兩國造とは妨げざれば國造も道理に服し、誠に鬼神
 無横道逆感じ入米穀十日計の糧を送られけり、夫より鰐淵寺の麓は鹿之助出生之
 地にて、即山中屋敷迎有ける處なれば晝は隠れ夜は出て民屋をなやましけり、又は
 枕木清水寺等にも隠ける故、爰に有かと聞ば彼所に行終に在所を重ねず誠に天狗
 の如く飛行する故、何程心懸玉へ共終にとらへられず、去共雲州にては大望難叶逆
 但馬丹後の方へ越て海賊を語らい、手下の軍勢又四百人に及びければ頼て山名を
 頼み初て軍旗を立て、處處の小城を攻落し小笠原を敵に取て合戦に無隙此年鹿之助
 三十七歳の血氣勇猛之最中也、元龜三年申八月因州巨野郡飯山城に籠ける武田高
 信五百餘騎にて押寄せられ共戦に利を失ひ鳥取城へ武田は引退く、其後度々相合て
 山名豊後終に得勝利しかば是偏に山中が軍功也、逆厚祿を與へけれ共猶大義難謀
 思ける折節、立原源太兵衛京都より以使者急々上京可有之と申越に付、同年之冬に
 至て上洛し、織田信長公に對面し明智日向守が手に屬し居けるが頼て勝久公をも
 呼上せ、大將として集まる者共には山中鹿之助、立原源太兵衛、神西三郎左衛門、加藤

彦右衛門、龜井新十郎、吉田三郎左衛門、森脇市正、横道源介、同權之丞、牛尾大炊介、同次
 郎左衛門、足立治郎左衛門、同次兵衛、進佐吉兵衛等、天正元年十二月京都を立て但州
 へ下り、山名但馬守を頼ける故、武田高信も元來表裏の士故、逆心して又尼子へ志を
 通じけるに付、因幡へ入て十日が間、城を攻取事十五ヶ所、其勢如破竹、依之勢卒も三
 千に餘りければ、私都城を攻、大坪甚兵衛一之、牛尾大藏左衛門尉を打取ん、逆天正二
 年正月大坪と散々戦けるに、山中敗軍しけるが、又武田源三郎、日野五郎八百騎にて
 後陣に加り尼子を助ける故、相引にして其日之軍は止にける、同三月鹿野城より武
 田源三郎、龜井新十郎打て出暫戦て相引に成る、九月廿二日山中、立原、牛尾大炊介、森
 脇市正、横道兄弟、足立兄弟三千五百騎にて鳥取城へ押寄せ、毛利入道淨意を攻けるに
 利を得て勝久公鳥取へ入城し、山名豊國と合戦せられけり、私都合戦に吉川小早川
 四万五千餘騎にて寄玉ふに付、森脇横道、牛尾等降人に出て、吉川元長の手に屬しけ
 る社尼子浪没の前表也、山中も大に力を落し機を屈し、勝久公を供奉し、又但馬へ落
 ける、依之因伯も全く平定して九月廿五日開陣あり、雲州平田へ引入玉ふ、小早川は
 先達て藝州へ下りける、

木下藤吉郎秀吉播州上月城加勢 并勝久氏久生害事

山中等は因伯度々の合戦に失利、木下藤吉に随ひ、幡州に下り、勝久公を大將として、尼子次郎氏久、日野五郎を侍大將として、山中立原其外、福屋彦太郎、龜井新十郎、吉田三良左衛門、河副右馬允、同三郎左衛門、米原助四郎、目黒助次、月坂助太郎、平野源介、屋蒼右兵衛尉、津森宗兵衛、宇山彌太郎、三吉三郎左衛門、小林勘介、神西三郎左衛門、熊谷新右騎門、大塚彌三郎、日野又五郎、田原右衛門尉、大野平兵衛、福山彌次郎、同内藏允、青砥助治郎、中井與次郎、片桐次郎、渡邊内藏介、江見平内、加藤彦四郎、妹尾重兵衛、池田縫殿允、本田平次郎、野津次郎、江見九郎太郎、同源内左衛門、加藤新右衛門、安立次衛、弟慶松、目加多采女、同團右衛門、寺本市之丞、法城寺理安、進藤勘助、秋里目進、左吉兵衛、馬田長左衛門、山佐民部少輔、古志九郎治郎、高橋佐渡守等、都合貳千五百騎、上月城に楯籠りける故、宇喜多和泉守直家より毛利へ追々加勢を被乞に依て、元春、元長、隆景を大將として、天正六年三月十六日、輝元公三軍の命を司り、穗井田伊豫守元清、天野六良左衛門元政、完戸安藝守隆家、嫡子備前守元好、三吉式部太輔隆豊、同新右衛門政慶、高野山五郎兵衛、久代新十郎、檜崎彈正忠元兼、平賀太郎左衛門元祐、同奎之頭、三

村紀伊守、清水長左衛門長治、草薙太郎左衛門景綱、小笠原少輔七郎、上原右衛門太夫元祐、田治部藏人比幡六郎兵衛、伊勢細川の一族、大石志賀、杉治良左衛門、并仁保右衛門太夫隆康、三浦吉田朝倉等、惣旗本には、福原桂渡邊坂口羽國司粟屋赤川也、小早川旗本には、木梨棕梨包久、小泉磯兼井上等、貳萬八千余騎、船手には、兒玉内藏允元助、粟屋元宣、野邊和泉守武滿、同掃部介同三郎兵衛、村上八郎左衛門景廣、同越後守、浦部兵部丞兵船七百艘にて押寄る。元春には、嫡子元長、二男左近允元氏、三男民部太輔經言、毛利七郎兵衛元康、同少輔次郎元秋、山内新右衛門隆直、同刑部少輔、益田右衛門佐元、鮮羽根兵庫介、佐波越中守、同又右衛門、都野彌次郎、三澤三郎左衛門、爲清、嫡子攝津守爲虎、完戸五郎兵衛、多賀喜三郎元忠、天野紀伊守隆重、同民部太輔元珍、三刀屋彈正忠古志、因幡守重信、湯佐渡守家綱、杉原播磨守盛重、嫡子彌八郎元盛、二男又次郎景盛、出羽小輔次郎元祐、赤穴右京亮、有地左近、同左京亮、南條伯耆守元續、小島左衛門進元衛、山田出羽守重直、小森和泉守、湯原彈正忠元綱、吉田肥前守、日野左近、福賴次郎、大輔元秀、同藤兵衛、周布左近、大夫元城、祖式部少輔元勝、久利三河守成勝、都治岡本刺東多利小曳等、惣旗本には、宮庄今田香川桂小坂伊志、篠栗屋森脇堺山形都合貳千五百餘騎、雲州富田を立て、播州上月表へ出張ある。宇喜多直家も、壹万五千餘騎にて備たり。

彼は六万八千騎上月城を十重二十重に取巻て其楯幡鎧長刀は稻麻竹葎の如し、羽
 紫藤吉秀吉聞玉ひ信長へ加勢をぞ被乞けるに荒木攝津守に壹万騎添て被差下、秀
 吉此勢を合て四万餘騎四月末上月救兵として打立惟任日向守筒井順慶武藤彌兵
 衛瀧川將監を引率し信長は攻上玉ふ故、十万に過たる加勢有て、高倉山に陣營を輝
 す、勝久公大に歎玉ふ處、合戰數度迫合、雌雄日々に變轉して、或日荒木村重敗軍せし
 に依り、秀吉公も上月城を開陣し玉へば、信長公も京都に有て播州下向を被止けり
 依て城中以之外あきれ、果實の山に入て空しく歸る如く、只忙然として有ける故、山
 中立原も無詮方降人に出ける、尤城を明渡んと申入れれば、元春隆景無承引勝久公
 切腹に於ては諸卒の命は助くべし、數十年の怨敵の末なれば此時社根葉を可絶と
 返答ありける故、無是非爲士卒勝久公切腹せらるべきに定りける、則劔を提て一句

寶劔有手、殺活臨時、這箇是殺活、自在底那箇、

勝久末後の一句良久くして曰く

都來劃斷千差道、南北東西達本郷

と謂もあへず腹十文字切玉へは、池田甚三郎久親介錯す助四郎氏久も續て腹切玉
 へば、加藤彦四郎政貞、神西三郎左衛門元通、池田甚三郎も潔く自害して名を後代に

止めたり、立原源太兵衛病身に依て沿に城を出立都に上り、蜂須賀彦右衛門に暫く
 身を寄けり、日野五郎は從兵百騎計を幸し出發す、隱岐國法性寺因快も靜に城を出
 たり、山中鹿之助は勝久公と一所に生害すべき者なりしが、胸中に思ふ旨有て勝久
 公氏久公と密計に合せ暫一命を助り手の者五十人計引連て元春の陣所に降けれ
 ば頓て備中松山へ召具し可下迎、粟屋彦右衛門、山形甚六五百騎相添て旅行に趣け
 るが、備中國甲部川阿井の渡にて天野中務少輔が家人、川村新左衛門と言者方便寄
 て丁と切る、山中袈裟懸に深手を負ながら川村を取て押へける處、福岡彦右衛門馳
 寄つて山中が首打落す、行年三十九才供に連れし柴橋太刀之介をば、渡邊又左衛門
 轉右衛門尉貳人偽寄て討果す、法性寺は作州邊迄落延けるに、香川光景が家人三宅
 源四郎跡を附込美甘新庄にて戦ひ終に討取ける、抑尼子再軍威を震事は專鹿之助
 が智仁勇の内より出たり、去ば勝久も大將の號を立氏族を顯し玉ひしに、天正六年
 七月十三日尼子末葉迄斷絶の時至れり、從兵軍功の者迄命を落し、或は敵家に膝行
 頓首して座を給る有様、盛者必衰の理眼前の看也、痛哉勝久公惜哉山中、此度上方勢
 纔に、一戦に機を屈し引退し、上月を不救事は宮部善祥寺が頻に秀吉公を諫めし故
 文武に恰き藤吉も十万の勢を引去り、尼子を見放し玉ふ事生涯の不仁武道の瑕瑾

也。世上專風聞也。併是も尼子の武運盡くる時節到來して、宿善未生之約束ならん。秦始皇六國を併吞し、咸陽宮を輝せし威光も、只三世に不滿して灰塵となり、項羽が貫山強勇も匹夫より起りし高祖の爲に烏江の浪と消ゆ。誰か富貴を萬代迄持んや。

田中三良左衛門 并熊野山物語評判之事

富田城名有武士も敵と成味方に返り、度々變心しけるに弓頭田中三郎左衛門去る。永祿年中迄は晴久公に隨心して所々軍に出て功名をも顯しけり。其後合戦又は勝久公國入以來は、此田中終に着到に不入生死如何ぞと尋るに、行方不知。富田の朋友たる人に彼が成行を問へ共、是又其終を不知。平生三郎左衛門が風儀を聞くに、第一弓馬道に秀で諸藝も富田家中の冠たり。雖然歳四十歳の頃迄も獨身にて妻女も不入。兼て色慾を不好、食事は春秋共に一食にして、服は寒天凍雪の時も布子一重也。且家宅に財寶を不貯、只武具は馬具、戰具、六具物之具は當時有懸りの入用に任せ貯置。其外之器財は分量不相應に不求儉約、質素にして君に仕る事忠義尤切也。生得正直にして少にても曲れる者は常談にも不加。直成者は晝夜親み一坏の酒をも共にす。無益之殺生を禁じ肉食をせず、然るに赤穴合戦之刻手負て後は兎角多病にして宮

仕も難成旨晴久公へ度々及訴、詔弓頭の職分を止常に深窓にありて書籍を食とし、無用之者には對面せず。賢人異相之身持なりしが、何日頃か行衛不知家宅には僕從計り、殘居て主人の有所努々不知事。社不審なれ、然に天正の末に至り、富田在邊の者に幸阿彌と言者あり、伊勢參宮より八鬼山を越熊野の參詣す。三山順禮して那智の瀧爲一見、山深く分入ければ、終に道を踏迷ひ、峯に上り谷に下りければ、人煙も絶何れの方に人家有共難辨。凡三四里が程は入込たりと心中に覺ける時、頻に喉乾ける故、谷底に水の流るゝ音幽に聞へければ、彼水音を知邊に谷に下り、布幅程の谷水にて喉を潤し見れば、彼細流の岸に南天の實一房懸りて有。幸阿彌是を取て、扱は此水上に人家ありと見へたり。尋行て那智本宮何れ成共人里への道を問んと思ひ、悦て彼流に添て上るに人家更になし。結句細谷川も水絶て、古木生繁り可通一足懸りの道もなく、十方に呉けるが無詮方又峯に上り、責て東西南北成共日輪の全英を以考見んと思ひ、暫上りければ岩窟多き處に至りける。其内に一孔の洞穴の口に、恐氣成異跡の人、有て幸阿彌に向て曰く、凡人は何れの者にて何として此雲山へは來りしぞと言ければ、幸阿彌額の汗を乍拭顔を上。某は雲州の道者熊野三山順禮の序に、那智の瀧一見仕度存に付、深山に踏入候處に、存之外道筋を失ひ、何と尋候ても人煙

を不見日は早西山に春候へば今宵は當山に一宿仕定て狐狼の食と成果可申や、あはれ異人の御恵を以麓の人里へ出る道を教玉へと恐怖しながら涙と共に申ければ、異人打笑てありしが、又向の山より遙遠若に見へて七拾歳計の老人身には木綿と見へて破たる一重を着し、杖にすがり彼所に来りて異人に禮拜し、其後幸阿彌を見て、當山には珍敷凡人哉、汝何國の者にて何として爰へは來しやと尋ければ、幸阿彌申様雲州富田郷の産人、那智山より道に踏迷ひ此處に參候間、何卒人郷近き道候はゞ御慈悲を以被御教下候へと申ければ、彼老人近く寄添、雲州富田と言は我も床敷事有、更ば富田城は如何なりしぞ、尼子毛利の勝負は何れが勝となりしぞ、田中屋敷には何と申す人住居するや、委く語り聞せよと言けるに、幸阿彌申様富田合戦は毛利方の勝利、尼子滅亡にて候故、城主は只今吉川殿預居玉ひ、搦田中屋敷と申は奉存候へ共、廿六七年前に田中三郎左衛門と申物頭の武士居玉ふと申候、屋敷には只今は吉川の家臣桂殿御住居候と申せば、彼老人聞て、尼子は何れにて亡候ぞ其名は何と申けるやと問、幸阿彌申けるは、尼子晴久公急死之後は、嫡子義久公暫家督し玉へ共、終に毛利に降り、御兄弟共に藝州へ下り玉ふ、其後新宮之誠久公の末子、勝久公を山中立原の人々取立、大將とし玉へ共、是も御運拙く十歳以前播州上月城にて

山中神西の人々と共に御生害有之と承候、依之只今は尼子の一脈雲州には無之候然共國中は暫靜論仕候又國士にも三澤三刀屋赤穴等計如前盛衰無之由承候と申ければ、老人兩眼に涙くみさて誠久が末子とは新宮没落の時は只二才成しが、晴久何と尋被申ても行衛不知しが、後には名も勝久公と號し暫も尼子の家名を被起し、由山中立原も定て若手の者共ならんに、末の代にも斯る忠義の者出來しかと曇り聲に被語り、幸阿彌始終を疾と聞て申様抑、御老人の御名は何と奉申やらん、出雲の事跡を能御尋あり、又御物語の赴返々も御名床敷奉存と申せば、我も富田の田中屋敷に生し者也、今は此老仙の御弟子と成、久々當山に住み、靈芝を捧げ方外之術を受申す也、元の名は語るに不及、連、本名は不被明、更ば汝を明日は人倫近き處迄連行ん、今宵は此洞穴の前に伏よ、何の恐敷事もなし、狐狼野干の恐れもあるまじ、連、二人の老翁は尙山深く出去て幸阿彌壹人残りける、日も既に暮ければ、柴を爰に物寒く一宿しける、明れば未だ寅刻と覺敷に、彼老人來り、人里へ連出にけり、是必定田中三郎左衛門ならんとぞ語りける、又或説に、尼子家の模様を見るに、晴久公義久公不義にして斷絶すべき家運也と見切ける故、幼稚の氏久を盜取りて、逐電し、蜂賀彦右衛門を頼み、氏久を養育し、世の成行を見居ける處、勝久も上月にて討死し、山中等も被

討神西を始め深く自害せし由聞及居ける處に、其後立原源太兵衛上月城より落て蜂須賀彦右衛門方へ便り來る故氏久を立原に渡し、其身は染衣の姿となり行脚に出ける由何國にて果たるや其終焉を不知と也、此兩説後世能々可被定也、惣て尼子家武勇の譽有者上月にて討死もせず、毛利にも不降、其行衛不知者大勢也、其跡を隠し民間に蟄居する者も有り、中州武田越後謙信、或は北條又は信長家へ加りしも有是等の人々は責て飢命をば繋ぎぬべし、山野江海に逃迷妻子眷族を引連道路に袖乞し草上を袞に漂泊する浪人幾千人ぞや、十一ヶ國の本城落却せし事なれば榮枯地を替愛樂時に轉化し、昨日迄は塵を拾り尊敬せし民間の者共、今は落人の素浪人と見るるを不知顔して不寄添様々會釋する有様痛敷共哀共武士の成果程難面かりしはなかりける、昨日の錦今日の小藪皆人界の常住也、憤ても可憤は世の盛衰恐ても可恐は喜怒哀樂の四情也、君壹人の滅亡は下万人の苦みと成、田中が如き早く方外の道に入し者は誠に天上界と可謂哉

大内毛利尼子三家盛衰評論之事

軍役を逃れたる遊士集り閑林に酒茶の世話に、往古當代の治亂諸家の盛衰四方山

の花月共靜に語りけるを聞に、或人曰盛者必衰之常談誠哉、大内家は防長豊鏡を掌握し官位は三位二位を獲し、被免昇殿職は一天の管領迄に至り、位階職祿肩を并る者もなき武威熾盛の家ながら、譜代の家臣陶尾張守隆房に被惱終には小身より經上りし毛利の爲に琳聖太子より三十代輝々たる武威を被破、又尼子家は佐渡判官道譽より榮々たる京極尼子の家名十一ヶ國を切取て合國し其武勇に靡しに是も毛利の爲に十世を不滿斷絶す、毛利は三百貫の多治比より起て尼子大内の大家を亡し、尙も不飽足、大友龍造寺嶋津等をも惱玉ふ時を得て官位職祿重疊成事何ぞ元就公智仁勇の内德計に如斯英名領國を得玉はんや、尤未生の果報に依て也、未だ尼子に差て背玉ふ心底にもあらざれ共、晴久公短慮にして卒爾に毛利を敵に取て天文九年藝州吉田へ大勢打向ひ玉ふ故、無是非元就公も敵の色を出し玉ひ、是迄左のみ親み恩澤之情もなかりし大内より加勢せられ合戰に勝玉ひてより終に尼子毛利永く牢楯と成も巧まずして毛利の善業の致所也、又纔多治比にて三百貫の分地に居られしに、不思議兄與元甥幸松丸殿卒去し玉ふ故、元就公本家三千貫の地を得玉ふも不好して自然の德也、大内家にも難動は陶なりしに、尾張守謀反して義隆公を亡ける故、元就公は結句義隆へ忠臣と被呼、陶を亡し義長を退治し、自然に防長豊

筑の權を取玉ふも不招して得玉ふ果報也。尼子の大敵と合戦に取組勝敗半成るに大友と和睦可有と將軍より聖護院殿を被差下終に和平有て尼子一片の敵と成心易く雲州に在陣し玉ふも折社あれ此時大友と尼子と兼て申合せ之通東西より攻寄は、何程軍智の元就も防策可給に不望して一方は和平して思の儘尼子と合戦し玉ふも宿前の果報也。如是諸事一切手合能事節到來するに乗じて爲す事も計る事も皆符節を合たる様に善事に赴けるは、前生之善因未生之積善之余慶する故也。何ぞ元就公の智仁勇計にて大利を得玉ふといはんや、張良程之智仁も余命は後漢の初迄ありながら末迄を得不計和漢古今の大智と言し孔明も半途にして卒し終に大功は成就せず、是皆以運には智仁勇も難用大内尼子の多勢は皆愚鈍臆病にして毛利計才智勇猛成にはあらず、既に大内家には相良遠江守武任治泉判官隆豊杯と言智謀軍術拔群の謀師有勇は、陶杉内藤弘中黒川連万夫不當の英勇あり、尼子にも龜井山中赤穴神西宇山等之智勇合國に名を觸し人傑有、又三刀屋三澤若林立原熊谷森脇等古今獨歩の大勇あり、彼は何ぞ毛利吉川小早川完戸熊谷等が智仁勇に劣んや、去れ共運には傾く時は金石の如き無二之味方も、指て可含遺恨もなきに敵と成味方へ戻るといへ共却て疑ひ寄られ軍中一和ならずして終に敗北を取事只主

將の運に依る士卒の剛愎に不依、勿論尼子方には新宮父子三人之猛勢勇烈宛も如神靈思ひ見るに彼に比すべき大勇は大内にも毛利にも不當、去共運の窮極は是非もなし、讒者の一舌に依て亡び玉ふ、是も宿善之惡因也と謂ければ、聞人實尤也、乍去運にも五運有、又運速あり所謂五運とは聖人治國といへ共其身短命にして永民萬々之化に、訟事不能或は天災起て水旱の愁あり、是を天運と言ふ、又惡をなして亡び善をなして世を持つは人運と言、又身差當て惡行善根もなければ、共世の盛衰に隨ひけるは世運也、其身不來共自然に過に依て報ゆるを事運と言、又兼定まる事有て榮るも亡るも時の義に隨ふを義運と言、如是の五運分りければ、押併て過去未生之因果とは難申、今說玉ふ三家の興廢も皆其品有て可亡理有て亡び可榮道有て榮、先尼子方にて申さば、勇は凡天下にも秀たる大勇ありといへ共智と仁とは關たり、其故は晴久公智淺くして近習小人の讒言を信じ、莫大之勳功ある者を追退け、又は死命を玉ふ骨肉同胞之新宮黨を亡し玉ふ事、無智故、讒口を信じ、無仁故に親きを不惠適諫言あれ共諫を不納我意計に、政道を執行玉ふに依て、大老舊臣奉行頭人も其職分之名而已有て道を行事不能、幕下も旗下も常に疎遠にして賞を輕し、罰を重じ玉ふに付頼少く思ふ武士或は敵と成、又は降禮を他國にして見限出奔す、是尼子家智

仁に闕け猛威計にて終に可亡失害也。損大内家は義隆差て惡政もし玉はず去共代々武威を以治めし家風成るに其根本の武事は怠り其家にも非る詩歌管絃朝家の弄をなし風雅逸遊を好み妙香名花の翫に月日を送り玉ふ故妓舞音樂に秀る者莫大之恩賞寵愛に預り詩歌舞妓の宗匠は所領を賜はるといへ共軍術武藝の達人は自然に疎畧に預る依之一家中を始幕下の人々迄軍學劍術の修行は打止鼓を打音樂を習ひ立花を好み風月の歌の會をなし武事自廢却して家人陶に被備合戦の場にては歌人樂人茶師等は兵糧を社費しけれ鎗矢一筋の爲にも不成治國には文を以し亂世には武を以すと言事を知り不給故に國家を失ひ玉ふ事仁は有ながら智と勇に闇き失害也又毛利三百貫の小身より起り文武を磨き仁愛を以武士を惠み勇猛を以敵の威を挫き罪を輕し恩を重し神佛を信仰し天子を敬ひ公方を勞り其上吉川小早川完戸熊谷等の宗徒之人々一和平等にして牟楯之失害を憤み甥の輝元公を大守と仰ぎ叔父の吉川小早川等も其下知を守り少も不足之心を不挟一族一軀分身と成て異性の敵を亡さん事を謀玉ふ故作事成就せずと言事なし軍卒を遣ふ事我四肢を動かす如し嬌奢を不好人を不侮萬事危直なれば智も仁も勇も兼備し武將の五事の戒を能慎み玉ふ故小身より出て終に尼子大内の大敵を亡し玉へ

は皆以智仁勇の得利也宿善之因緣計にあらんや與廢何れも得失利害存亡にも其據ある也と言ければ傍の人皆尤なりとぞ聞にけり

此書は河本大八隆政が遺書也隆政二十歳之時藝州吉田合戦に陶隆房と戦ひ組討せし時深手を負終に足不具に成淨安寺之傍に閑居し風水山月に澄心老毫之後終る依之此記は河本家の秘録にして則彌兵衛隆任が子孫に代々相傳して他生之不知實錄也隆政又名をば靜樂軒と言ふ

雲陽軍實記 大尾

明治四十四年十一月九日印刷
明治四十四年十一月十六日發行
明治四十五年四月二十五日第三版發行
大正十三年九月二十五日第四版發行

定價七拾錢

編輯者 井原大之助

發行兼印刷者 勝部本右衛門

印刷所 松陽新報社

發行所 松陽新報社出版部

電話長 三三三番
電話長 三六九番

終

